

平成二七年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業Ⅱ

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館五周年記念

講演会「鳥居龍蔵の再発見―国内外の視点から―」 参考資料1

図説 鳥居龍蔵伝 (複製版)

複製にあたって

この資料は、鳥居博士顕彰会『図説 鳥居龍藏伝』（鳥居博士顕彰会、一九六五年）を複製したものです。

本書は、刊行から半世紀を経たものですが、鳥居龍藏の生涯や業績を知る上での古典的文献として高く評価されています。しかし、絶版となつて久しく、容易に入手・閲覧することができない状況にあります。このたびの講演会「鳥居龍藏の再発見―国内外の視点から―」では、龍藏及び関係資料の再評価を目指すものであること、発表や講演において述べられる龍藏の足跡について視覚的に把握するために役立つものであることから、本書を複製し参考資料として配布するものです。

なお、近年の龍藏に関する研究の進展により、本書の内容には見直すべきことが少なくありませんが、あくまでも「古典」としての価値に鑑みてご覧いただければ幸いです。最新の研究については、徳島県立鳥居龍藏記念博物館の刊行物や鳥居龍藏を語る会『鳥居龍藏研究』一～三号などをご参照願います。

説
鳥居龍藏伝

鳥居博士顕彰会



鳥 居 龍 藏 博 士



き み 子 夫 人

序

わが郷土徳島が生んだ偉大な先覚者鳥居龍藏博士の生涯は、独学力行、よく英知をもって、考古学・人類学上の探査研究を行ない、前人未踏の境地を拓いたものであって、われわれの心に深く静かな感動を与える。

博士の驚くべき高遠該博な学問は申すまでもなく、貴い内助の功を果たされたきみ子夫人の生活と、姉弟相携え、一家あげての学究生活を知るとき、われわれは自ら襟を正しつつ、郷土が生んだ偉大な先輩をもつよるこびを感じる。

幾百千年の後までも、語り継ぎ、学び継ぎたいものをと念じて、大鳴門の景観を眺望する鳴門市妙見山頂に白壁の天守閣なる鳥居記念博物館を建設したのであったが、この記念館が本県教育・文化の進展に果たす役割はもとより斯学の興隆に寄与することは、まことに大きいものがあると確信する。

この鳥居記念博物館の運営に参与するとともに、鳥居博士の業績を顕彰する事業を行なうことをおもな目的とする鳥居博士顕彰会においては、まず多くの人たちに鳥居博士の人と業績についての関心と理解をいただきたいと考え、「図説鳥居龍藏伝」を編集・刊行したのである。

本書の読者は、鳥居博士の高明な頭脳がなし得た、あるがままの偉大な生涯や、誕生から結婚にいたる人間的成長の過程と環境を知るとともに、その学問的業績を系統的に理解されるであろう。

編集にあたっては写真資料を主として、やさしい用語を使い、わかりやすく読みやすいように努めた。それによって青少年にも読まれ、広い読者層に迎えられるものと思う。かくて鳥居博士の人と業績がこの図説をとおしてわれわれの生涯の指針ともなるべき心のともしびとして見出されるよう祈りたい。

本書は、鳥居記念博物館初代館長としての県教育長仁科義之君の提言により、編集委員としての郷土史家岩村武勇君の献身的努力による労作であり、令息鳥居龍次郎君もこれに対し誠実な協力をよせられた。さらに、関係資料の借用に関して絶大なお世話になった東京大学理学部人類学教室、ならびに本書編集の広汎な資料を提供していただいた多くの関係機関の諸賢各位にあわせて深厚の謝意を表すものである。

昭和四十年九月一日

鳥居博士顕彰会会長
徳島県知事

原 菊 太 郎

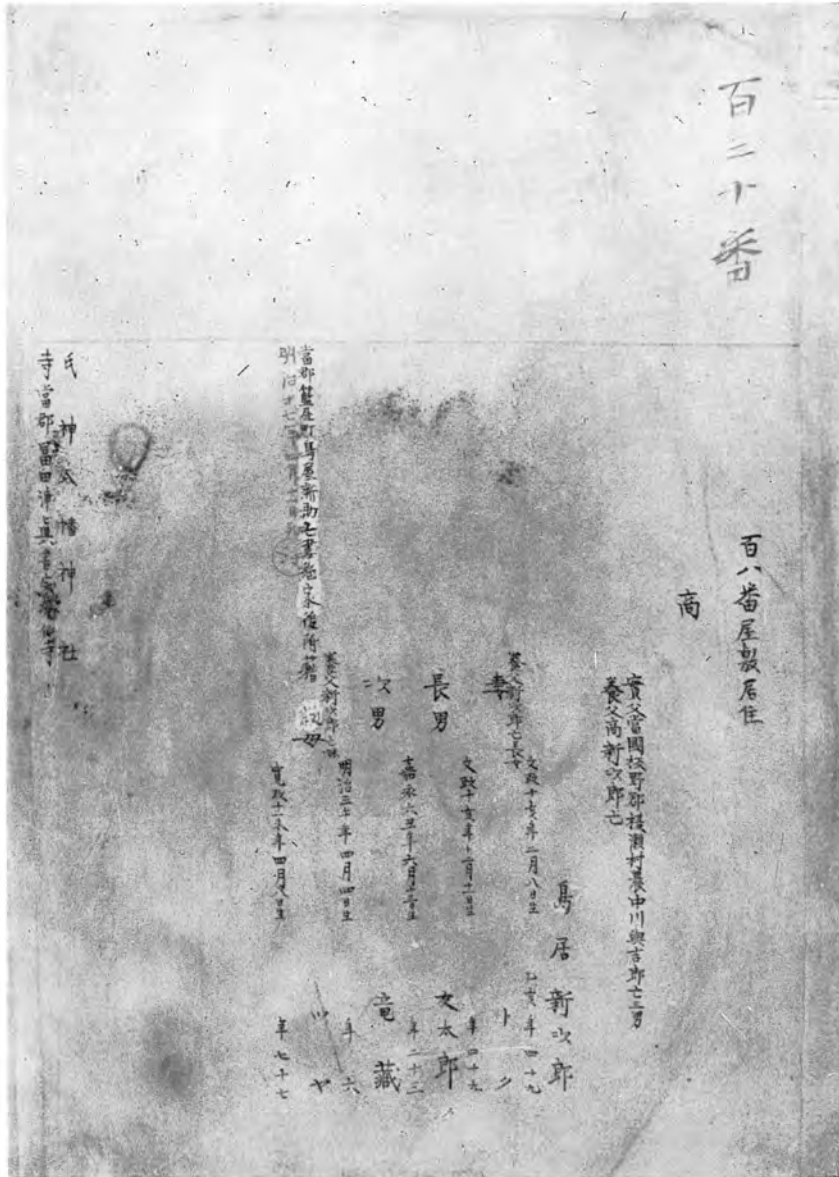
例 言

- 一、この書物は鳥居龍蔵博士夫妻の業績をひろく理解していただくため編集したものである。
- 一、写真を多く収めるため、文章はできるだけ簡結にした。
- 一、編集はだいたい時代順にしたが、写真の配列・文章の記述ともに必ずしも年月順になっていない。それを補うため巻末に年譜を掲げた。
- 一、夫人の名は、結婚以後は戸籍によらず夫人自身が常に愛用していた「きみ子」とした。
- 一、年齢は満年齢で示した。
- 一、地名の記述は博士が探検・調査した当時わが国において通用していたものとし、参考のため現在の地名を（ ）内に示した。
- 一、研究業績の章は、地方別に地図・調査研究の内容に関するもの・著書の順に記載した。
- 一、地図はなるべく博士の著書に掲載せられたものを用い、やむを得ないものは発行の年がなるべく探査の年に近いものを用いた。
- 一、著書の説明中、Pは本文のページ数を示し、cmは縦の長さを示したものである。
- 一、博士の探検・調査は各地方とも多方面にわたっているが、この書物には地名・内容とも特に著名なものだけを掲げた。

目次

| | |
|------------------|----|
| 一、誕生 | 一 |
| 二、鳥居家 | 四 |
| 三、幼少時代 | 五 |
| 1 幼年のころ | 五 |
| 2 小学生のころ | 六 |
| 3 独学 | 九 |
| 4 人類学会入会 | 九 |
| 5 徳島人類学材料取調仲間の組織 | 二 |
| 四、東京遊学 | 一五 |
| 五、結婚 | 一六 |
| 六、東京帝国大学在職時代 | 三 |
| 1 教職 | 三 |
| 2 研究業績 | 一四 |
| 満州の調査 | 一四 |
| 台湾の調査 | 一三 |
| 北千島の調査 | 一四 |
| 西南支那の調査 | 一四 |
| 蒙古の調査 | 一五 |
| 朝鮮の調査 | 一七 |
| 樺太の調査 | 一八 |

| | |
|------------------|-----|
| 東部シベリアの調査 | 一八 |
| 国内の調査 | 一八 |
| 3 学会 | 一八 |
| 七、勲章と学位 | 一八 |
| 八、国学院大学・上智大学在職時代 | 一九 |
| 1 教職 | 一九 |
| 2 研究業績 | 一九 |
| 山東省の調査 | 一九 |
| 満州の調査 | 一九 |
| 蒙古の調査 | 一九 |
| 南アメリカの調査 | 一九 |
| 3 学会 | 一九 |
| 九、燕京大学在職時代 | 二一 |
| 一〇、死去 | 二九 |
| 学問の開拓者 | 二〇 |
| 内助の功をたてた夫人 | 二六 |
| 一一、人材の輩出 | 二九 |
| 一二、徳島県立鳥居記念博物館 | 三三 |
| 付、年譜 | 一四〇 |



鳥居家の戸籍
明治8年の戸籍。 徳島市役所蔵。

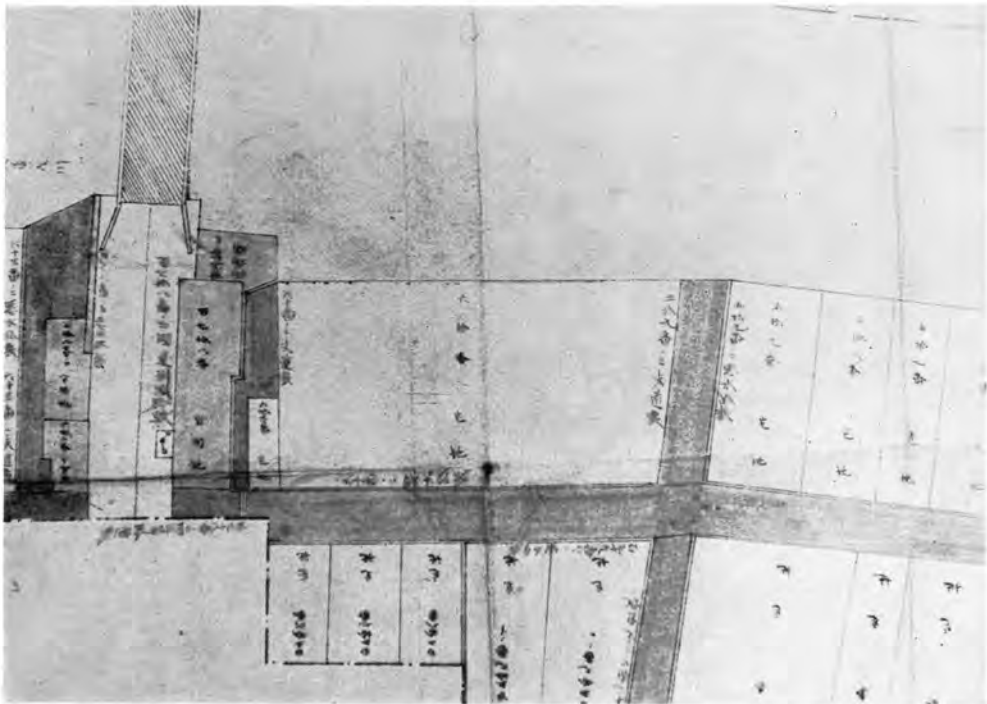
文学博士鳥居龍藏先生は徳島県の生んだ世界的人類学者・考古学者である。

一、誕生

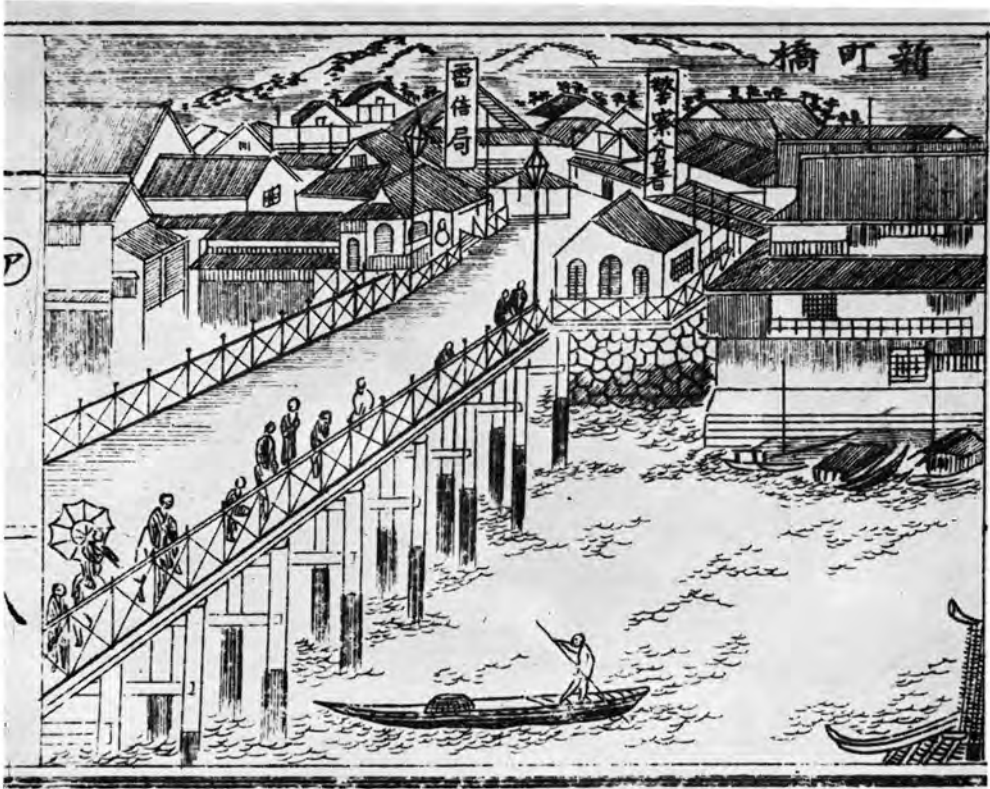
先生は明治三年(一八七〇)四月四日阿波国名東郡徳島船場町(現在は徳島県徳島市)で生まれた。



徳島独覧図
林省三著。明治9年発行。



名東郡徳島船場町地籍図
明治20~22年作 徳島市役所蔵。「五拾九番 宅地」とある所が現在の東船場町1丁目2番地で、ここに鳥居家があった。図の左上の斜線をつけた所が新町橋である。



幼少時代の生誕地付近

明治10～17年ごろの新町橋。「南海徳島豪商銘工魁」（川崎源太郎著）に掲載。鳥居家はここの橋を向うへ渡った左側の沿岸にあった。



生誕地付近の現状

空地の左の大きい建物のある場所（東船場町1丁目2番地）に鳥居家があった。



大滝山持明院境内図 渡辺広輝画

大滝山持明院建治寺（本尊薬師如来）は寺町にあった。明治初年廃絶し、薬師堂（本堂）だけ「滝の薬師」と呼ばれて信仰せられていたが、昭和20年戦災で焼けた。



大滝山薬師堂の石柱

大滝山薬師堂の石段の欄干の石柱。高さ2.6m、直径0.6m。先生の祖父新助が寄進したもので、鳥居家の富裕をうかがうことができる。両方の石柱を寄進したが、一方は火災でいたみ文字がわからなくなっている。

二、鳥居家

鳥居家は町人で、明和・安永（一七四〇～一七六〇）以来ここに居住し、世々阿波藩の煙草司をつとめた煙草の大問屋（註1）であった。

第五代新助（祖父の）の時代が全盛時代であった。その一人娘とくに板野郡榎瀬村（現在、徳島市）の中川家から岩吉を婿養子として迎え、新次郎（註2）と名のらせた。先生はこの新次郎ととくの次男として生まれたのである。

〔註1〕屋号は「登利新」といい、その印は今を用いた。
〔註2〕新次郎は鳥居家の六代目となった。



錦絵「三国志、長板橋の図」 国芳画

中国三国時代の勇将張飛が石橋の上で、乗馬して敵軍をしかりつけている絵。鳥居先生は明治7年4歳のころこの絵を入手してから浮世絵に興味をもつようになった。

三、幼少時代

1 幼年のころ

幼時からいろいろの物を収集することに興味をもち、絵本・錦絵（徳島では江戸絵といいた）・番付（芝居その他）・面子（土で作ったかんじ）・写真絵などを集めた。

母はなんでもきちんと整理しておく性質であったので、先生も自然に収集したものをきちんと整理するくせがあったようである。これがのちに研究資料を収集し整理することによって研究をおこなう人類学や考古学において世界的に有名となったものになったと考えられる。



署 名

右の写真を入れた桐箱の裏に書いたもの。



少年時代の肖像

明治14年（1881）11歳のときのガラス板写真。

2 小学生のころ

明治九年（一八七六）六歳で観善小学校^{〔註1〕}に入学した。

家で思うままの生活をして来た先生は小学校に入ってから気ままなことができないので学校になじめなかった。

学校ぎりではあったが、教科書「小学読本巻一」の最初に掲載せられた世界の五人種の文と挿絵がひじょうに興味をひき、これから人種のことに関心をもちだした。

後日、先生は「日本において早くこの世界の五人種の記事を小学読本の巻頭に取り入れたのは、実に卓見であったと思われる。私が今日不肖ながら、人類学を専門とするようになったのは、しらすしらすの間に、この小学読本五人種の記事の影響と考えられる。」と述懐している。

〔註1〕観善小学校 寺町還国寺の一隅にあった。明治十一年寺町小学校と改称した。現在の徳島市新町小学校の前身である。

師範學校編纂

小學讀本 卷一

明治七年
八月改正

文部省刊行

小學讀本第一

第一

凡地球上ノ人種ハ、五ノ分ニ分ル
 一、亞細亞人種 歐羅巴人種
 二、馬里亞人種 亞非利加人種
 三、蒙古人種 南極人種



田中義廉 編輯
 那珂通高 校正

明治七年八月十二日

夫、日本人ハ、亞細亞人種の中あり、
 人ノ賢きものと愚劣なるものとあるハ、多く學ぶ
 と、學びざるものと、由りてあり、賢きものハ、世ニ用
 ありて、愚劣なるものハ、人ニ捨てらるること、常
 の道なれば、幼稚のときより、能く學びて賢きも
 のとあり、必無用の人も、ある
 ことあると、
 幼稚のときハ、此、日用付器の
 名を記して、其用の方を、知る
 べし。○筆の字を寫し、又書



寫す具あり、○算盤ハ、物と數ふに用ゑ供は、○文
 庫ハ、書籍を納る、箱あり、○算筒ハ、衣裳などを
 入る、器あり、
 又平生、食をべきもの、名を記し、これを調理
 して、食物とふは、法を、知るべし、
 ○食物とふをべきもの、種
 々あり、





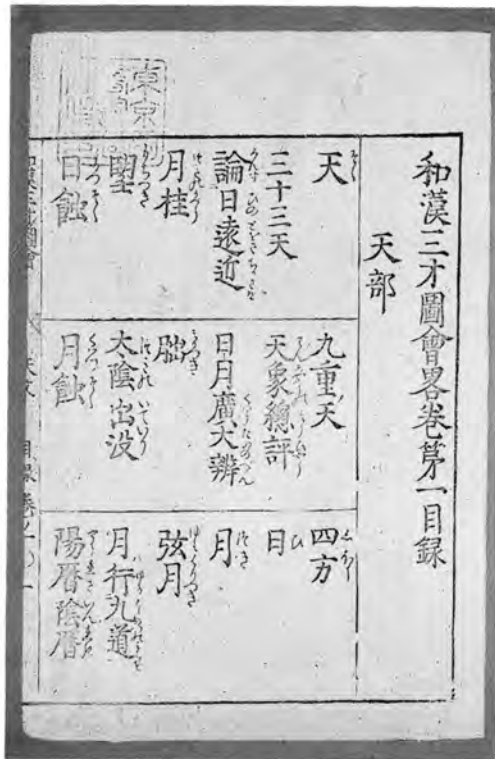
富永幾太郎先生

富永先生はときどき児童を大滝山上に連れて行き、四方の景色を展望せながら地理・歴史の話をし、また山上の岩石や植物などにも注意させた。この先生から受けた感化はたいそう大きかった。

また、小学校時代に富永幾太郎先生の感化を受けて人と自然との関係に関心をもち、自然に親しむようになり、その後歴史・地理・博物などの書物を読んだり、古墳や石器を探すことに興味をもっていた。

地理・歴史が好きで、好きなことばかり勉強したため小学校を二回も落第し、ついに中途で退学した。

その後は家庭において独学で高等小学校程度の学習をおこない、かたわらいろいろの読書にふけた。



和漢三才図絵

寺島良安編、正徳2年(1712)の自序がある。105巻、81冊。江戸時代最大の百科事典。鳥居先生は小学生のころこれと骨董集とを愛読した。



骨董集

山東京伝著、文化10年(1813)11年(1814)発行。3巻4冊。近世の風俗(生業・服装・遊戯・食物など111項)の起原・沿革を考証したもの。

東京人類学会雑誌

第三卷 第十四号

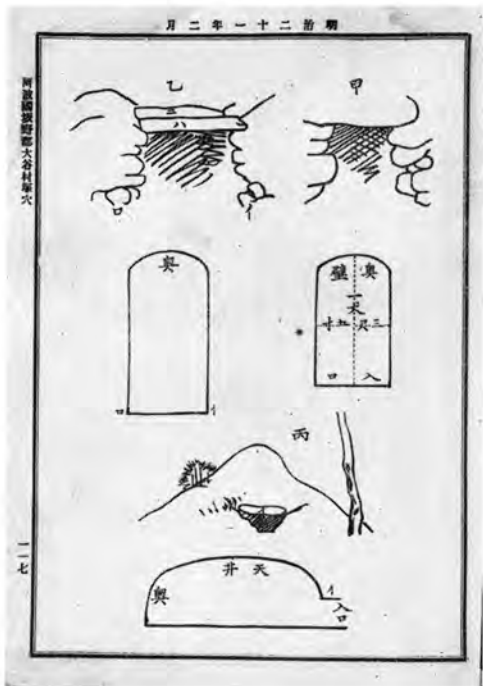
東京人類学会

明治二十一年二月

目録

- 記事
 - 第三十八會
 - 土佐國板野郡大谷村塚穴
 - 附録
 - 肥後國山本郡内村塚穴
 - 石見國美濃郡田村塚穴
 - 年始風俗雜考十件
 - 朝鮮第一回「江蘇氏」報告
 - 第二十二回附録
 - 雜記
 - 金部所用宣問
 - 金部所用宣問
 - 其他報告

(坪井正五郎)二三頁
(長瀬 正徳)二三頁
(島居 忠雄)三四頁
(深津 忠雄)三四頁
(高井 尚太郎)三四頁
(渡辺 清三)三四頁
(長瀬 正徳)三五頁
(島居 忠雄)三五頁
(深津 忠雄)三五頁
(高井 尚太郎)三五頁
(渡辺 清三)三五頁



阿波國板野郡大谷村塚穴 肥後國山本郡内村塚穴
 阿波國板野郡大谷村塚穴 (のぞ見丸) (一)の穴并石は新石を以て掘り、も現存する(以青
 才)ト申す。此等ノ遺跡一統ヲ可ク決シテ、斷リ形迹甚多
 シト申す。其跡ヲ以テ、列ス可ク、先ツ其
 五ノ塚ノ塚穴ノ大塚ヲ以テ、本會諸君ノ高評ヲ蒙リ、トモ
 諸君一併、塚穴ノ構造ヲ、寫シテ、有テ、塚穴ノ構造ヲ、
 一併、本會ニ報告ス可シ。
 坪井正五郎申す、私は本會第二十四會に於て、塚穴は穴
 居にあらざるの説を述べ、まじが其説は本會報告書下
 巻に記載して置きました。其の事實を、今、記す。
 ○阿波國板野郡大谷村塚穴 島居 忠雄
 子は大谷村林野、加茂及び他の二、三、邑、山、中、村、
 生、山、上、宮、梅、田、村、生、山、村、
 左の如き塚穴の遺蹟を、
 阿波國板野郡大谷村塚穴 甲、此の塚穴は入口東南に傾し、丸
 石は、塚の北を、南を、東を、西を、以て、傾、
 石は、今日、之と、公、認、す。其、石、は、其、塚、の、東、
 し、南、を、向、
 西、向、の、穴、(一)此、塚、穴、は、西、山、谷、と、稱、
 川、に、在、り、て、方、向、は、東、西、に、向、一、度、大、石、も、
 阿波國板野郡大谷村塚穴 二一七

少年時代に投稿した東京人類学会雑誌

徳島を中心として付近の考古学や人類学の調査をおこなった結果は坪井正五郎先生に報告した。
 明治19年(1886)以来それが東京人類学会雑誌にたびたび掲載せられた。
 写真は明治21年(1888)17歳のとき、第3巻第24号に「阿波國板野郡大谷村塚穴」が掲載せられたもの。



旗 山 古 墳



旗 山 古 墳 の 入 口

5 徳島人類学材料 取調仲間の組織

明治二十一年(二六〇)坪井正五郎氏が徳島に来て鳥居家に二三日宿泊した。先生は勝浦郡(現在、小松島市)旗山古墳などを案内し直接人類学のことについて教えられた。このとき上京して人類学を学ぶよう勧められた。

寺町の隅寺で坪井氏の人類学講演会を開催し多数の聴講者があった。これを機会に先生が世話人となって徳島人類学材料取調仲間(のちの徳島人類学会)を組織し、事務所を先生の家に設け、毎月例会を先生の家で開いた。

〔註1〕当時、東京帝国大学理科大学動物学科大学院学生であった。

○編輯

○坪井正五郎氏、九州地方の南洋中マラヤの同氏ハ、昨年十二月十九日歸京セラリ。種々土産物有ル中ニモ、筑後生業部若宮村ノ日ノ國ヲ産出シテ石梅ノ俄面ニ紋畫アルヲ種見ナレシ杯ハ、隨分面白マコトナリ。既ニ本月ノ會ニテモ演ベテシテガ同氏ハ其記事ヲ本月ノ東洋學藝ニ投ラレシヨ、

○若林藤太郎氏、東京本邦ノ哲學館ニテ、昨年十一月ヨリ人類學ノ講義ヲ初メ若林藤太郎氏ニ講師ヲ應托セラリ、

○島居龍藏氏、同氏ハ德島ニ於テ同志ノ人ヲ集メ德島人類學材料取調仲間トシテ設置セラレタリ其規則ハ左ノ如シ

德島人類學材料取調仲間規則

一 仲間の目的ハ心理形骸工研要物原人風俗習慣言語其他一切人類學に關する材料を取調ベ備ヘに人類學の思慮者たらんとするにある事

一 仲間の目的を達せんが爲め毎月一回廿五日を期シ材料、雜誌と稱ふる書き物を印刷し是を中間中へ配附すべき事

一 仲間に入らんと思ふ人は國所氏名杯を詳記シ中間事務

一 仲間の爲め大に力を盡シ又圖書金銀物品杯贈る人ハらば之を一々中間の書き物に記載して永く其志を傳ふるべき事

一 仲間は毎月第二土曜日午後五時より德島便宜の場所に於て仲間中寄合ハ人類學上の談話を催すべき事

一 仲間員は寄合場へ知人と同往すると得べき事

一 仲間員は仲間費七錢を毎月五日迄に當事務所へ送する。横正金又小爲替にて送らるべし。數月分前納は妨ぎ事

一 仲間費月納の人には仲間の書き物一部を無代にて月々配贈する。又外國に在る人は他に配送料を要す。又別に數部を要する人は一部六錢の割にて前納せらるべく且送還は外に郵税を要する事

德島縣名東郡徳富田浦町伊賀十三丁目
德島人類學材料取調仲間事務所

明治廿一年十二月
鈴木秀太郎氏、同氏ノ發起ニテ設立セラルル古代法取調組ノ規則ハ左ノ如シ、

德島人類學材料取調仲間組織の記事

東京人類学会雑誌第5卷第35号(明治22年1月発行)に德島人類學材料取調仲間を組織したことが記述せられたもの。その規則が紹介せられている。

特別廣告

○今回東京人類學會ト親ク通信シ當地
 人類學材料取調仲間ヲ設ケ專ラ同
 學上一切ノ材料ヲ蒐集シ是ヲ發行雜
 誌ニ登載シ仲間ト直接ノ關係アル學
 者學會ニ進呈シ以テ人類學ノ忠僕者
 ヲラントス

(但雜誌ハ非賣品)
 贊成加盟セラル、諸君ハ早々左
 名迄報知アレ

德島縣阿波國名東郡
 船場町百八十番地
 東京人類學會會員
鳥居龍造

○本誌定價
 一ヶ月(壹部)前金拾八錢郵稅壹錢
 三ヶ月(三部)前金五拾八錢郵稅三錢
 六ヶ月(六部)前金五拾五錢郵稅六錢
 十二ヶ月(十二部)前金壹圓拾錢郵稅拾二錢

○配達概則
 一 代價(郵稅共)收受セラル内ハ運送セス
 一 前金盡クハ更ニ送金ナキ内運送セス
 一 代價ハ郵便小爲替ニテ送金相成度
 一 郵便切手代用ハ割増ノ事

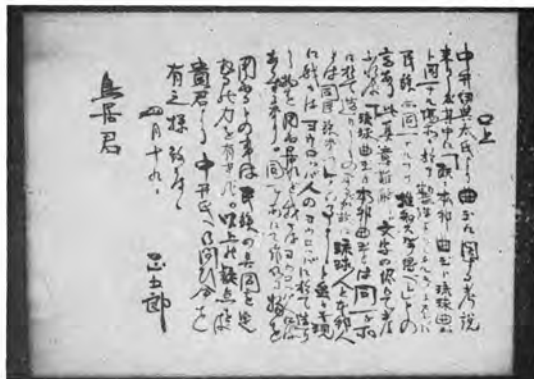
發行所 東京小石川區大和町十八番地
 東京人類學會事務所
 發行人 井上圓成
 兼印刷人 坪井正五郎
 編輯人 坪井正五郎

會長 神田孝平
 東京神田區淡路町二丁目
 九番地

幹事 坪井正五郎
 東京小石川區大和町
 十八番地
 若林勝邦

德島人類學材料取調仲間の廣告

東京人類學會雜誌第5卷第33号(明治21年11月發行)に德島人類學材料取調仲間を組織したことを廣告したもの。



坪井正五郎先生からの手紙

中井伊与太氏(德島人類學材料取調仲間の会員)が坪井先生に曲玉のことを報告したことに關しての質疑を鳥居先生に依頼したもの。

○德島人類学取調仲間記事

- 第三 同香美郡高日村字談談所地中ヨリ一個掘り出ス (稻毛多藏實見ノ事句頭雜譚ニ見ユ)
 - 第四 同長岡郡大浦村寺中屋敷ナル地中一個掘り出シ (森本藤藏實見ノ由白頭雜談ニ見ユ)
 - 第五 同香美郡上田村字正善寺古本銀水持地内一個掘り出シ(明治十七年五月十一日彌生新聞ニ見ユ)(此第五ノ品家父實見セシガ外國ニ賣り出スト云フ話)
- 銅鋒
- 第一 土佐國長岡郡八幡村豊岡八幡社藏
大形一ツ長サ一尺八寸三分
 - 第二 同土佐郡熊野神社藏
大形一ツ被指長サ二尺二寸四分
 - 第三 同吾川郡日下村小林天神藏
小形一ツ長サ一尺一寸二分
 - コレト同品ハ讃岐國山田郡植田村尾尊神社ニモアリ
- 以下寸法詳カナラザルモノ
- 第四 土佐國高岡郡津野郷多野村加茂社藏
大形一ツ

北海道道庁地下ヨリ出テル土器一箇
阿波坂野郡撫養將軍塚ヨリ出テル朝鮮土器一箇

九六

- 第五 同吾川郡西畑近邊ヨリ大形一ツ掘出ス矢野勤吉郎實見トノ唱シ今ハ發難ニカ、ヲ失ナヘリト云フ (寺石 正路)

○德島人類学取調仲間記事

當仲間第一年總會ハ德島船場町島居氏方ニ於テ去ル十二月一日午前十時三十分ヨリ開會ス當日ハ世話係島居龍藏仲間第一年同ノ報告ヲナシ次ニ左ノ談話アリヨリ

十三塚及ヒ瀧ノ宮近傍ニ於ケル人類學者ノ發掘場

中谷 大吉

人類學上北部迄同談

阿波坂野郡撫養將軍塚及ヒ同塚ヨリ出テタル古器物

橋本 貞良

柳野 赤彦

北海道及ヒ奥羽方言ニ就テ

德島近傍ニ於ケル人類學上ノ穿鑿總論

島居 龍藏

右終テ午後一時三十分散會セリ

前會後當仲間ニ寄附品ハ左ノ如ク

アイヌ製造ノ糸巻一箇

石黒 徳君

五二バーと二行の Industries

明治二十二年十二月

第四 土佐國高岡郡津野郷多野村加茂社藏
大形一ツ

北海道道庁地下ヨリ出テル貝塚土器一箇 全 人
阿波坂野郡撫養將軍塚ヨリ出テル朝鮮土器一箇
中井伊與太君
同所ヨリ出テル石片
全 人

○古器物研究会記事

本月三日岩代桑野村大塚又兵方ニテ第二古物展覽會ヲ開ク當日ハ新國西實氏ヨリ雷弁一箇ヲ石器ニ孔アルモノ、勾管、玉、古鏡、車輪石ノ如キモノ其他、佐藤長藏氏ヨリ問ミタル石器、砥石、額圓竹千代氏ヨリ石鏡數十、大塚又兵氏ヨリハ植輪樹物、石器等ヲ出品セラレテ尙其他富田、阿部、相良、早川諸氏ノ出品ヲ陳列ス

第四十五號正談

二三 Vierer 下段十二行は Teller vier Koreaner-Schalel. I. Bl.

三九 Vierer 上段十二行は II. Mittelstangen der denat. ehen ostasiak Gen. Pl. IV. Heft 36.

五一 Vierer 上段七行は (Chieuan haloon)

○古器物研究会記事 ○正談

德島人類学材料取調仲間の記事

明治22年(1889)12月1日島居先生の宅において開催せられた德島人類学材料取調仲間第1年総会に関する記事。東京人類学会雑誌第5巻第46号(明治22年12月発行)に掲載。



三宅米吉先生

1860—1929 明治・大正の歴史学者・考古学者。文学博士。



小杉楯邨先生

1834—1910 明治の国史・国文学者。文学博士。阿波徳島の人。



神田孝平先生

1830—1898 明治の蘭学者・政治家。



田口卯吉先生

1855—1905 明治の経済学者・歴史家。法学博士。

四、東京遊学

研究心の旺盛な先生は修学のため上京することに決心し、明治二十三年（一九〇〇）満二十歳の徴兵検査に抽籤の結果入隊を免れたのを機会に決行した。

先祖代々の煙草商が中絶することについて親戚の中川竹次郎氏に相談すると、「家で商売しておれば一生活に不安はないが名譽は得られない。これに反して学問に熱中すれば生活上困難はあろうが名譽は得られる。両者のうちいずれを選ぶかは本人の決心しだいである。」と話され、先生はその後者を選んだ。

せっかく上京したのに坪井正五郎先生はイギリスに留学したあとであったので、小杉楯邨先生・三宅米吉先生・田口卯吉先生をたずねて史学・歴史考古学の教えを受け、神田孝平先生をたずねて人類学の教えを受けた。また独逸語学校でドイツ語を学んだ。

あるとき本郷茗岐坂のプロテスタント教会で「〔註2〕シュリーマン氏の死をいたむ」という講演を聞いて感動し、自分もりっぱな学者にならなければならないと決意を固くした。
〔註1〕板野郡榎瀬村の人。先生の父の兄の子。農業兼藍商。
〔註2〕ドイツの人。貧しい家に生まれ、一商人でありながらトロイの遺跡の研究をおこない考古学上大きな功績をたてた。



坪井正五郎先生

1863—1913 明治の人類学者。理学博士。
日本の人類学の開祖。



小金井良精先生

1858—1944 明治・大正・昭和の解剖
学者・人類学者。医学博士。



飯島 魁先生

1861—1921 明治・大正の動物学者。
理学博士。

明治二十五年（一九〇二）人類学研究のためイギリス・フランスに出張していた坪井正五郎先生が帰国するとその教えを受け、二十六年（一九〇三）東京帝国大学理科人類学教室標本整理係となつて標本の整理をするかたわら坪井先生の人類学の講義を大学生とともに聞いた。

坪井先生から研究の自由を与えられ、理科大学で神保小虎博士・小藤文次郎博士の地質学、箕作佳吉博士・飯島魁博士・渡瀬庄三郎博士の動物学、横山又次郎博士の古生物学、医科大学で小金井良精博士の解剖学、大沢岳太郎博士の発生学などを聴講し、人類学専攻の準備のためその基礎となる自然諸科学の勉学に励んだ。

また、機会があれば国内各地や満州・蒙古・台湾・朝鮮など海外に旅行して実地の研究をおこなった。

このころ、薄給の身に多くの研究費を要したので家計はいつも貧しく、苦学を続けた。屋台をひいておでん屋や氷屋の商売をしたこともあった。



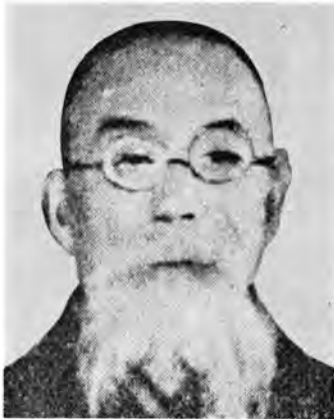
芳賀矢一先生

1867—1927 明治・大正の国語国文学者。文学博士。



上田萬年先生

1867—1937 明治・大正の国語国文学者。文学博士。



市村瓊次郎先生

1864—1947 明治・大正・昭和の東洋史学者。文学博士。



白鳥庫吉先生

1865—1942 明治・大正・昭和の東洋史学者。文学博士。

のち理科大学助手・講師となつてからも聴講を続けた。

文科大学で上田萬年博士の言語学、建部遜吾博士の社会学、芳賀矢一博士の日本国民伝説志、白鳥庫吉博士の匈奴東胡民族史、市村瓊次郎博士の支那史の講義を聞いた。かたわらロシア語・フランス語を学んだ。



市原家の戸籍
 明治8年の戸籍。 徳島市役所蔵。

五、結婚

明治三十四年(二〇〇一)冬、坪井正五郎先生と小杉樞郎先生の媒酌ばいしやくによって、先生は徳島市富田浦町市原応資おうちげ氏(もと土族)(註1)の三女キミさんと結婚した。先生は三十一歳、夫人は二十歳であった。

〔註1〕当時、上野音楽学校在学。結婚後、中途退学した。戸籍は「キミ」であるが、常に「きみ子」を使った。



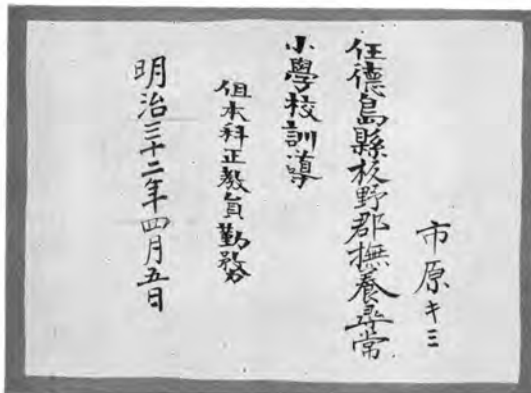
淑慎女学校時代

明治28年3月徳島県尋常師範学校付属小学校高等科を卒業し、同年淑慎女学校(校長前田リキ)に学んだ。写真はその女学校時代のもの。



富田尋常小学校卒業記念写真

明治24年3月卒業。中列 左から1人目 市原キミ(改姓鳥居) 左から4人目 本庄カタ(改姓杉原)
前列 左から1人目 向坂タツ(改姓久保)



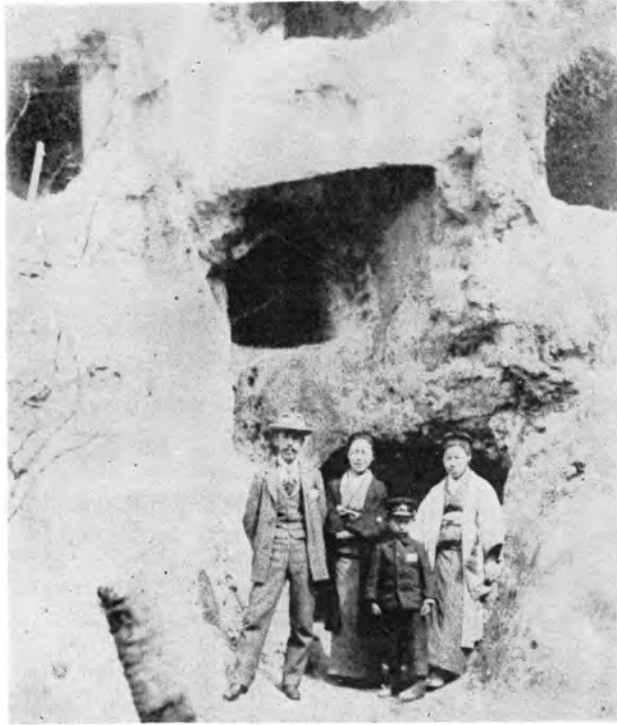
撫養尋常小学校訓導の辞令

明治32年徳島県師範学校師範科を卒業すると板野郡撫養尋常小学校(現在の鳴門市撫養小学校の前身)の訓導に新任せられ、1ヵ年勤務した。



徳島県尋常師範学校時代

徳島県尋常師範学校は明治31年3月徳島県師範学校と校名を改称した。夫人は明治32年(1899)徳島県師範学校師範科を卒業した。
左 向坂タツ(改姓久保)、中 浜本ヨシノ(改姓大浦)、右 市原キミ(改姓鳥居)



婚 約 時 代

明治34年 坪井正五郎博士が発見した吉見の百穴(埼玉県、横穴群)を見学したときの写真。
 左から坪井博士、坪井博士夫人、同令息誠太郎(のち東大理学部岩石学主任博士)市原キミの諸氏。



結 婚 式 記 念 写 真

前列 左から2人目 きみ子夫人 3人目 鳥居龍蔵先生 5人目大野雲外氏
 後列 左から1人目 小杉楡邨博士 2人目 坪井正五郎博士



新 婚 当 時



結 婚 記 念 品

ゲーテ作の「ヘルマンとドロテア」を表現した石膏像。



東京帝国大学正門



明治20年代の東京帝国大学理科大学

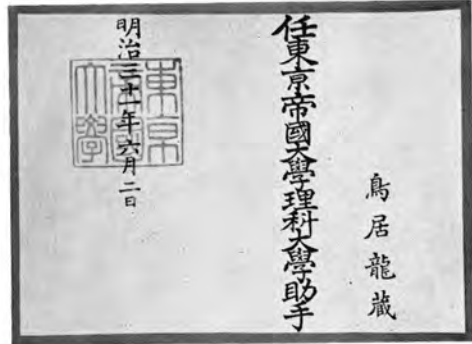
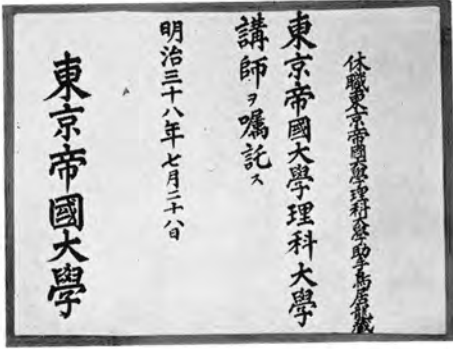
六、東京帝国大学 在職時代

1 教 職

明治二十六年（一九一三）東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理係となり、同三十一年助手、同三十八年講師となった。大正二年（一九一三）坪井正五郎博士がロシアのペテルスブルグの学会に出席中病死したので、先生は博士の後を受けて講師として考古学・人類学を講義した。大正十年（一九二一）学位をうけて助教授となり、人類学教室主任となった。大正十三年（一九二四）辞職した。

東京帝国大学理科大学（のち理学部）人類学教室に在職すること約三十年、この間多くの業績を残した。

日本各地を調査するとともに日本周辺の東亜の各地を探検し、よく住民の体質・言語・土俗を調査し、遺跡を発掘して、そのつど多数の土俗品・発掘品を収集した。



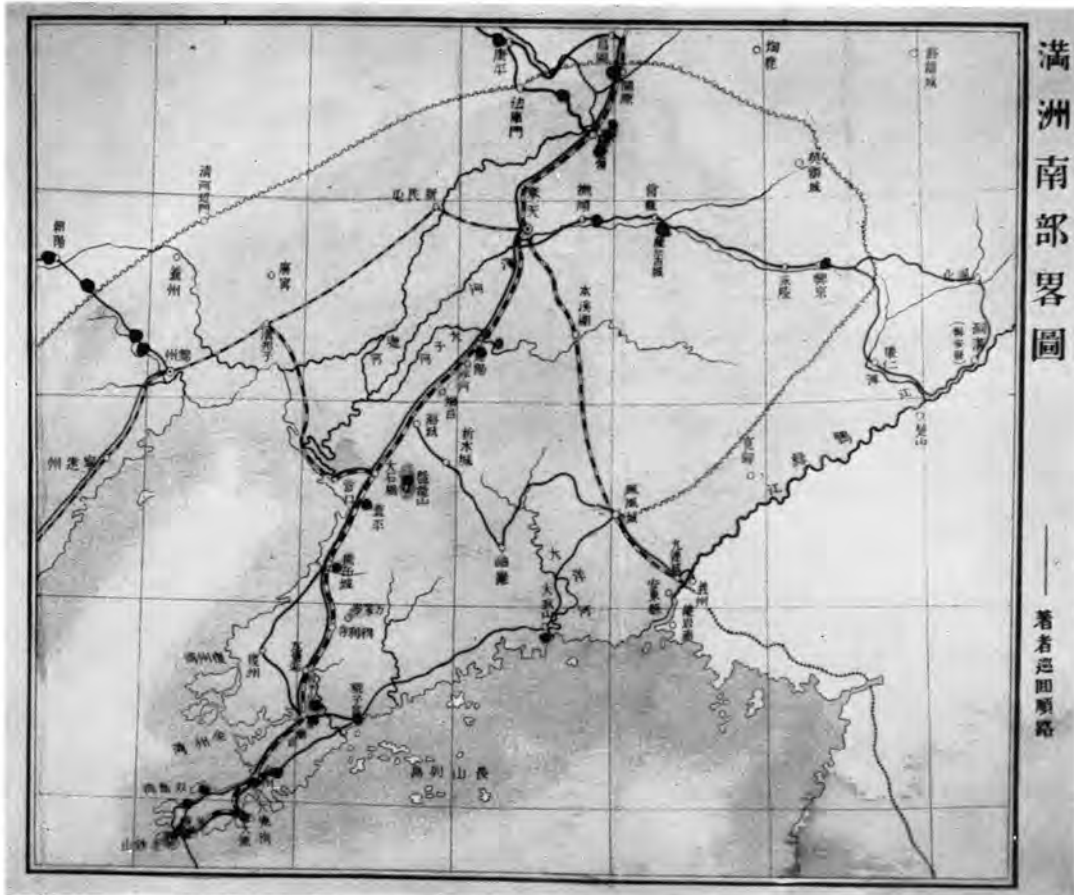
東京帝國大學の辞令



東京帝國大學講師時代の肖像



鳥居先生の書庫の篇額
大正10年作、木彫、文字は「万年永寶」



滿州南部略圖

「南滿洲調査報告」(鳥居龍蔵著 明治43年発行)所載。黒い実線は鳥居先生が調査旅行をした経路。

2 研究業績

滿州の調査

明治二十八年(八十九)東京人類学会から派遣せられて遼東(リャオトン)半島・南滿州を徒歩で調査した。これが鳥居先生海外調査の第一歩である。

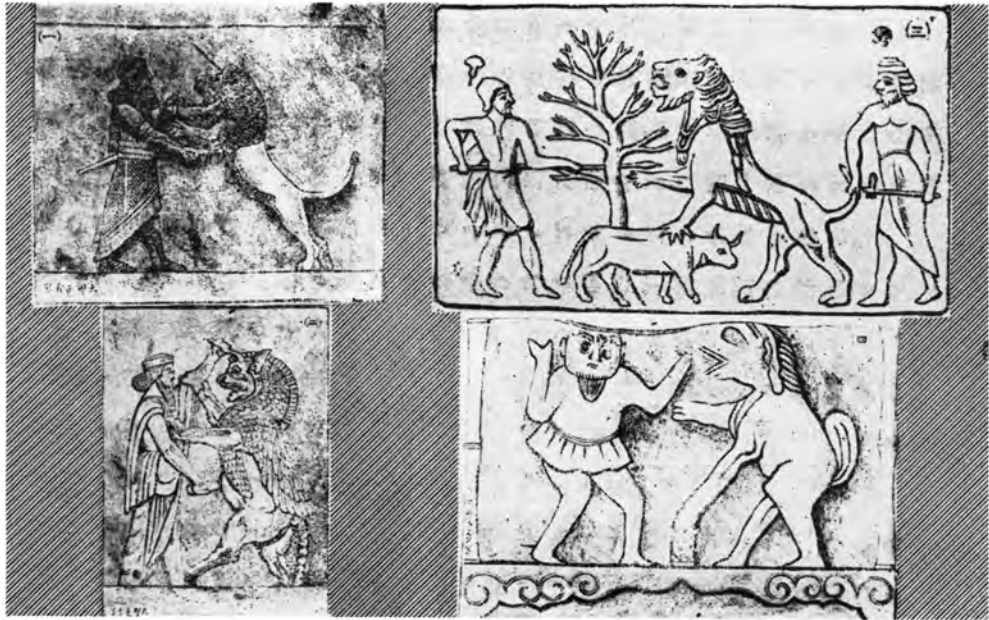
熊岳城(ジュンユエ)ではじめて石器時代の石槍を発見し、海城(ハイチョン)では城壁の積石中から獅子狩を彫刻した台石を発見した。また柞木城(タクモクシヨウ)付近で二個のドルメン(註1)を発見し、ドルメンが滿州に存在していることを明らかにした。当時、滿州の石器時代の遺跡遺物を調査したものはなかったが、先生がはじめて滿州に石器時代の遺跡遺物が存在することを確かめたのであった。

この遼東半島の調査はわが人類学・考古学者のアジア大陸研究の最初であり、二十五歳の若い研究家鳥居先生がその第一歩を踏み出したのである。

明治三十八年(六十)東京帝国大学は学術取り調べのため滿州に学者を派遣し、理科大学からは先生が派遣せられた。普蘭店(プランテン)で石器時代遺跡を発掘し土器石器を採集した。遼陽(リャオヤン)で埴(註2)を發掘した。これは滿州における漢代墳墓の最初の発見である。

〔註1〕ドルメン 新石器時代から金石併用時代にかけておこなわれた墳墓。巨大な扁平石を天井石とし、その下に支える石を配して地上におかれている。支石墓ともいう。

〔註2〕埴柳墓 埴は中国のれんがで、これを使って墓室(棺を入れる地中の部屋。この部屋を柳とよんでいる。)をつくったもの。



獅子狩の図

右の図が海城の城壁の台石（長さ約85cm、高さ約45cm、幅約52cm）に彫刻したもののスケッチ。ペルシャ文化の影響を受けているものである。左の図はそれと比較対照のため、ペルシャ文化の影響を最も多く受けているエジプトで発見した獅子狩の図。



柝木城付近のドルメン

明治28年鳥居先生が発見調査したもの。このドルメンは、天井石の長さ6.12m、幅5.85m、厚さ33cm、下からの高さ2.49mという巨大なもので、東洋における代表的なものである。



博 棺 の 外 部 (遼 陽 付 近)
立 っ て い る 人 は 鳥 居 先 生



博 棺 内 部 を 発 掘 す る と ころ (遼 陽 付 近)
か が ん で い る 人 が 鳥 居 先 生



明治 42 年 満 州 調 査 当 時

福島安正大将夫妻と鳥居先生

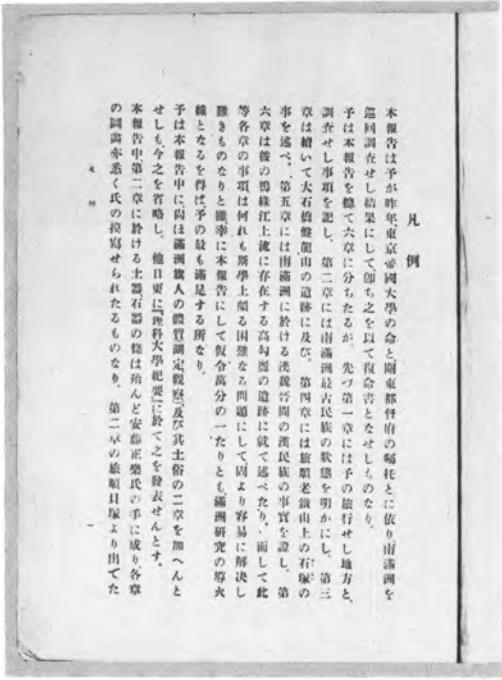
明治四十二年（一九〇七）東京帝国大学から出張を命ぜられるとともに関東都督府から囑託を受けて第三回の満州調査旅行をおこなった。旅順（ラオネン）老鉄山（ラオチェン）の漢代（註1）の遺跡（墳墓と、双頭湾の大貝塚を発掘し、熊岳城・遼陽の漢代遺跡を調査した。

当時中国の学者も日本の学者も漢代の研究というと古銅器をもって資料としていた。先生は南満州各地において漢代の遺跡・土器その他の遺物を実際に発見し、満州における漢代の新しい研究をはじめたのであった。

大正八年（一九一九）東部シベリア調査旅行の際、一時満州に入り石器時代遺跡や諸民族の土俗を調査した。

〔註1〕漢 紀元前三世紀末—紀元後三世紀初めの中国の王朝。前漢（または西漢。都は長安）と後漢（または東漢。都は洛陽）とにわけてよばれている。漢代は前後四〇〇年、文化が発達した。

南滿洲調査報告



南 滿 洲 調 査 報 告

鳥居龍藏著、 明治43年 東京帝国大学発行。 175p 図52 26cm。
治28年・38年・42年の3回にわたって南滿州各地の調査をした事項の概要を記述したもの。
この報告書は南滿州における遺跡の概括的知識を与える上に貢献するところがたいそう大きかった。

October 21st, 1915.

Vol. XXXVI, Art. 8.

東京帝國大學
理科大學紀要

第卅六冊第八編

JOURNAL
OF THE
COLLEGE OF SCIENCE,
IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO.

R. TORII,

Etudes Archeologiques et Ethnologiques.
Populations Prehistoriques de la Mandchourie Meridionale.

TOKYO.

PUBLISHED BY THE UNIVERSITY.

TAISHO IV.

東京帝國大學理科大学紀要 第36冊第8編

鳥居龍藏著、大正4年 東京帝國大學發行。80P 図25 26cm。仏文 考古学・
人種学研究「南滿洲の有史以前の民族」

Etudes Archéologiques et Ethnologiques.

Populations préhistoriques de la Mandchourie méridionale,

Par

R. TORII

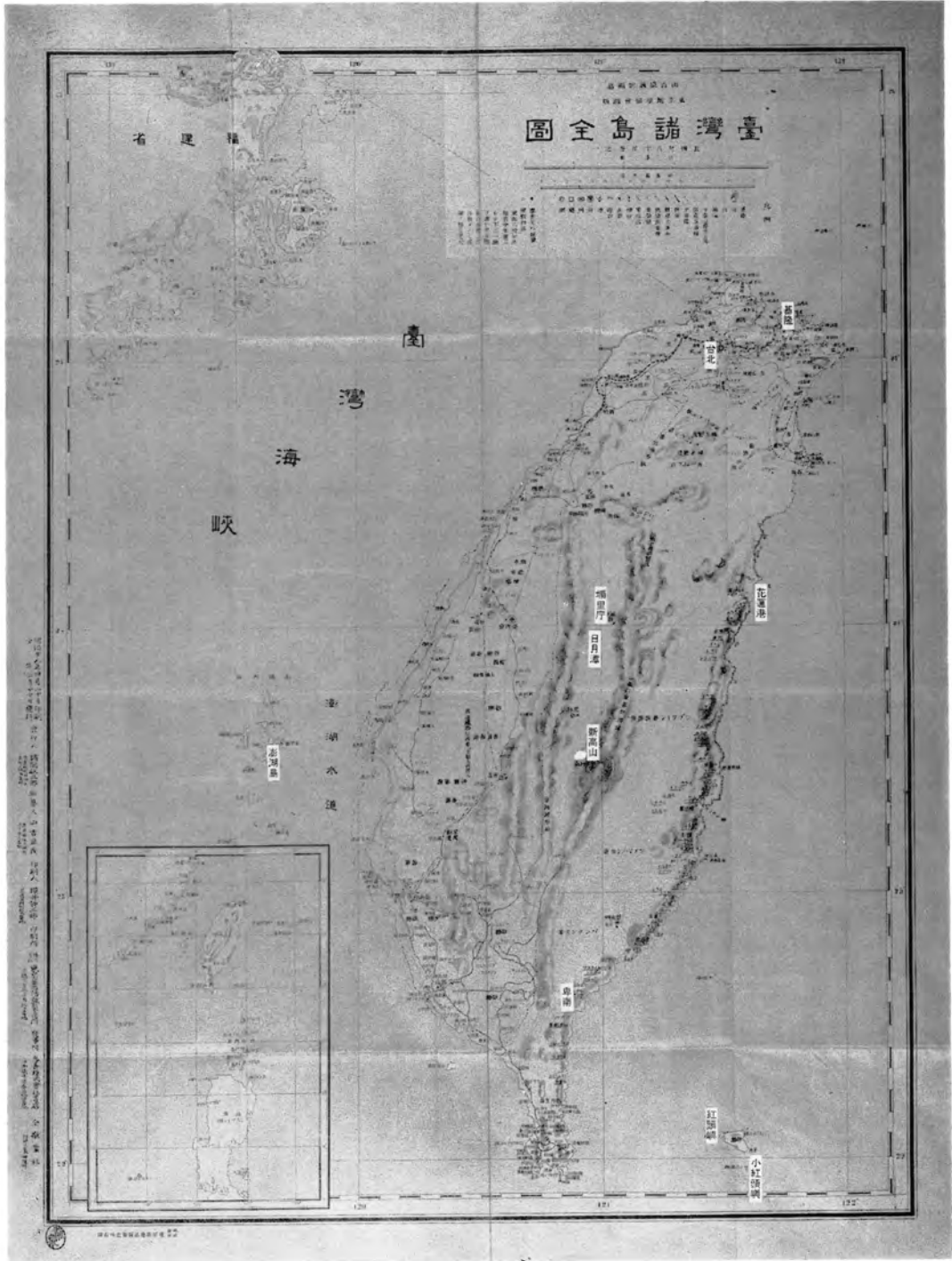
Chargé du cours d'Anthropologie à l'Université Impériale de Tôkyô
et attaché au Gouvernement Général de Corée

Avec 51 illustrations, 24 planches et 1 carte.

Avant Propos.

Au point de vue des recherches ethnologiques, historiques et archéologiques, la Mandchourie Méridionale est véritablement une très intéressante région. Mais située comme elle est à l'extrémité du monde, jusqu'à présent, la science occidentale s'est peu occupée d'elle; les moyens lui faisaient défaut. La Chine, à la vérité, nous en parle ici et là de temps en temps, dans son histoire; mais, ce qu'elle nous en dit, manque absolument de critique, et ne mérite qu'une croyance très relative. C'est regrettable à tous les points de vue, car, si quelqu'un doit nous être de quelque secours dans nos études à propos de ce pays, ce doit être la Chine. Il n'en est rien. En 1895, la Société d'Anthropologie de Tôkyô, frappée de cet abandon, nous désigna pour tâcher, non pas de combler cette lacune, cela était au dessus de nos forces, mais, de faire un peu quelque chose dans cette direction. Et voilà comment nous nous sommes mis en route pour la Mandchourie, au mois de Décembre de cette même année 1895. Débarqués à Liou-Shou-Toun 柳樹屯, insignifiante bourgade au pied du mont Tai-Hé-Shan 大和山, où devait dans la suite, s'élever Dalny, nous avons gagné à pied, la ligne ferrée n'existant pas encore, la ville de Tchîn-Tehou

同 書 の 内 容 (第1ページ)



台 湾 諸 島 全 図

明治28年 東京地学協会発行。白地内の地名は鳥居先生が探査のとき行った所。
 (蕃地の大部分は記入してない)



新 高 山

明治33年（1900）阿里山で人類学調査の際、現住民を案内として新高山（外人はモリソン山と呼んでいた。現在の名称は玉山（ユイジャン）である。）に登り4月10日頂上をきわめた。これが日本人最初の登山である。図は鳥居先生が撮影した写真にもとづいて描いたもの。鳥居龍藏著「新高山登山日記」の口絵。

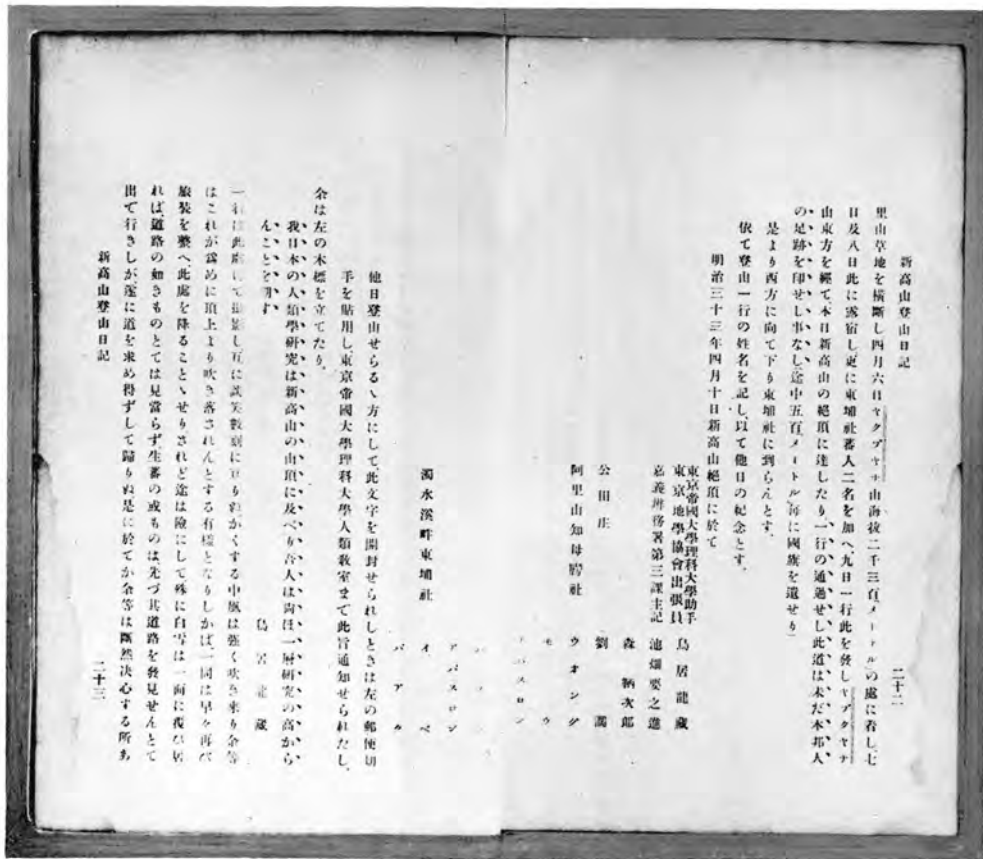
台 湾 の 調 査

台湾がわが国に属すると、東京帝国大学理科大学は研究のため学者を派遣した。明治二十九年（一九〇六）先生は理科大学雇員として人類学調査のため派遣せられ台湾東部の山地の住民について調査した。

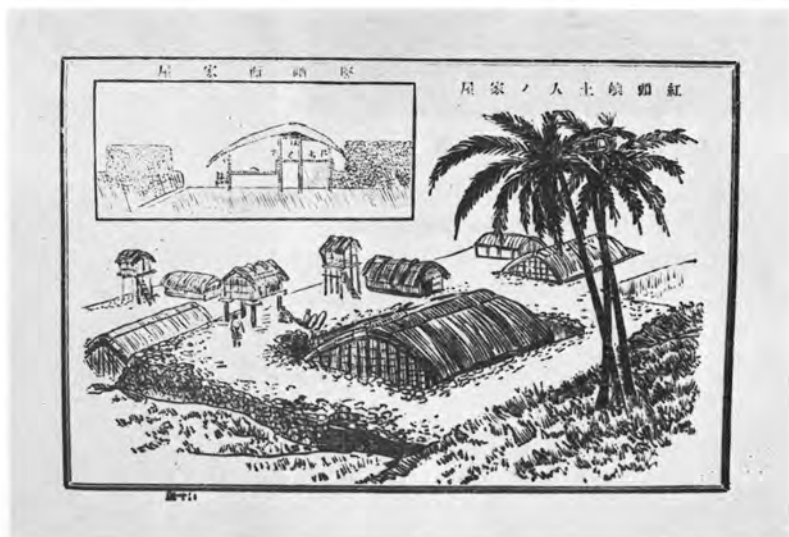
明治三十年（一九〇七）台湾本島東の海上にある紅頭嶼（現在、ホントウ（紅頭）島）、三十一年（一九〇八）北部・中部の山地、三十三年（一九〇〇）西部の山地および平地と、四回にわたって非常な危険を冒して前人がいまだかつて行つたことのない台湾山上の住民（当時土蕃と呼んでいた）の体質・言語・土俗などの調査をとげた。

台湾の人類学・考古学は年齢わずか二十数歳の青年学者鳥居龍藏先生によりその基礎が築かれたのである。

明治二十九年台湾各地の探査に自ら写真機で撮影した。これが写真機を考古学・人類学の研究に用いた最初である。（従来考古学・人類学者はスケッチによつていた。）

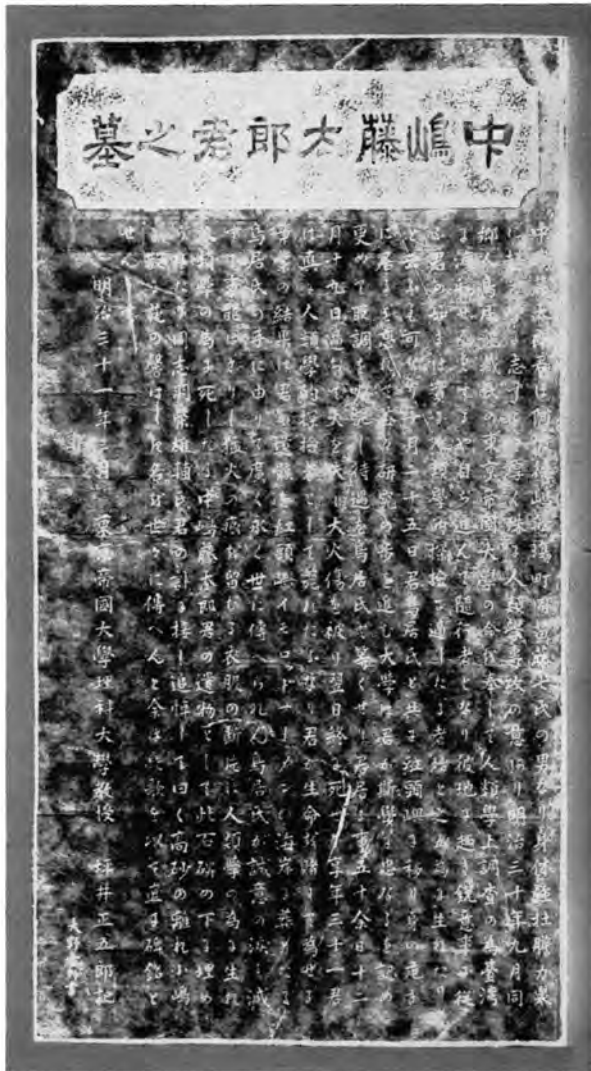


鳥居先生の新高山登山日記



紅頭嶼ヤミ族の家屋

紅頭嶼の現住民をヤミ族というのは鳥居先生の命名である。図は「紅頭嶼土俗調査報告」所載。



中島藤太郎氏墓碑銘

明治30年紅頭嶼調査のとき、随員中島藤太郎氏(徳島の人)は奇禍にあつて死亡した。台湾調査史上最初の犠牲者である。墓碑銘は坪井正五郎博士の撰文。



中島藤太郎氏の墓
墓は徳島市寺町円徳寺にある。

紅頭嶼土俗調査報告

緒言

人類學ノ目的ハ人類ノ本質現狀由來ヲ明カニスルニ在リ而シテ安全ナル結論ヲ得テ此目的ヲ達セントセバ諸種族ニ關スル正確ナル事實ヲ蒐集セザルモカラス人類學教室ヨリ本書ノ著者鳥居龍藏ヲ臺灣ニ派遣セシメ此事ニ從ハシメシメガ爲メニ他ナラズ著者彼ノ地ニ往ルコト前後四回登レ歸ル所ノ材料甚多ク編述ヲ終リタル報告既ニ大冊ヲ成セリ部ヲ分ツ九日ヲ紅頭嶼當日トはいん當日トつゞりせん當日ト臺南當日ト阿扁當日ト阿里山當日トふん當日ト歐西當日ト埔里此書及ヒ平埔各部落篇ヨリ成ル今回印刷ニ附セバ紅頭嶼部ニ部中上俗ノ一篇ナリ此他此部ニ入ルベキモノニ總説地理俚俗實觀言語難事等アリ遂大刊行セントナリ期ス發ニ出版セル人

類學實業叢刊紅頭嶼ノ部ハ本書ト相伴フベキモノ被ノ圖解ノ足ラザルハ此ノ記述ヲ以テ補フベク此ノ補圖ノ足ラザルハ被ノ圖版ヲ以テ補フベク著者ノ紅頭嶼ニ上陸セシハ明治三十年十月二十五日ニシテ同所ヲ去リタルハ同年十二月三十日ナリ臺灣孤島六十六日間ノ滯留困苦ノ多火察スベシト雖ヨ同行者ノ火傷ニ原因セル死亡ノ如キハ困苦ニ加フルニ惡衰ヲ以テセルモノニシテ著者ガ終生志願ハザル所ナラン同行者姓ハ中島名ハ藤太郎徳島ノ人本書撰シテ所ノ材料蒐集ニ關シテハ著者同人ニ負フ所少カラズト云ヘリ緒言ヲ終ルニ臨ミ特ニ名ヲ顯レテ其功ヲ後ニ傳フ

明治三十五年七月

東京帝國大學理科大學教授理學博士坪井正五郎

紅頭嶼土俗調査報告

鳥居龍藏著、明治35年 東京帝國大學發行。 115P 23cm。

紅頭嶼の原住民ヤミ族の土俗について記述したもの。わが国最初の民族誌的研究物で、小冊子ながら貴重な文献である。

January 16th, 1912.

Vol. XXXII., Art. 4.

東京帝國大學
理科大學紀要

第 三 二 冊 第 四 編

JOURNAL
OF THE
COLLEGE OF SCIENCE,
IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO.

R. TORII

Études Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose.

TOKYO.
PUBLISHED BY THE UNIVERSITY.
MEIJI XLV.

東京帝國大學理科大學紀要 第32冊第4編

鳥居龍藏著、明治45年 東京帝國大學發行。75p 図7 26cm。仏文 人類学研究「台湾の現住民」

Études Anthropologiques.

Les Aborigènes de Formose.

(2^e Fascicule.)

par

R. Torii.

*Chargé de cours d'Anthropologie à l'Université Impériale de Tokyo, membre du bureau des affaires
concernant les Aborigènes, Département de l'Administration civile, Gouvernement de Formose.*

Avec 7 planches.

I. Caractères physiques.

A. Tribu Yami

Cette étude sur les "Aborigènes de Formose" comprend 2 parties:

- 1°. Caractères physiques.
- 2°. Mensurations.

Je commencerai par décrire les "Caractères physiques" des Aborigènes, en passant en revue les 9 tribus qui peuplent l'île.

Ce premier chapitre est consacré à l'étude des caractères physiques de l'une de ces tribus: les Yami qui habitent Kō-tō-shō.

J'ai déjà publié un album de photographies des Indigènes de Kō-tō-shō⁽¹⁾ et une note sur les coutumes locales de cette île.—⁽²⁾ M. Otto Scheerer⁽³⁾ a fait paraître une traduction en allemand de ces 2 travaux dans la revue: "Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens."

(1) R. Torii, "Kō-tō-shō shashin-shū" Tokyo 1899.

(2) R. Torii, "Kō-tō-shō dôroku hōkoku" Tokyo 1902.

(3) Otto Scheerer, Ein Ethnographischer Bericht über die Insel-Bevölkerung von Formosa in "Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens" - Band XI, 1905.



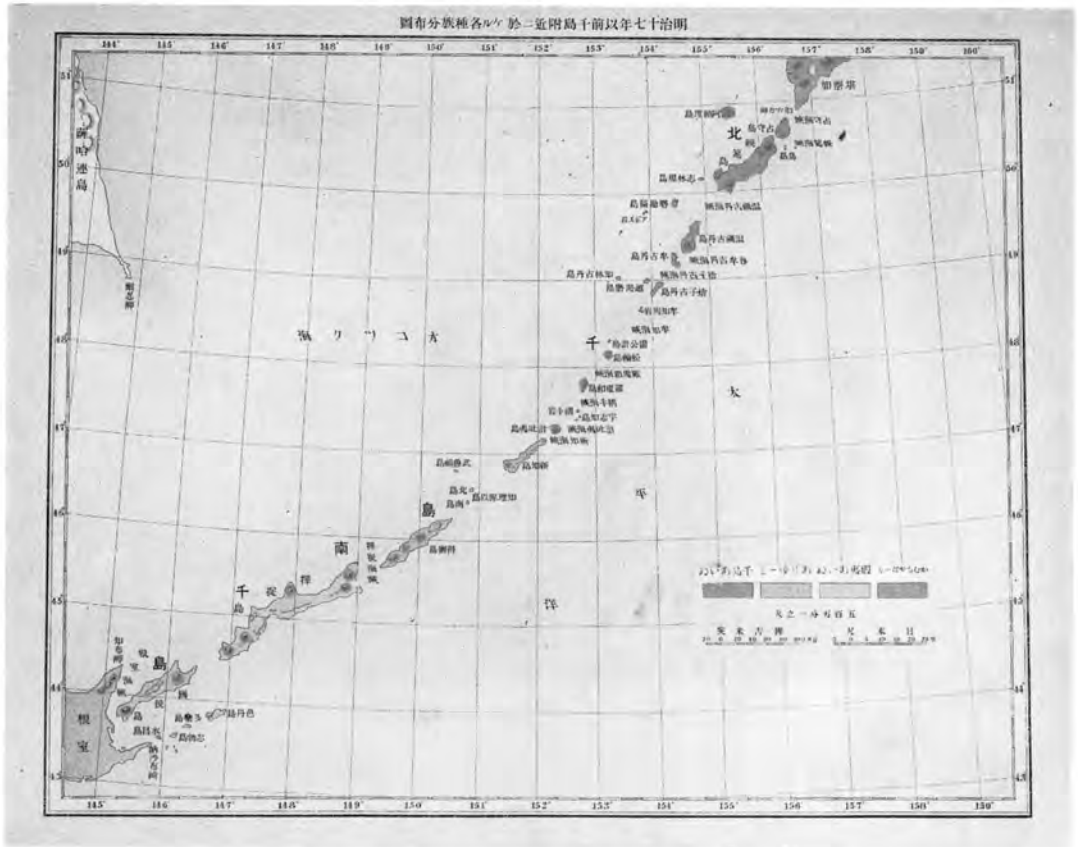
A



B

台 湾 の 現 住 民

紅頭嶼ヤミ族の男女を鳥居先生が撮影したもの。「東京帝国大学理科大学紀要 第32冊 第4編」所載。



明治十七年以前千島附近ニ於ケル各種族分布図

「千島アイヌ」(鳥居龍蔵著 明治36年発行)所載。

北千島の調査

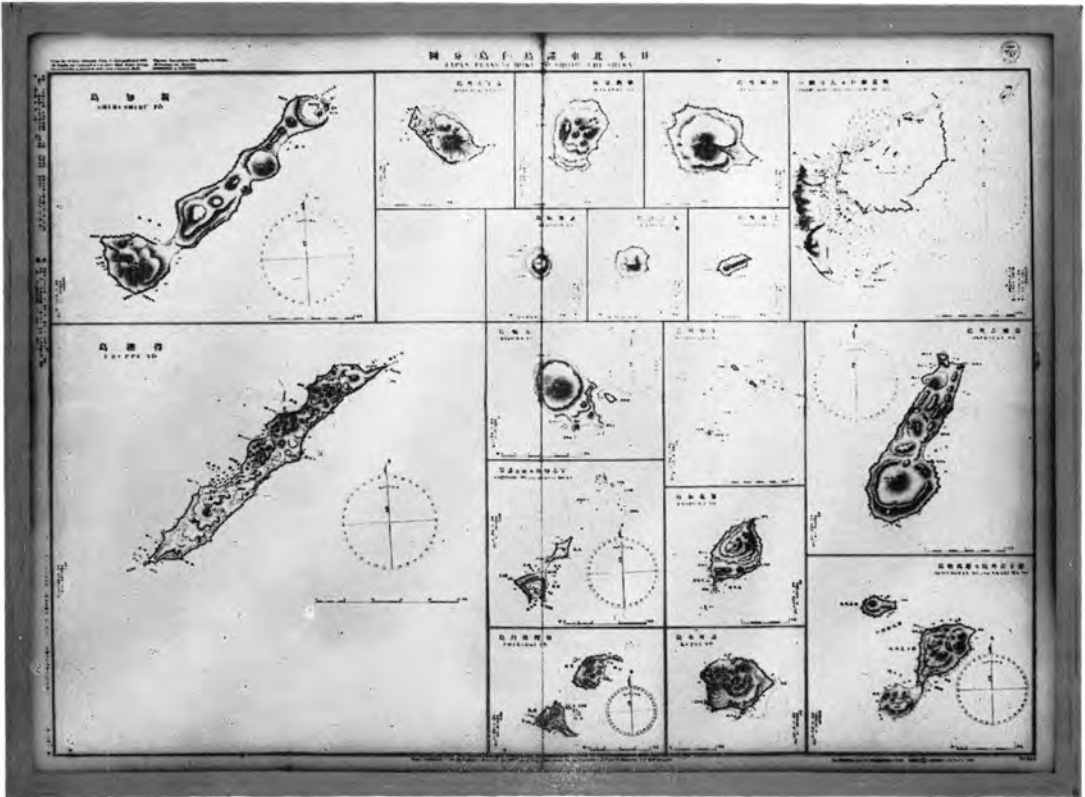
明治三十二年(一九〇〇)奉效義会会長郡司成忠大尉の招請により、東京帝国大学から人類学調査のため北千島(クリル諸島北部)出張を命ぜられた。

軍艦に便乗してまず擇捉(エトロフ)島に寄港し、得撫(ウルップ)島から最北の占守(シムシユ)島まで行き、北千島アイヌの体質・言語・土俗と貝塚・住居跡などの遺跡・遺物を調査した。

従来アイヌは土器使用の経験をもたないと信ぜられていたが、この調査により千島アイヌが^(註1)土器を使用し土器を製作したことを明らかにした。

まさに消滅しようとする北千島アイヌとその固有文化を調査記録した功績は不朽である。

(註1)これが当時論争せられていた石器時代人種論(アイヌ説・コロボックル説)にも影響をおよぼし、有名となった。



鳥居先生が千島アイヌ調査に携行した千島地図
 明治28年水路部において刊行した「日本北東諸島（千島）分図」である。



案内者 グリゴリー
 鳥居先生の北千島調査に、ともに旅行して案内役と助手をつとめた千島アイヌである。



明治32年東京にはじめて来た千島アイヌ
 小金井博士 坪井博士
 イヒミー アウエリヤン 鳥居先生



千島アイヌの面と人形
 明治32年千島アイヌ調査のとき採集した。

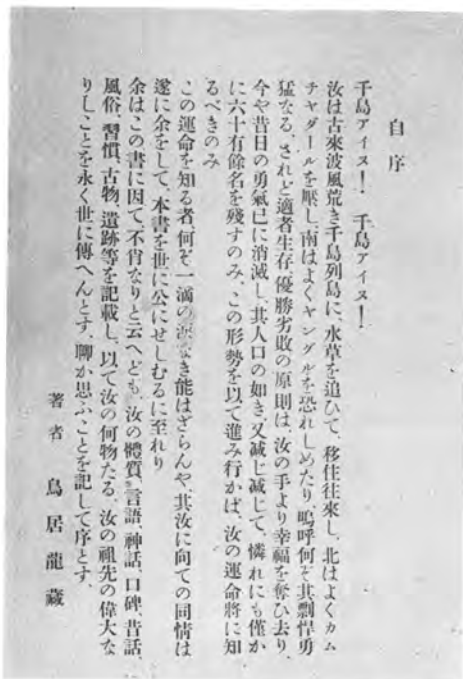


千 島 ア イ ヌ

鳥居龍藏著、明治36年 吉川弘文館発行。

210P 32cm。

明治32年北千島のアイヌについて調査研究した結果を記述したもの。



自序

千島アイヌ！ 千島アイヌ！

汝は古來波風荒き千島列島に、水草を追ひて、移住往來し、北はよくカムチャツクルを厭し、南はよくヤンタルを恐れしめたり、嗚呼何ぞ其剽悍勇猛なる、されど適者生存優勝劣敗の原則は、汝の手より幸福を奪ひ去り、今や昔日の勇氣已に消滅し、其人口の如き又減じ減じて、憐れにも僅かに六十有餘名を残すのみ、この形勢を以て進み行かば、汝の運命將に知るべきのみ。

この運命を知る者、何ぞ一滴の涙なき能はざらんや、其汝に向ての同情は遂に余をして、本書を世に公にせしむるに至れり。

余はこの書に因て、不肖なりと云へども、汝の體質、言語、神話、口傳、昔話、風俗、習慣、古物、遺跡等を記載し、以て汝の何物たる、汝の祖先の偉大なりしことを永く世に傳へんとす、聊か思ふことを記して序とす。

著者 鳥居龍藏

January 29th, 1919.

Vol. XLII., Art. 1.

東京帝國大學
理科大學紀要

第四卷第二冊第一編

JOURNAL
OF THE
COLLEGE OF SCIENCE,
IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO.

R. TORII.

Etudes Archéologiques et Ethnologiques.
Les Ainou des Iles Kouriles.

TOKYO.

PUBLISHED BY THE UNIVERSITY.
TAISHO 8.

東京帝國大學理科大学紀要 第42冊第1編

鳥居龍藏著、大正8年 東京帝國大學發行。 337 P 図38 26cm。

仏文 考古学・人種学研究「千島アイヌ」

Etudes Archeologiques et Ethnologiques.

Les Ainou des Iles Kouriles.

Par

R. Torii,

*Chargé du cours d'Anthropologie à l'Université Impériale de Tokyo, membre du Comité de
recherches historiques du Gouvernement Impérial de Corée, et de l'Association
pour l'Enseignement des Sciences Anthropologiques de France.*

Avec 38 Planches et 118 Illustrations dans le texte.

Préliminaires.

Les livres ou brochures édités jusqu'à ce jour, par les savants Japonais et Etrangers, à propos des Ainou, sont relativement nombreux, très sérieux et bien documentés. Malheureusement, aucun d'eux, que nous sachions du moins, ne parle, ou si peu, des Ainou Kouriliens. Tous s'étendent assez longuement sur les origines probables, sur la langue, sur les us et coutumes, sur les caractères physiologiques, etc., des gens du Yezo, du Saghalien ou Karafouto et d'ailleurs, c'est à dire, sur les Ainou en général; mais sur les Ainou des Kouriles en particulier, ils ne disent rien ou presque rien. Souvent même, le nom de ces intéressants insulaires, n'est pas prononcé. Ils sont comme s'ils n'existaient pas. Et cependant, dans cette fameuse question Ainou, à cette heure encore, si obscure et si difficile, nos bons Kouriliens sont, croyons-nous, malgré leur nombre si restreint, un facteur d'une importance vraiment capitale. C'est là une regrettable lacune. C'est cette lacune que nous voulons aujourd'hui essayer de combler.



南部支那地図

「苗旅調査報告」（鳥居龍蔵著 明治40年発行）所載。黒い実線は鳥居先生が調査旅行をした経路。

西南支那の調査

明治三十五年（一九〇二）台湾と比較のため西南支那（中国の南西部の諸族特に苗族（ミャオ族）の調査を希望していたのが東京帝国大学から認められて出張した。

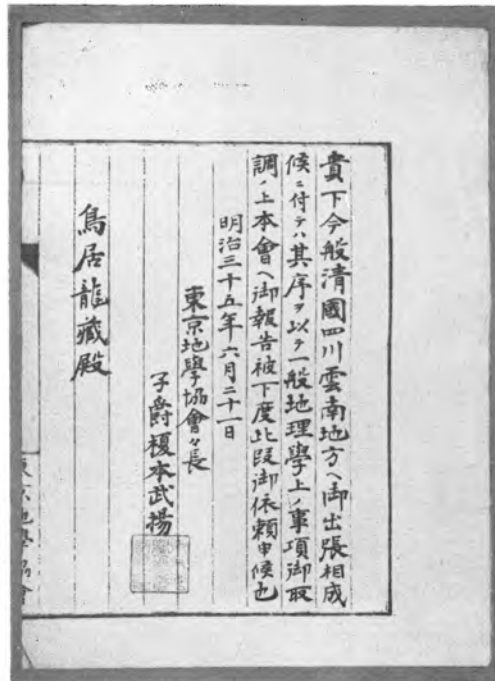
揚子江の本流から沅江（ユワンシ）をさかのぼり、貴州（イチャウ）省にいたって苗族を撮影・測定したり言語・土俗などの調査をおこなった。さらに雲南（ユンナン）省・四川（スーチョワン）省で猓（ロ）族などの調査をした。

当時、日本はもちろん中国の学者もこれら西南諸族を実際に調査する者はなかったが、先生はあらゆる苦難に耐えて僻遠（へきえん）の山間部にいたり、初めてその研究をおこなったのである。



清 国 出 張 の 旅 券

明治35年西南支那の苗族の調査のため清国出張の旅券。



東京地学協会からの調査研究委嘱状



苗 族 の 女 子

苗族（花苗）の女子を鳥居先生が撮影したもの。



苗族の女子が機^{はた}を織るところ

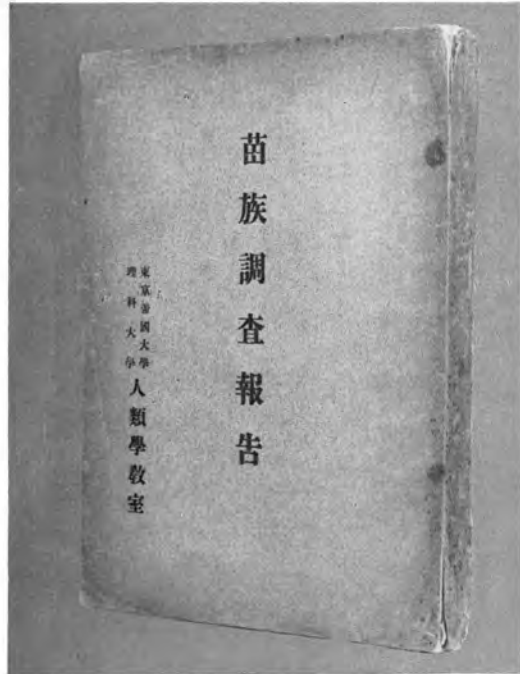
苗族（白苗）の女子が麻布を織っているところを鳥居先生が撮影したもの。



苗族が笙しょうを吹くところ
苗族（打鉄苗）が笙を吹いているところを鳥居先生が撮影したもの。

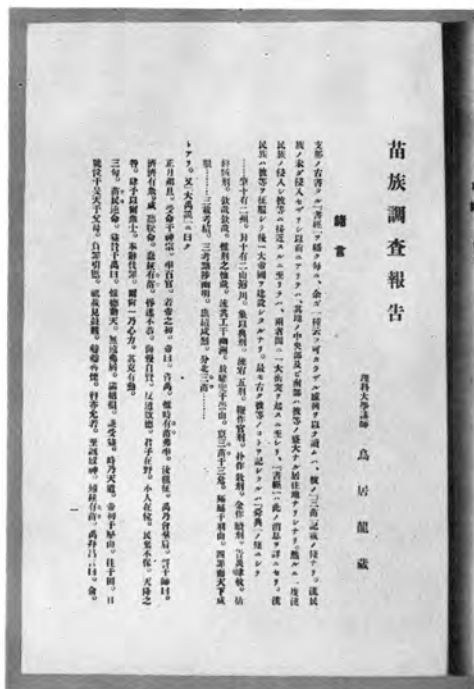


人類学上より見たる 西南支那
鳥居龍藏著、大正15年 富山房発行。796P 23cm。
明治35年～36年、9か月にわたって西南支那の苗族などを調査したときの日記。



苗族調査報告

鳥居龍藏著、明治40年 東京帝国大学理学部出版。285p 図45 26cm。
 明治35~36年、苗族に関する人類学上の調査をおこなった事項について記述したもの。



同書の内容 (第1ページ)



蒙古地圖

「土俗学上より観たる蒙古」(鳥居きみ子著 昭和2年発行) 所載。
 黒い実線は鳥居先生夫妻が調査旅行をした経路。



蒙古旅行の記念写真
明治40年第2回蒙古調査旅行出発前に撮影。



龍蔵君とりくのたのみをうけて蒙古に行を送る
翼には皇国のおもさのせてゆけ
とづくにかけのわか鳥居ぬし
御歌所参候 文学博士 榎 郁

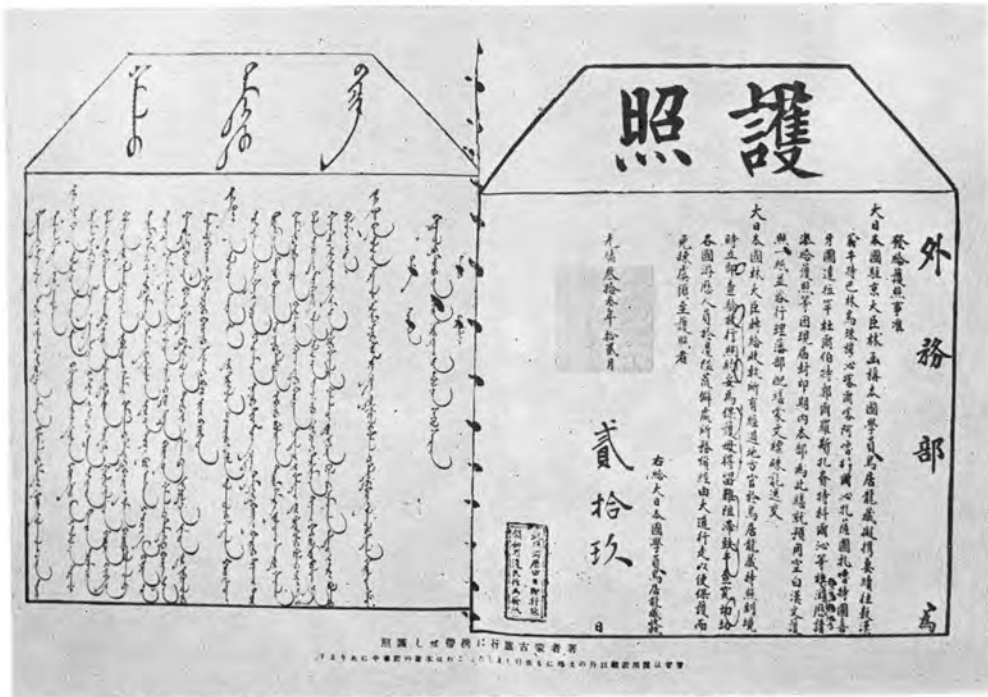
小杉博士の歌

蒙古の調査

明治三十九年(一九〇六)蒙古(モンゴル)喀喇沁王府女学堂(女学校)の教師に招かれた夫人とともに蒙古に行き土俗の研究のかたわら蒙古語を学んだ。翌四十年(一九〇七)いったん帰国し、誕生した長女幸子さんを抱いて夫婦で再び蒙古に行き、幾多の苦難と闘いながら東部蒙古の巴林(バリン)・扇牛特(ウエンニウト)を中心に興安嶺(クワンアンリン山脈)を踏破し、北はブイルノール湖畔から南は赤峰(チーフオン)・多倫(トールン)にいたる間の人類学・土俗学・考古学的調査をおこない、契丹(註)すなわち遼の遺跡や遺物について基礎研究をした。

蒙古の考古学的研究はロシア人により始められたが、それは主として歴史的記念物を対象としたもので、石器時代の遺跡・遺物についてはあまり注意されなかった。蒙古の石器時代の調査は日本の鳥居先生によって初めて着手せられ、蒙古に石器時代の遺跡・遺物の存在することが確かめられたのであった。

〔註〕契丹・遼 一〇〜一二世紀に契丹族(遼河上流地域に住んでいた蒙古系の遊牧民)が建てていた中国の王朝。渤海を滅ぼして満州一帯を支配し、ついで中国北部の一部を合わせ国号を遼とした。(上京・中京・東京・南京・西京の五京をおいた。)金に攻められ九代二一〇年で滅んだ。



鳥居先生夫婦が蒙古旅行に携帯した護照
護照とはパスポートである。当時は清帝国時代であったから漢文と蒙古文との両様でしるされている。

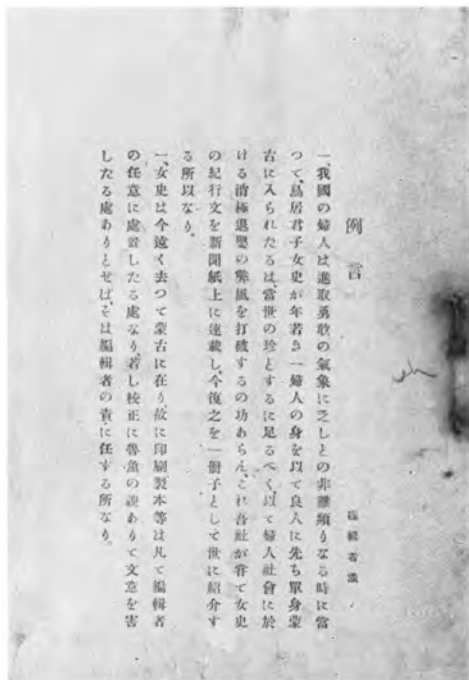


西札嚕特^{フヤロツト}における鳥居先生夫婦
明治40年撮影。中央は長女幸子さん。後ろは「ウブスングル」(蒙古の草葺の家)



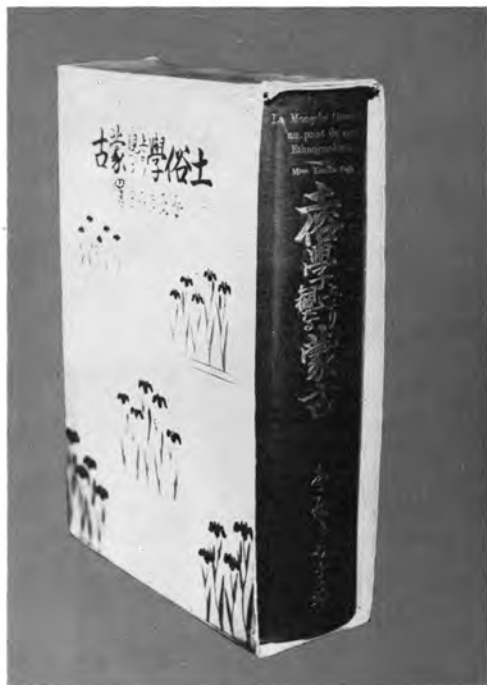
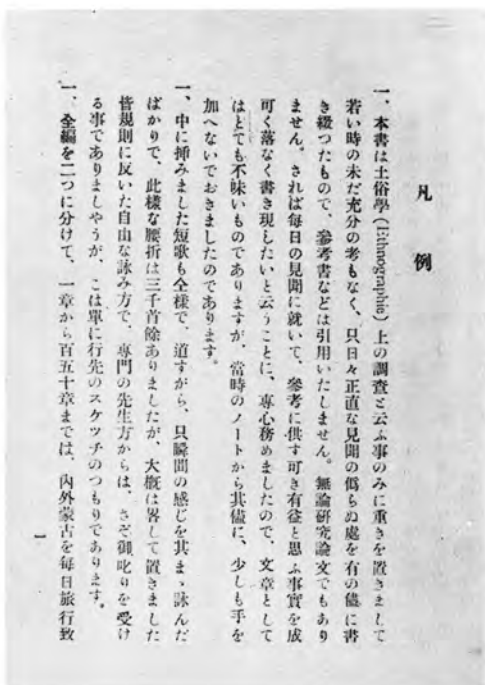
蒙 古 旅 行

鳥居龍蔵著、明治44年 博文館発行。614p 23cm。
 明治39年・40年興安嶺および潢河（シラムレン）流域を中心に東蒙古を探查した旅行日記。「有目、有足」の題字は山県有朋公の書。



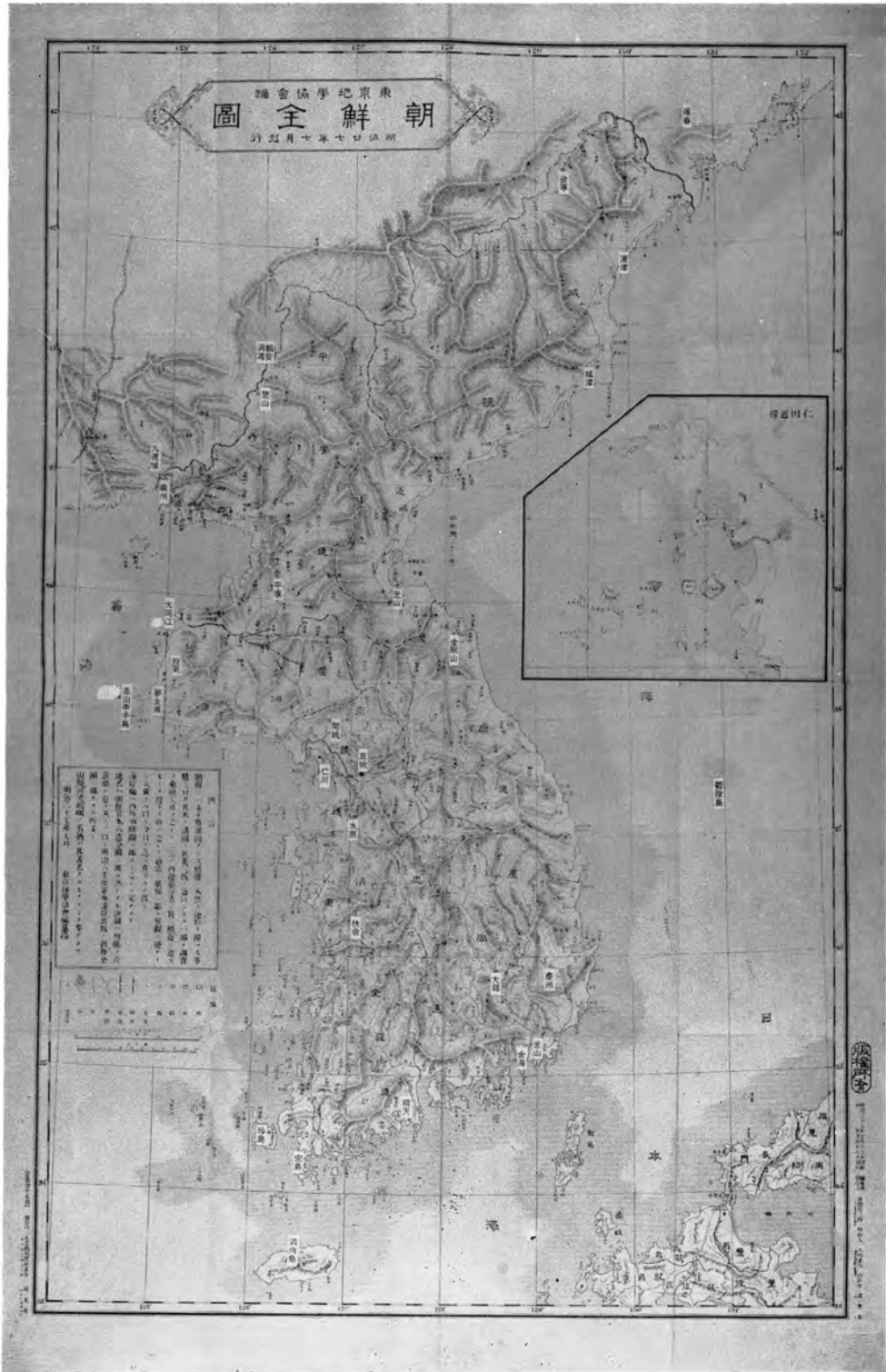
蒙 古 行

鳥居きみ子著、明治39年 読売新聞社発行。 179p 19cm。
 明治39年蒙古喀喇沁王府女学堂に赴任の紀行文。当時読売新聞紙上に連載したものをまとめたもの。



土 俗 学 古 蒙 古

鳥居きみ子著、昭和2年 大鏡閣発行。 1159p 23cm。
 明治39年・40年内蒙古を土俗学上から実地踏査した日記。



朝鮮全圖

東京地学協会編 明治27年発行。白地内の地名は鳥居先生が調査旅行のとき行った所。



朝鮮の巫が用いる鈴

成鏡南道の巫人が使用する鈴。鳥居先生が採集したもの。この鈴は日本の巫人が使用するのと同じであって、鈴と鏡とがある。

朝鮮の調査

明治四十三年(一九一〇)朝鮮総督府の嘱託となつて朝鮮の予備調査をおこない、翌四十四年(一九一〇)朝鮮の第一回調査をおこなつたのを初めとして四十五年(一九一〇)第二回調査から大正五年(一九一六)第六回調査まで毎年朝鮮の石器時代の遺跡調査と朝鮮人の生体測定をおこない、かたわら朝鮮の土俗をも調査した。

朝鮮に石器時代遺跡は存在しないといわれていたが、先生の調査によりその存在が確認せられた。また、ドルメン(支石墓)は埋葬跡であることが明らかにせられた。

平壤(ピョongan)付近の古墳は高句麗のものと考えられていたが、明治四十三年(一九一〇)先生がこれを初めて漢の楽浪郡の遺跡であると指摘したことは有名である。

のち、昭和七年(一九三二)満州調査旅行のとき、遼と高麗との関係を明らかにするため、満州から朝鮮に入り開城(ケイソン。高麗の故都。)などを調査した。

(註1) 支石墓 朝鮮では「支石(コヒンドル)」とう。石器時代から金石併用時代のもの。

(註2) 楽浪郡 紀元前二世紀末に漢の武帝が北朝鮮に置いた四郡の一つ。現在の平壤(ピョongan)付近。四世紀初めに高句麗に併合せられるまで四二〇余年間漢の領土であった。その遺跡からの出土品により漢の文化を知ることが出来る。

(註3) 高麗 一〇一〜一四世紀の朝鮮の王朝。(都は開城)新羅・百濟を滅ぼして朝鮮を統一したが、のち遼・金・元に従属した。一三九二年李成桂(李朝の太祖)に滅ぼされた。三四代四七五年間の治世であった。



殷栗のドルメン

黄海道殷栗(ウツユル)郡北部面雲山里にあり、大正5年鳥居先生が発見調査した。このドルメンは、天井石の長さ8m余、幅6m余、東洋最大のものである。



順天付近のメンヒル

全羅南道順天(スンチョン)付近にあり、鳥居先生が発見調査した。このメンヒル(立石)は同地の人が尊拝し、これに種々の祈りをしていた。



楽浪古墳

平壤（ピョンヤン）付近、大同江（テートン川）畔にある。明治42年（1909）鳥居先生が初めて平壤付近の古墳が漢の楽浪郡の遺跡であることを指摘し、翌43年史学会においてそれを発表した。当時日本および朝鮮の学者はこれを高句麗の遺跡であると考えていたので、反対せられたが、その後発掘調査により鳥居先生の説が正しいことがわかった。



高句麗王の墳墓

高句麗は、古代朝鮮三国（新羅・百濟・高句麗）の一つで、紀元前1世紀—紀元7世紀に満州南部から朝鮮北部にかけて高句麗人が建てていた王国（都は初期桓仁付近、中期丸都（今の輯安）、後期平壤）である。写真は鴨緑江（ヤル川）の中流、満州（中国リャオニン（遼寧）省）輯安県（チーアン）の洞溝（トンコウ）にある高句麗王の墳墓で、石造ピラミッド型のもの。鳥居先生は明治38年満州調査、明治45年朝鮮調査のときこれを調査した。



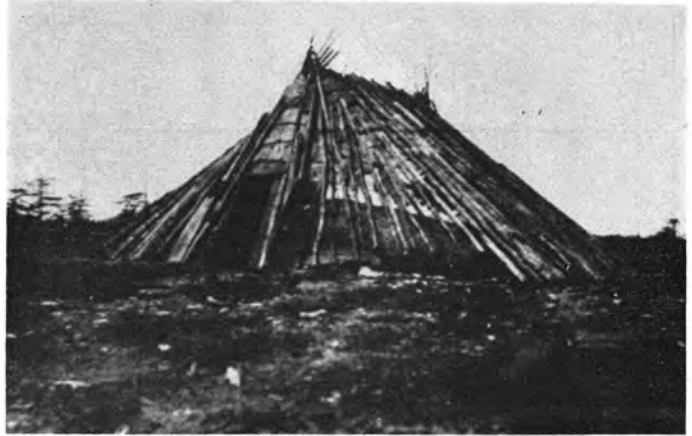
樺 太 調 査

ヌイオ付近における鳥居先生(中央)

樺 太 の 調 査

明治四十四年(五二)樺太庁の援助で南樺太を旅行し、オロ
ツコ・ギリヤーク・樺太アイヌの人類学上の調査をおこな
い、土俗品を採集した。

大正十年(三三)北樺太(サハリン州)を旅行し、石器時代の遺
跡・遺物やギリヤーク・オロツコについて調査した。



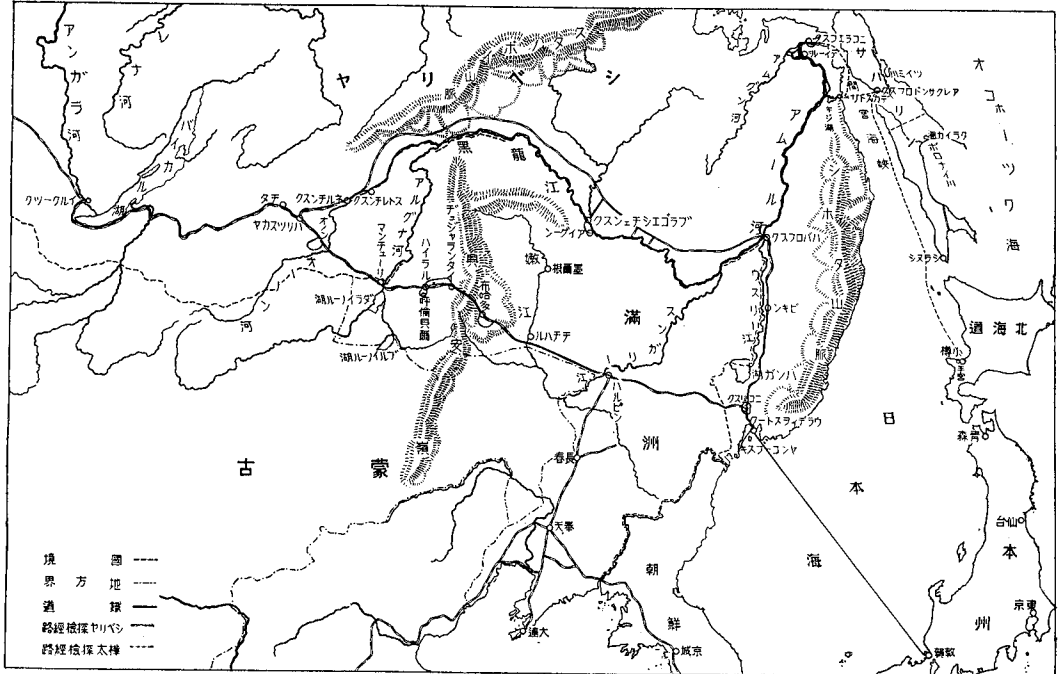
北樺太のオロッコの家屋



北樺太のオロッコ



北樺太のギリヤークが丸木舟に乗っているところ



東部シベリアおよび北樺太調査旅行地図

「人類学及人種学^{より}見たる北東亞細亞」(鳥居龍藏著 大正13年発行) 所載。

東部シベリアの調査

大正八年(一九一九)東京帝国大学から派遣せられてバイカル湖以東の東部シベリアを調査旅行した。ロシアの学者の研究調査の業績を調べ、ヤンコフスキー半島の大貝塚をはじめ各地の遺跡遺物を調査し、ブリヤート蒙古人その他各種民族を測定し土俗上の調査をした。

大正十年(一九二一)北樺太調査の際、キジ湖付近と黒龍江(テムール河)畔でギリヤークの身体測定や諸調査をし、石器時代の遺跡を調査した。

のち、昭和三年(一九三二)長女幸子さんを同伴して黒龍江畔の石器時代遺跡を調査した。

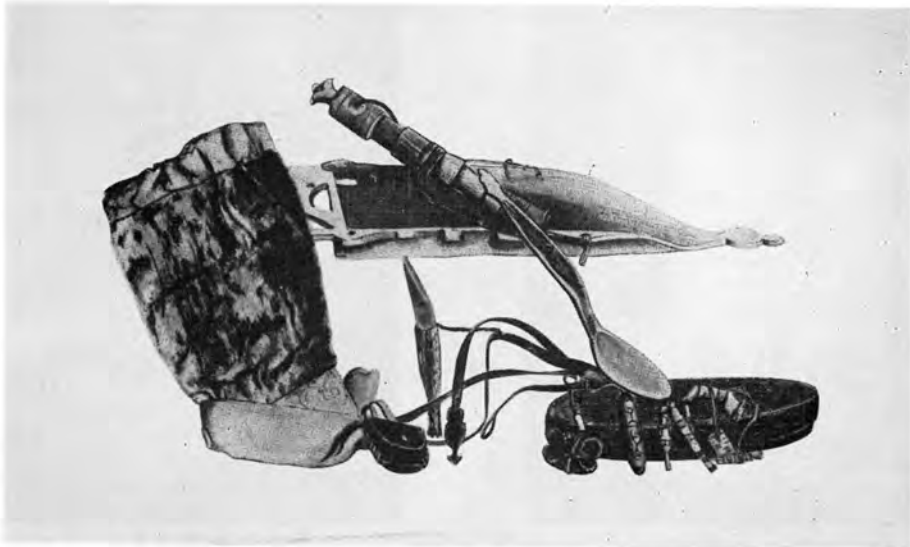
シベリアは秘密に閉ざされ学術上暗黒界に属していたが、先生がそこに住んでいる諸民族と石器時代の遺跡遺物を調査解明したのである。



黒竜江のギリヤーク



シベリア調査のときの肖像
大正8年シベリア調査のときロシアの写真師の懇望により撮影したもの。



黒龍江畔および北樺太ギリヤークの土俗品

鳥居博士が採集したもの。前列左から 皮靴・小刀子・皮帯にいろいろの品をさげたもの・火打袋・杓子・たばこを入れる箱。後列左から 物掛け・子供のゆりかご。



黒龍江と北樺太

鳥居龍蔵著、昭和18年 生活文化研究会発行。
410P 18cm。 大正8年・同10年の調査旅行
に基づき、東部シベリアのうち黒龍江と北樺太に
おける人類学・考古学に関して記述したもの。



人類学及人種学^{上より}見たる北東亜細亜

鳥居龍蔵著、大正13年 岡書院発行。501P 19cm。
大正8年東部シベリア、同10年北樺太の人類学・
人種学・考古学上の調査旅行の日記。



西比利亚から満蒙へ

鳥居龍蔵・鳥居君子・鳥居幸子共著、昭和4年
大阪屋号書店。478P 19cm。昭和3年人類学・
考古学研究の目的で東部シベリアから満州蒙古を
探査した旅行日記。



古蹟調査特別報告 第二册

鳥居龍蔵、大正11年 朝鮮総督府発行。
45P 26cm。大正8年人類学・考古学研究の目
的^的で東部シベリアと北満州を調査した事項の概略
を旅行日記として記述したもの。

芝公園西小丘古墳と同一所より発見したる土偶



右方土石のある所に古墳の中心にして人物の位置は土偶を発見したる所なり



芝公園古墳発見 2 個の埴輪土偶

鳥居先生の主宰する雑誌「武蔵野」創刊号に所載。先生がこれについて調査研究した論文も掲載してある。

国内の調査

関東地方

明治二十三年(一九〇)

上京して間もなくはじ

めて東京郊外(現在、東京

西ヶ原貝塚を発掘し、

その後たびたび、東京

とその周辺の石器時代

および原史時代につい

て調査研究した。

明治二十五年(一九一

千葉県九十九里浜海岸

の網島で貝塚を発見

し、上総にも石器時代

遺跡の存在することを

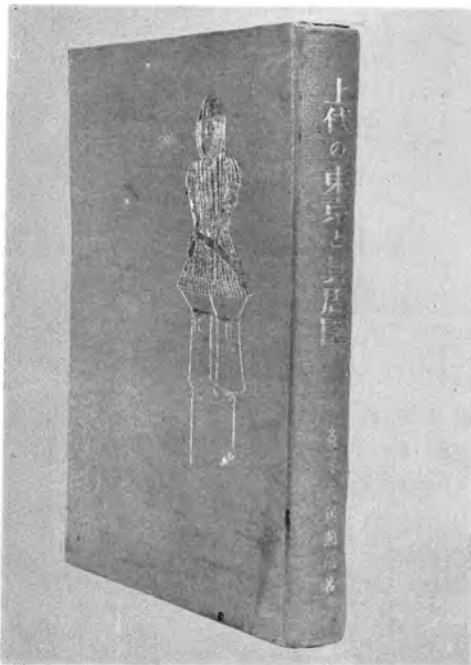
はじめて明らかにし

た。



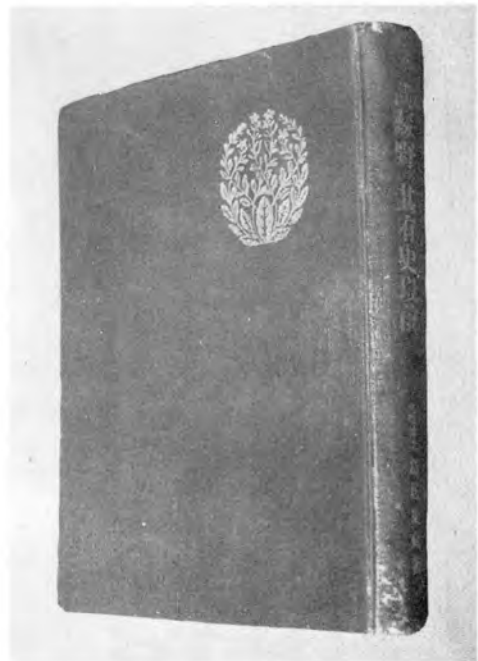
武蔵野及其周圍

鳥居龍蔵著、大正13年 磯部甲陽堂発行。313P 19cm。
武蔵野とその周囲の石器時代・原史時代・歴史時代について記述したもの。



上代の東京及其周圍

鳥居龍蔵著、昭和2年 磯部甲陽堂発行。334P 19cm。
主として東京の上代（原史時代）について記述したもの。



武蔵野及其有史以前

鳥居龍蔵著、大正14年 磯部甲陽堂発行。293P 19cm。
武蔵野の石器時代について記述したもの。



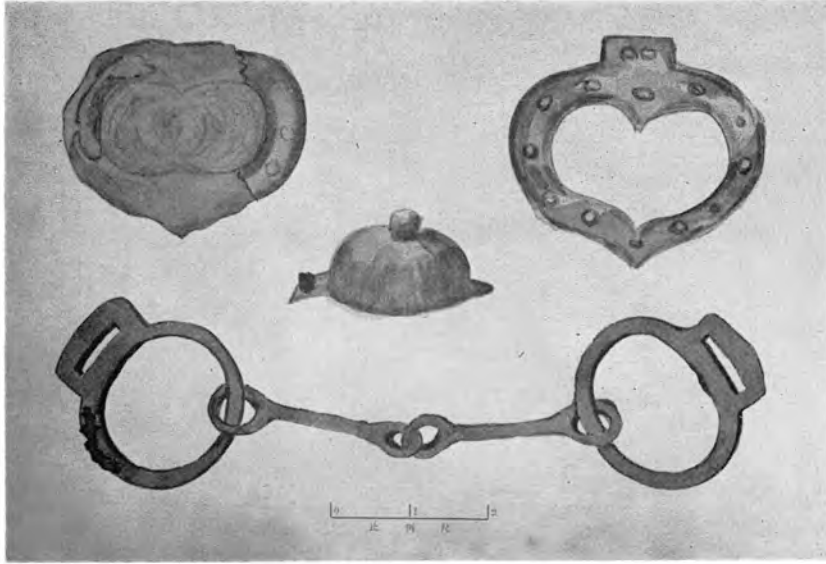
長野県諏訪の調査

大正9年長野県諏訪郡の先史時代最高遺跡地（旧御射山）を調査した一行。中央が鳥居先生。右端が八幡一郎氏。

中部地方

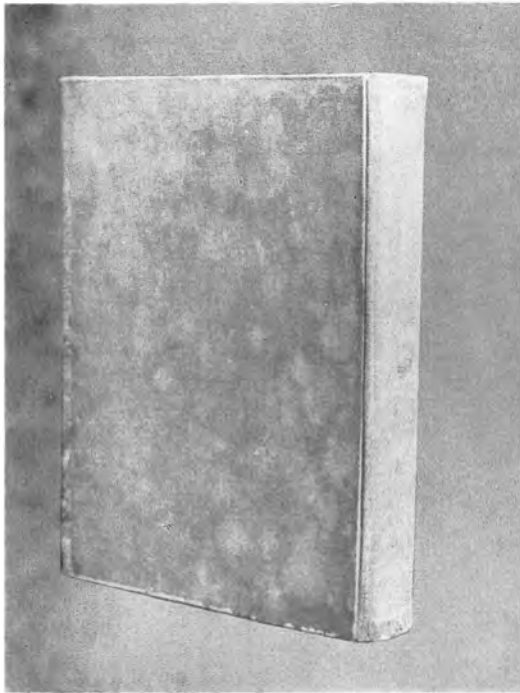
明治三十四年（一九〇一）徳川頼倫侯とともに岐阜県（飛騨）白川の古部落および能登半島を人類学・土俗学上から調査した。

大正九年（一九二〇）新潟県（感後と佐渡）を考古学上から調査した。同年長野県（信濃）諏訪郡、翌十年上伊那・木曾地方と日本の高山地帯について考古学上の調査をおこなった。



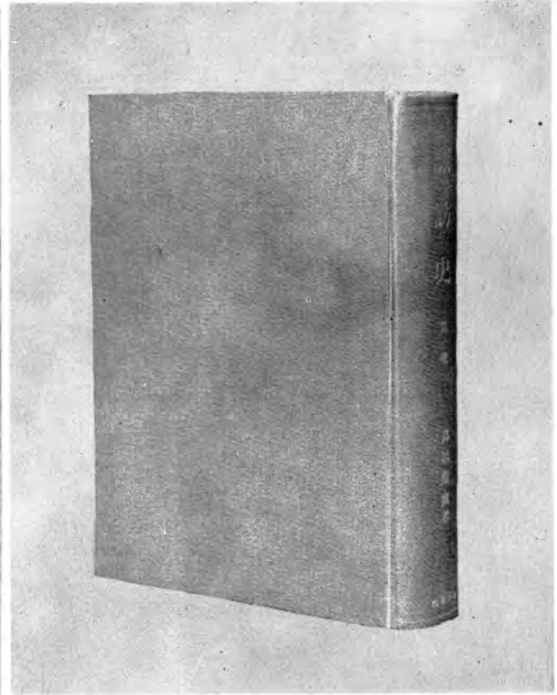
諏訪発見の馬具

長野県諏訪郡宮川村茅野（現在茅野市）の金鍔塚および四ツ塚発見の馬具。鳥居博士はこれについて原史時代（古墳時代）この地方に騎馬の風習が盛んであったことを物語るもので、馬具の発達には北方アジアの民族のそれと密接な関係があると説いた。心臓形の鍍金した馬具装飾品は西域（ペルシア）式であると考えられた。



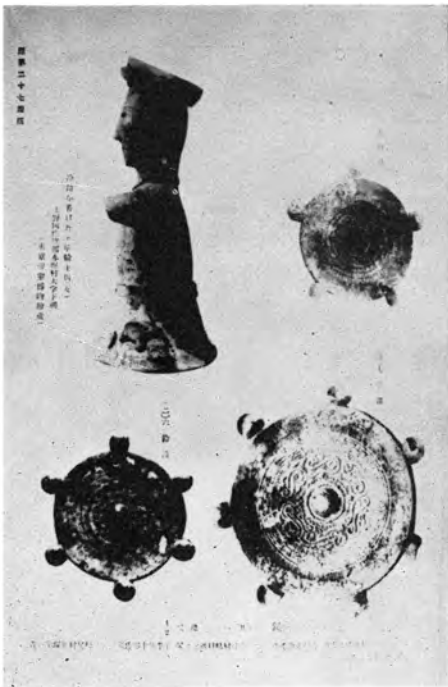
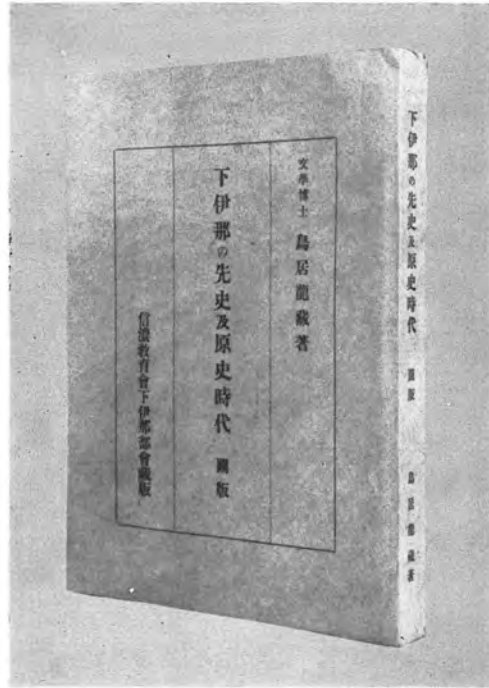
先史及原史時代の上伊那

鳥居龍蔵著、大正15年 信濃教育会上伊那部会発行。
305 P 図36 26cm。
長野県上伊那郡の先史および原史時代について調査研究した結果を記述したもの。



諏訪史 第1巻

鳥居龍蔵著、大正13年 信濃教育会諏訪部会発行。
210 P 図62 26cm。
長野県諏訪郡の先史時代と原史時代について調査研究した結果を記述したもの。



下伊那の先史及原史時代 図版

鳥居龍藏著、大正13年 信濃教育会下伊那部会。図71 26cm。
長野県下伊那郡の先史および原史時代の遺跡・遺物の写真を集録したもの。



和歌山県名草郡鳴神村貝塚 (現在 和歌山市内)



奈良県高市郡新沢村遺跡 (現在 橿原市内)

近畿地方

明治三十七年(一九〇四)奈良県・大阪府・和歌山県・三重県などへ人類学取り調べのため出張、和歌山市の東方鳴神において畿内唯一の貝塚を発見した。

近畿地方の石器時代の調査は進んでおらず石器時代の遺跡は少ないとする説が多かったとき、先生は多くの石器時代遺跡遺物を発見し一新紀元をつくった。

大正六年(一九一七)本山彦一氏とともに奈良県を中心に近畿の各地を調査し、少数の縄紋式遺跡と多数の弥生式遺跡を踏査した。



徳島城山貝塚

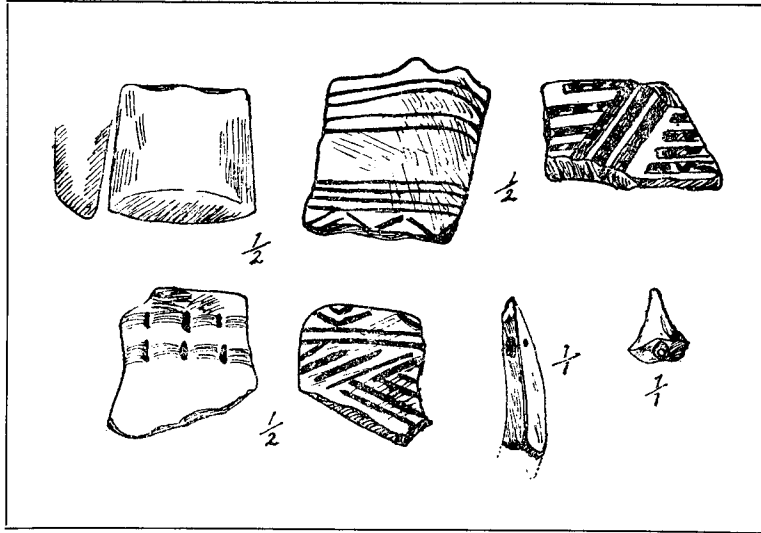
大正11年4月発掘中の写真で、入口に立っているのが鳥居博士。



城山貝塚のおもな発掘物

図の説明文中にある「アイヌ式土器」は今日では「縄文式土器」といわれている。

四国地方
 明治二十九年(一九〇六)徳島県の木頭地方の土俗について調査した。大正十一年(一九二二)徳島市城山の貝塚を発見し、愛媛県・高知県でも貝塚や巨石遺跡を調査した。



沖縄本島貝塚発見の土器・石器・骨器

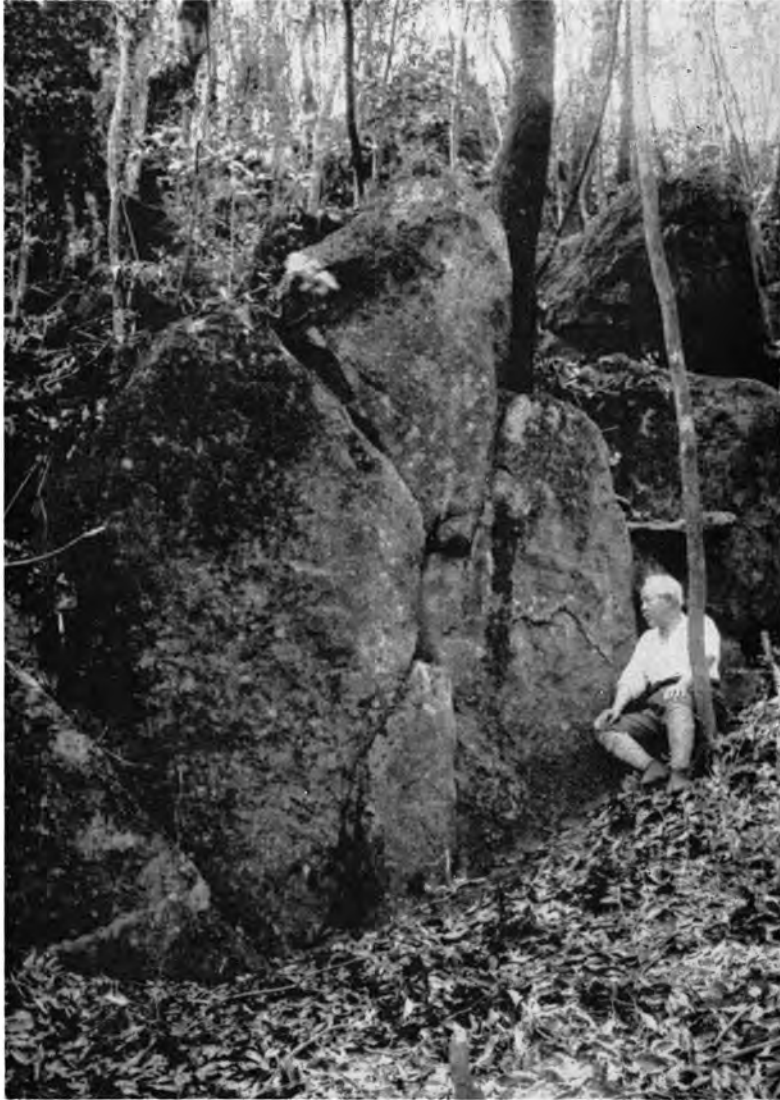
九州地方

明治三十七年(一九〇四)沖縄島・宮古島・八重山島・与那国島に渡って住民の測定をしたり、考古学的・土俗学的調査をおこなった。そうして琉球列島(沖縄諸島)が人類学上いかなる位置にあるかを明らかにした。

このとき島々の民謡や言語を蓄音機に録音したが、これは蓄音機を人類学研究に利用した最初である。

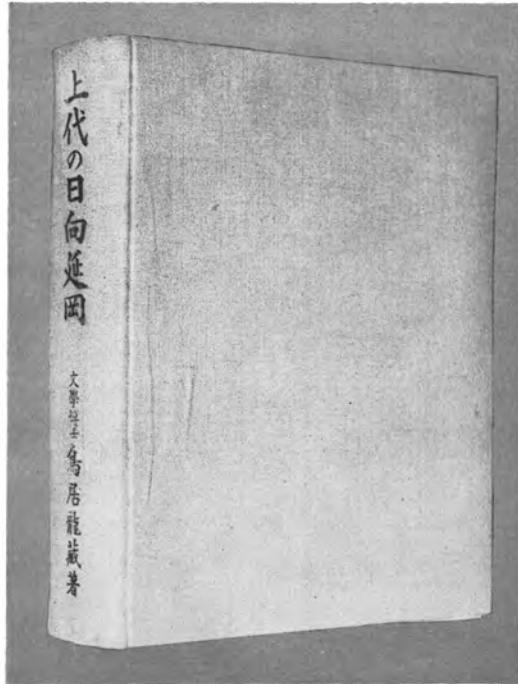
大正二年(一九一三)から昭和四年(一九二九)にかけて数回、宮崎県の延岡を中心に多くの古墳を発掘し、神話に富む日向の上代(原史時代)を考古学的に解明した。

奥羽地方・北海道地方のほか日本各地ほとんど余すところなく踏査し、日本の石器時代の研究に多くの業績を残した。



可愛嶽頂上拝み岩の奥の立石

昭和4年宮崎県の有名な山である可愛嶽頂上にある巨石遺跡（有史以前に尊拝の目的で作られたもの）を調査したときの写真。



はしがき

本書は主として数回に渉つた古墳発掘調査を基礎として記したもので、これが、その繁華や集落その他の事項に渉らない。這は、いづれ日々にこれを記する歩である。

私は本書の記事を最も簡略概要を旨とし、紙数を約二百頁以内に限つたのである。最初の豫定通りに従ふも、却とも紙数は五百頁を要する計算であつた。されば、ケツテ抑塞地帯等も大に省略した。私はこの数回の調査發掘に就ての概観寫眞回遊は一、千枚以上の多量に上つて居たのである。

本書の記事は全く延岡一帯を主とし、敢て他の地方には及ばさない。他地方の事に就ては別に記する所である。これは延岡一帯の事實を日向の一横断面二断面として見たもので、これで上代の日向を窺はれるやうに記述して置いた。そこで書名も上代の日向延岡と附けたのである。

この書は決して作成したものではなく、いづれも考古學上から實地に發掘し、これを確かめた結果である。私はこの調査發掘をするに就て、實に四回の延岡行をしたのであつて、これに對し宮崎縣知事の許可内藤子爵の手厚い後援及び各位の助力に
はしがき

謹て本書を日向延岡上代古墳の靈位に捧ぐ
著者

上 代 の 日 向 延 岡

鳥居龍蔵著、昭和10年 鳥居人類学研究所發行。 198P 27cm。
宮崎県の延岡一帯の上代すなわち原史時代について古墳發掘調査を基礎として記述したもの。



序 言

本書を「有史以前の日本」と題せしは、全く昨年の大阪濱寺講演で私が「有史以前の日本」を述べましたを記念せんが爲めであります。茲に有史以前と云ふのは、之までのアイヌの石器時代は固より含んで居りますけれども、其殆んど總ては近頃の調査で分つて来た我々祖先、即ち固有日本人の有史以前を云ふのであります。近頃まで日本内地に石器土器を残した石器時代の民族はアイヌ(坪井先生のコロボツクル)ばかりと考へて居りましたが、今や吾人祖先もすでに石器時代の當時から大陸より移住して居つた事が證明せられて来た。是に於てか之までの如き吾人祖先は金属器時代、しかも農業をなした時に始めて此處に移住して来たと云ふ學説は

有史以前の日本 (初版)

鳥居龍藏著、大正7年 磯部甲陽堂発行。450P 19cm。
固有日本人の石器時代について記述し、それと密接な関係のある日本周辺の調査研究におよんでいる。書名は鳥居先生の自筆。

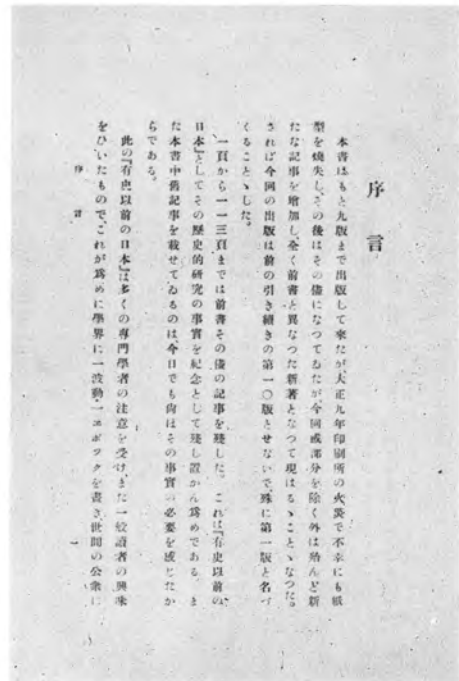
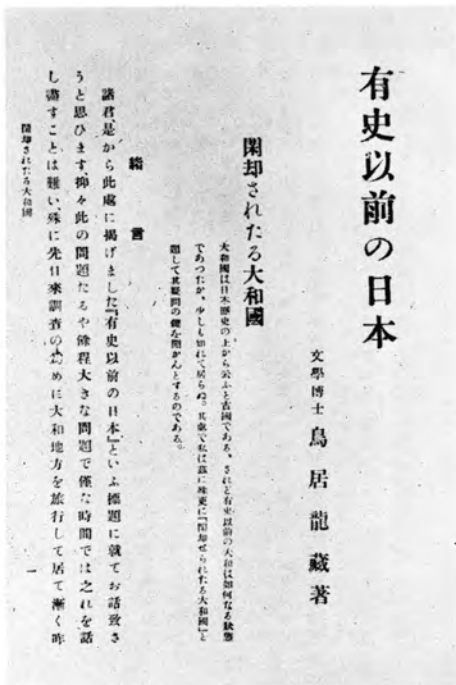
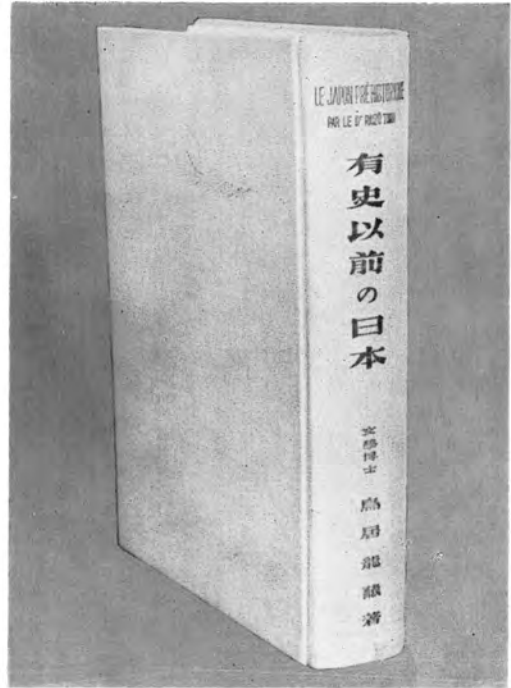
日本の石器時代住民(縄紋時代人)について、明治時代コロボツクルとする学説(坪井正五郎博士とアイヌとする学説(小金井良精博士)と激しい論争がおこなわれ、当時の学界をにぎわした。そのさ中、鳥居先生は明治三十二年北千島アイヌ調査の結果アイヌ説に有利な条件をもたらし、大正時代には鳥居博士は小金井博士とともにアイヌ説の双璧となつて、大正の中ごろまで先生の学説は一世を風靡した観があつた。

縄紋式土器については、厚手式と薄手式の二派があり、薄手式は貝塚に多く海岸部族の作、厚手式は山手に多く山岳部族の作で、両者は同時代に併存していたものと考えられていた。この厚手論・薄手論も鳥居博士の名とともに記憶せられている学説である。

(註1) 日本の石器時代住民 今日では日本の石器時代住民(縄文時代人)は現在の日本人の直接の祖先であることがほぼたしかであると考えられている。

(註2) 縄文式土器 明治から大正の中期までは、鳥居博士ばかりでなくわが国の考古学者は、日本各地に出土する縄文式土器をアイヌ式土器と呼び、ひいては縄文式土器を使用したものをアイヌとし、これを日本の原住民と考へていた。

今日では、縄文式土器の精密な年代区分がおこなわれ、鳥居博士の厚手式は縄文式中期、薄手式は後期とせられている。



有 史 以 前 の 日 本 (第 10 版)

鳥居龍藏著、大正14年 磯部甲陽堂発行。 805P 22cm。
初版と第10版以後とは内容外装ともに相異している。この「有史以前の日本」
(大正14年改訂版)は名著として後学に教えるところが多かった。



有史以前の跡を尋ねて

鳥居龍蔵著、大正14年 雄山閣発行。266P 19cm。
日本各地の調査旅行先から先史時代・原史時代・
風光・人文・歴史などについて見聞したことを知
己・家族などに書いて送ったものを集録したもの。



人類学上より見たる我が上代の文化 (1)

鳥居龍蔵著、大正14年 叢文閣発行。382P 23cm。
わが国の上代（原史時代）の文化を人類学上から
観察したもの。日本の原始神道が東北方アジア民
族のシャーマン教の系統に属しているとするなど
特色のあるものである。



地学叢書第二卷
人種学

鳥居龍藏

撰著

東京
大日本図書株式会社

(明治二十七年十一月再版)

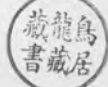
人種学

鳥居龍藏著、明治37年 大日本図書株式会社発行。404P 23cm。
世界の諸人種について記述したもの。



人種誌

大東洋学教授 大正大学 理科大学 助教授 坪井正五郎
鳥居龍藏編輯



東京

嵩山房
出版

人種誌

鳥居龍藏著、明治35年 嵩山房発行。
135P 22cm。世界の人種各種族の異同、分布などについて記述したもの。



東洋人種学叢書第一卷
極東民族
鳥居龍藏著

極東民族第1卷

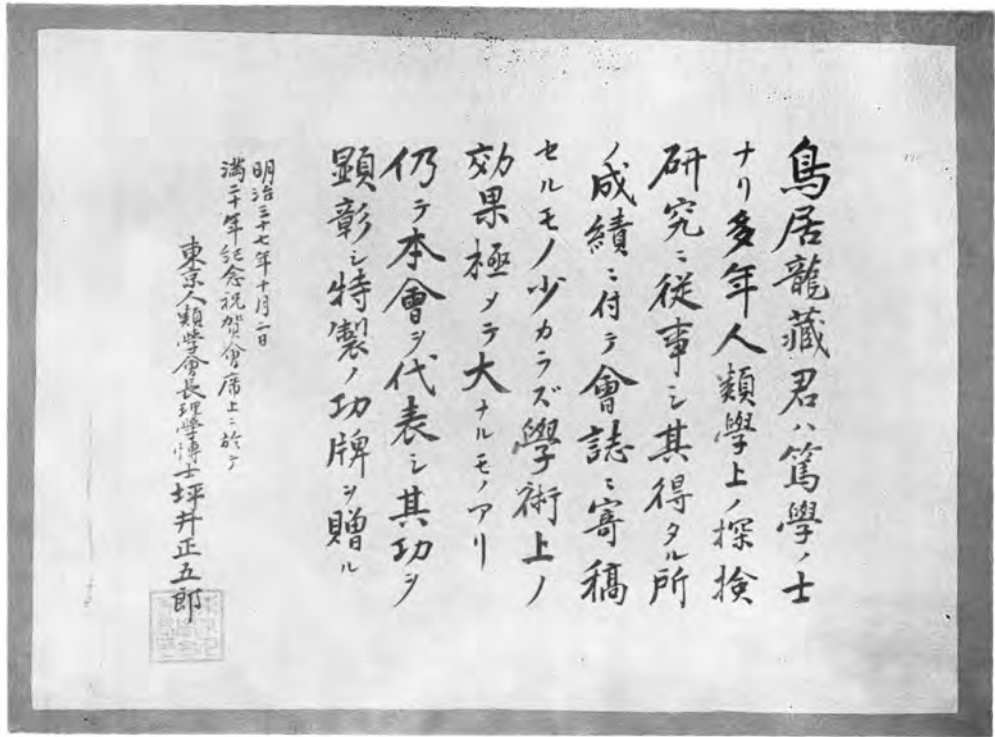
鳥居龍藏著、大正15年 文化生活研究会発行。
612P 23cm。日・支における人種・民族研究史と、東北方アジアの原始的状态にあるチユクチ族・コリヤーク族・アレウト族・ユカギール族について記述したもの。



日本周圀民族の原始宗教

日本周圀民族の原始宗教

鳥居龍藏著、大正13年 岡書院発行。
308P 19cm。
日本原始宗教との比較研究に必要な日本周圀のアジア大陸および南方諸島における固有の原始宗教について記述したもの。



東京人類学会から受賞

明治37年（1904）10月東京人類学会満20年記念祝賀會に會長坪井正五郎博士から鳥居先生に贈られた表彰状である。

3 学 会

東京人類学会

東京人類学会（現在、日本人類学会）は、大正二年（一九一三）會長坪井正五郎博士（明治二十九年から大正二年まで會長）が死亡してからは會長をおかず、鳥居先生が編集主任となって運営した。

○土俗會談話錄

○土俗會談話錄

(羽前、越後、信濃、肥後の正月其他)

左に掲ぐるものは昨年七月二十四日午後六時より東京麹町區富士見町四丁目明治義會に於て開きたる土俗會の談話筆記なり。出席者は主として同義會夏期講習會會員なり。

開會の口上 發起人 鳥居龍藏

諸君兼て御約束申せし土俗會は本夕只今幸にして開會する事と成りました。之れ全く諸君の熱心の致す處にして私は諸君に向て深く謝します。殊に明治義會々長及職員諸氏は我等の今回の舉を賛成せられかく講堂を貸し與へられ。尙坪井理科大學教授は鼻中をも厭はせられず學問の爲め御出席下されしは龍藏本會一同に代て深く謝する處であります。

さて、土俗會を今回開會せしは敢て好奇心より出でしに非ず。全く當時明治義會の夏期講習會に付ては各地方より出京せられ居る方々が夥多しく御座りますから此機會失ふ可からず。是等の諸君が何處かで一同に會合し共に

其地方に行はるゝ風俗習慣言語口碑の事など談じ合ひなば土俗研究上少なからざる有益の材料を得るならんとして授こも本夜土俗會を開く事と致しました。

斯る會合は皆て東京大學及び豫備門の生徒が大學講議室に集會し各地方の方言會を開かれたる以來。蓋本會本夜の舉か第一着で御座りまじやう。然らば我日本に於て各地方の人士が集合し一定の目的を以て其地の土俗に關する談話を互になすはこれが始めて御座ります。殊に此會にして場處は明治義會の講堂。専門學者たる坪井教授の來會あるは是れ最も本會の名譽にして。私は日本土俗學研究歴史中へ此會の本夕の集りを大書特筆せんことを望みます。諸君は此の會合は決して本夜而已に止めず。尙時々各府縣の人々の集會の際には盛に土俗會を開かれんことを望みます。

私は土俗の學問に就ては無學です。甚だ恐れ入れども本夜の此の會に於ける土俗談話上の注意の事は一切坪井教授に御依頼申し置きあれば。諸君は教授の御話により續々其地方の風習を御述べあらん事を願ひます。

東京人類学会雑誌に掲載せられた土俗會談話錄

明治26年(1893)7月開催の土俗會の談話を東京人類学会雑誌第94号(明治27年1月發行)に発表したもの。日本民俗学発達史の上ではこの土俗會が最初のものである。

編者曰、次に坪井氏の談話筆記を挿入すべき等なれど同氏は此談話の主意を押し弘めて「土俗調査より生ずる三利益」と題する文を起稿し遠からず本誌に投せらるゝ趣なれば今回の分は省察する事とせり。

日本各地新年の風習 鳥居龍藏

只今御開取ありし如く坪井教授が御教示ありしは年中行事の正月の風習に就てなれば。今夜の會合はこれより其正月の風習を述べる事と致します。因て諸君はこの御考へで御地方の正月の事を御話ありたし。

諸君今夕の談話は成る可く奥羽の方より九州の方に參る様望みます。御覽の如く茲に大なる日本地圖が掛かつて居りますから諸君は願くば御生國郡等を豫め是に因て御示しの程願ひます。且つ御話も成る可く其地方の方言雜りにて望む處であります。

羽前西置賜郡 小林庄藏

諸君私は羽前國西置賜郡十王村の者で姓名を小林庄藏と申します。御承知の如く私の國の言葉は日本で名高き頗るワカサガ重き語なれば皆様は私の談話中御譯かりに

ならぬ處は充分御質問ありたし。

私の土地は山形、米澤、最上川の東十王村で交通不便の處です、何れに行くにも險難なる山や峠があり、仙台、福岡、新潟へは等しくとも二十五里ばかりもありません。誠に山間の僻地であります。

米澤侯は殊に學問を好ませられたから自然其領國も學問が盛で御座るじや。最初は古狀揃、實語經、童子經、經典等で一日に一時間位讀書し他は習字をする。

御師匠様へは一年中に度々御禮をあげます先づ節句には二十コツバ、正月には拾コツバ、五月にはサ、マキ、盆には一朱、ツメ（歳暮）には金持は三分、貧乏人は一朱若くは二朱、反物一反或は二反を送ります。

當地は正月儀式は悉く舊正月で決して新曆は用ひません。新曆で正月をせば「役場學校の御正月」と稱し是れを別に致します。

十二月二十八日に餅をつき正月の喰ひ物と致します。さて二十八日に餅をつき終らばこれを直ちに食し其れよりスグ「松迎へ」に行く三階—五階—七階の松を迎へ



「武蔵野」創刊号

鳥居龍藏主宰、大正7年7月7日 武蔵野会発行。

拜啓陳者兼て各個人類學者の熱心に計畫致し居られ候萬國聯盟人類
 學統一會合の件も昨年九月十四日佛蘭西巴里會議の結果強々同地に
 萬國聯盟人類學院（アンヌチチユ、アンテルナシナル、ダントロボ
 ロジ）設置相成、且つ規則第六條に因て小生を全院正員及び委員
 に推薦せし旨公式に通報有之候、這は小生に取ては非常なる名譽の
 事に候が之れ全く日頃御指導の賜と信じ申候、尙ほ今後斯學上の御
 高見を承り度と共に一層御教示の程偏に願上候、先は右まで

大正十年 月 日

鳥 居 龍 藏

万国聯盟人類學院入会あいさつ状

武 蔵 野 会

大正五年（一九一六）武蔵野会を創立し、武蔵野の文化史研究を鼓吹し指
 導した。雑誌「武蔵野」を発行し、月々東京およびその付近の見学旅
 行をおこなった。会員は趣味でおこなっている研究家たちであった。^{〔註1〕}

〔註1〕大審院の判事、華族、教授、教員、軍人、弁護士、サラリーマン、職
 工、宿屋の主人、劇関係の人など、各階層の人たち。会員数は千人を上
 下していた。

萬 国 聯 盟 人 類 学 院

大正十年（一九二一）パリーの萬國聯盟人類學院から正会員および日本同
 学代表委員に推せんせられた。



武蔵野の遺物の発見——東京総持寺の鑄銅刻画蔵王権現像

東京都足立区西新井町総持寺蔵。平安中期の優品—背面には長保三年（1001）の銘があり、わが国蔵王権現像で年号の判明する最古のもの。昭和7年鳥居博士が発見し、国宝に指定せられた。



武蔵野の遺跡をたずねた鳥居博士—滝沢馬琴の墓

滝沢馬琴は江戸時代の小説家で、「南総里見八犬伝」などの長編大作をつぎつぎと発表した。重なる不幸にめげず筆一筋に生きぬいたこと、嫁が協力したことなどで、鳥居博士はこの人に関心をもっていた。墓は東京都文京区茗荷谷町深光寺にある。

學位記

東京府平民

鳥居龍藏

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求レ東
京帝國大學文學部教授會ニ於テ其
ノ大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タ
ル者ト同等以上ノ學力アリト認メ
タリ仍テ明治三十一年勅令第三百
四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ
文學博士ノ學位ヲ授ク

大正十年五月十日

文部大臣從三位勳二等中橋徳五郎

第一六五號

學位記

七、勳章と學位

大正九年(一九二〇)フランスパリー學士院からパルム・アカデミー勳章を贈られた。

大正十年(一九二一)東京帝國大學文學部に提出した論文「滿蒙の有史以前」が通過し、五月十日文學博士の學位を文部大臣から授与せられた。

◎不親控兵決處分若 鹿兒島縣ニ於ケル 所在不明ノ 徵兵決處分
今未決名中處分決ノタメ 爾後調査ヲ要セラル 者左ノ如シ(鹿兒島
縣)

Table with columns: 地 (Location), 氏名 (Name), 生年月日 (Date of Birth). Lists various locations and names such as 鹿兒島市高麗町六四戸, 大迫 稅彦, etc.

Table with columns: 同村久志 (Same Village Name), 江崎新太郎 (Name), 新福 蘇吉 (Name), etc. Lists names and their associated village names.

◎皇國警察 平塚伊勢ハ本月三日安下庄ヨリ志希志(向ヒ同安
ハ舞鶴ヨリ小濱(岩手)同(岩手)ハ佐世保ヨリ小濱(肥前)同(長
門)扶桑若宮(金剛)舞鶴ハ佐世保(馳速)松風ハ奥ヨリ別府(同日
秋モ著セリ(海軍省)

○學事
◎學位授與 文部大臣ハ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令
第二條ニ依リ本年五月十日在記ノ者ニ學位ヲ授與シ其學位記及
論文審査ノ要旨左ノ如シ(文部省)

東京府平民
鳥居 龍藏

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學文學部
教授會ニ於テ其ノ大學院ニ入り定規ノ試驗ヲ經タル者
ト同等以上ノ學力アリト認メテ明治三十一年勅
令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ文學博士
ノ學位ヲ授ケ

論文審査ノ要旨

本論文ハ滿蒙ノ有史以前ト題シ著者ク多年滿蒙ノ三地ヲ探檢
踏査シテ得タル結果ニ基キ先史考古學上ヨリ滿蒙ト東蒙古ト
ニ據レル最古ノ民族ノ種類ヲ推定セントスルモノナリ全文ヲ分
テ五編トナシ每編ニ數多ノ圖版ヲ挿入シ尙附録トシテ圖說ニ
册ヲ添ヘタリ
其ノ第一編滿蒙ノ有史以前ニ於テハ最初ニ漢土ノ古籍ヲ案ジ
テ漢ノ間ニ魏晉ト稱セル夷狄ハ南滿洲ニ據レル民族ナルヲ推
定シ本論ニ入りテハ調査ノ範圍ヲ遼東半島遼河流域ヲ運河太
子河ニ流域ノ三區トナシ其ノ遺蹟トシテ貝塚 堡壘 漆器ヲ記ル
シ其ノ遺物トシテ石器 土器 骨器等ヲ舉ケ而シテ其ノ石器ノ特
徵ニ依リテ之ヲ使用セル民族ノ新石器時代ニ屬スルヲ說キ更ニ
住居ノ構造力堅固ナルト被服ニ皮布ヲ用テ井ノ上ニ穴ニ扉ニ
冢ヲ構築セルト石器ノ製作法カ磨製ナルト土器ノ中ニ高塚ヲ
有シ且之ニ把子ヲ附シタルモノアルト堡壘力常ニ丘陵ノ上ニ築
造セラレタル等ノ事實ヲ綜合シテ終ニ此民族ヲ「ツングースト」種
ト稱シテ之ヲ原史時代ノ魏晉ハ其ノ諸蕃ナルニ外ナラズト論シ
タリ
第二編東蒙古ノ有史以前ニ於テハ初ニ漢土ノ史籍ヲ引用シテ周
末漢初ニ東胡ト呼ハレ東蒙古ニ據レル民族ナルヲ考
證シ更ニ本論ニ進ンテハ遺蹟ノ散布地域ヲ西遼河水
哈河 大小梁河 嫩河 白河ノ六流域及興安嶺方面ノ七區トナシ詳
細ニ其ノ存在ノ狀態ヲ敘述シ系統的二其ノ遺物ノ排列記載シ而
シテ住居ノ構造力堅固ナルト土器ノ中ニ高塚ヲ有セシ
且之ニ把子ヲ附シタルモノナキト其ノ上ニ施シタル紋様カ今日
蒙古人ノ間ニ行ハルモノト全ク同一ナル等ノ事實ヲ根據トシ
テ之ヲ遺蹟ノ遺物ノ所有者ナリ民族ノ蒙古種ナルヘキヲ論
シ而シテ漢ノ所謂東胡ハ其ノ子孫タルノキヲ說ケリ

論文審査の要旨が掲載せられた官報

論文審査主任白鳥庫吉博士の審査の要旨が掲載されている大正10年10月5日付の「官報」第2754号である。

道三橋府北郡縣ノ有史以前ニ於テハ調査研究ノ區域ヲ平安南道ト實邊道トニ限リ而シテ此處ニ存在スル遺物ノ中ニ一種ノ石塚トドレメントノ見ラレ、ニ依リ其ノ土器ノ中ニ高塚ト角型ノモノト把子ヲ有スルモノト存スルニ依リ其ノ石鏡カ悉ク磨製ナルニ依リ其ノ石斧ノ形式ト土器ニ印シタル紋樣ト清滿洲ノモノト吻合スルニ依リテ朝鮮ノ西北部ニ據レル原住民ハ清滿洲ニ住セシ民族ト同種ナルヘキヲ説ケリ

次ニ第四橋縣以外ノ有史以前ニ於テハ吾人西ノ發見ニ於テハ資料ヨリテ支那ノ黃河流域ノ中流ニ陝西省ノ有史以前ノ遺物ヲ考究シ著者カ石斧ト石鏡ト石斧カ一方ニ於テ山東族類ノ小體短小ニ發見セラル、ト共ニ他方ニ於テ豫古ノ石斧ト滿鮮ニ特有ナル石砲トトカ陝西省ノ土器ノ中ニ混入スル事實ニ觀シテ太古黃河ノ流域ト發上ノ地方トノ間ニ交通交通ノ存セシヲ認め、次ニ山東省ノ有史以前ノ遺物ニ於テ西人カ此ノ石斧ニテ採取セル石斧ノ中ニ清滿洲ノノレト全ク形式ヲ同シスルモノノ多キニ注意シ且ツ此處ヨリ屬列島ニ沿テ全州半島ニ往來スルコトノ甚ク容易ナルニ鑑ミ山東省ノ原住民ハ漢族ニアラスシテ其ノ對岸ナル滿洲ノ方面ヨリ移轉シ來レル種族ノ一種ナリトシ尙青黃河ノ流域ニ於テハ其ノ後裔ナラント推測シ、次ニ支那土其其斯但ノ有史以前ノ遺物ヲ論シテハ其ノ石鏡ト皮刺トカ打製ナルト石刺ヲ玉質ナルトニ於テ蒙古ノモノト類似スルモノヲ指稱シユ、ニセイ河流域ノ遺物ヲ類テハ其ノ石鏡ト打製ナルモノノ石斧ノ土斧ノ式ヲモ、ハ東蒙古ノモノト形式ヲ同シスルモノト依リテ此ノ二域ノ間ニ關係ノ存セラ想像シ

第五橋縣結論ニ於テハ以上諸論ニテ論證セシモノヲ統合シ一括ス更ニ清滿洲ト東蒙古トト中心トセル二種ノ民族カ四方ニ發達セル境界ヲ推定シ而シテ之等ノ民族カ南方ニ於テ黃河ノ流域西方ニ於テ土其其斯但及ニセイ河流域ニ據レル民族ト連絡關係ヲ有セシハ決シテ偶然ニアラザラ論證セリ

以上本論文ノ概要ヲ發達シタル所ニ依リテ已ニ著者カ學界ニ奇典シタル功績ノ大ナルヲ認め(シト雖今其ノ顯著ナルモノトシテ社ニ三書ヲ特書スルヲ得ヘシ與榮榮ノ東ニシテスル滿鮮系ノ地ハ古來重要ノ區域ヲ形成シタルニモ抑ラス久シク學者ノ注意ヲ惹カサリ、近年ニ至リ二三ノ學科ハ漸ク本邦ノ手ニ移リ、此ノ方面ニ開拓セラレ、其ノ成績ノ頗ル觀ルヘキモノハ大ニ悦ブヘシト雖有史以前ノ事項ニ關シテハ余カ荒蕪ノ狀態ニアラト謂ハサルヲ得サリシナラニ著者カ多年此ノ地方ヲ踏査探索シテ莫クタル考古學上ノ材料ハ其ノ種類ノ多様ナルト發見スルニ於テ確ニ學界ノ實證ヲ博スルニ足リ滿鮮ノ先史學古史學ニ結ニ始メテ基礎ヲ固メテ研究ヘシ足レ其ノ功績ノ一ナリ往昔滿鮮ノ地ニ清漢族ヲ稱スル民族ノ住居セシトハ漢土ノ史籍ノ傳ハル所ナレトモ著者ハ何レモ燕人カ清滿洲ヲ經略シテ此處ニ遼東郡ヲ置キ燕齊等ヲ支那人カ朝鮮半島ニ移住シテ此處ニ朝鮮國ヲ建タル後ニ歸還セラルモノノナリ故ニ之等ノ記錄ニ依リテハ周來漢初ニ清漢族ヲ遼東郡及古朝鮮國ノ東ニ割據セシトハ宛七傳(シト雖漢人カ始メテ東方ニ是キ或ハ朝鮮

ヲ設置シ土人ハ開闢ヲ建設シタル當時及其ノ以前ニ遷リ其ノ地ニ居住セシ者カ南滿洲ト朝鮮ノ西北部トニ現在スル遼東郡ヲ謂テ遼東郡トシテ其ノ原住民カ共ニ今日ノワンダース種トシテ歴史時代ニ活躍セル獵頭遊獵女農ヲ同類ナルヲ證明シ得タルハ海二前人未發ノ新發見ニシテ此ノ方面ノ史上ニ光明ヲ放タルモノナリ是レ其ノ功績ノ一ナリ遼河ノ上流西爾木倫ノ流域ノ中心トスル東蒙古ハ滿鮮ニ民族ノ接觸部ニ位スルカ故ニ古來此ノ地域ニ據レル民族ノ種類ノ判定スルハ常ニ學者ノ難事トセシ所ナリ故ニ東西ノ東洋學者カ此ノ地ニ住セル東胡民族ヲワンダース種ト見テ之ヲ統ハケルニ對シ本邦ノ學者カ其ノ言語ノ研究ニ依リテ其ノ蒙古種ナルヲ主張シ以テ西人ノ意見ヲ破ラント努ムコトモ未タ定説トスルニ至ラス此ノ時ニ於テ著者カ考古學上ヨリ其ノ原住民ノ蒙古種ナルヲ證明ナルハ一方ニ於テ先史時代ニ新領土ヲ開拓シ他方ニ於テ東胡ヲ蒙古種トナシ有史時代ニ關スル新説ニ環固ナル證據ヲ與フルモノナリ是レ其ノ功績ノ三ナリ

以上ノ理由ニ依リ本論文ノ著者ハ支那博士ノ學位ヲ受クヘキ資格ヲ有スル者ト認ム

學位記

香川縣平氏 正七位 中村 弘

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ京都帝國大學醫學部教授會ニ於テ其ノ大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリ認メテ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査要旨

主論文ノ一 脾臟ノ白血球破壞機能並ニ新生作用特ニパンチー氏病及遊走菌ニ就テ

日新醫學第六年第八九號(大正八年四月五號發行)

著者ハパンチー氏病ハ一種獨立ノ疾患ニシテ原因不明ノ脾臟肥大カ原質セルモノト爲シ其ノ絕對減少ニ在リト爲シ其ノ末梢唯血色含有量及白血球數ノ絶對的減少ニ在リト爲シ、其ノ末梢血液ニ於ケル白血球減少ハ脾臟ニ於ケル白血球破壞乃至停滯ノ結果ニ非スシテ空ロパンチー氏病ニ獨特ナル脾臟萎縮ノ爲ニ造ル器管ノ有スル白血球凝集作用制止セラルモノナルヘシト爲セリ

參考論文

遊走菌ニ就テ

日新醫學第六年第六號(大正七年二月發行)

小頭症ニ對スル顯微鏡切除術ノ價值ニ就テ

臨牀醫學第七年第七號(大正八年七月發行)

ヒルシユスアルン氏病ノ病理ニ就テ

同上第三年第五號(大正四年五月發行)

Über die lymphatische Leukämie mit besonderer Beachtung ihrer grosszellige Form.

Separatdruck aus der Deutschen Zeitschrift für allgemeine Pathologie und Bakteriologie, Band 139.

Über die Primärkrankung des Lymphatischen Apoptoses, insbesondere Berücksichtigung des Tympanosarkoms.

Acta Societatis Medicinalis universitatis imperialis in Kioto vol. 11, Fasc. 1.

以上論文ハ學術上有益ニシテ中村弘ハ醫學博士ノ學位ヲ授ルヘキ資格ヲ有スルモノト認定ス

學位記

大阪府士族 總方 祐將

右京都帝國大學大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査要旨

主論文ノ一 毒物門脈内侵入後ニ發スル肝臟腫ニ關スル實驗(英文)

「アルコホール」ニテハ肝小葉ノ間ニ毒物ナル剛性變化ヲ生ジ、肝管ノ新生セララル、アリテ時ニ小葉ノ中心部ニ於ケル結構ノ增加ト共ニ毒物ナル固形組織液ノ生來スルアリテ種々ナラ程度ニ於ケル肝實質ノ退行性變化ヲ見ルモノ、如キ硬變ハラネテク、肝臟長ト同一モノニ非ス、ニコチント肝臟變トノ間ニ特別ナル關係ノ存スルヲ認メ、其結核菌及其毒性産生物ニテ肝臟變ノ發生セラルコトアルカ如シ大體同及其ノ毒性産生物ニ於テモ亦然リ

主論文ノ二 「アルコホール」及「ニコチン」ノ劑量ニ及ハス影響ニ關スル實驗(英文)

「アルコホール」ニテハ卵巢ニ顯著ナル變化ヲ認メ、(ニコチン)亦然リト考フヲ得ヘシ

參考論文

腹水ニ對スル種々ナル特種療法ノ價值ニ就テ

日新醫學第六年第四號(大正五年十二月發行)

種々ナル肺癆患者ノ尿中ニ出現スル尿酸鹽ニ就テ

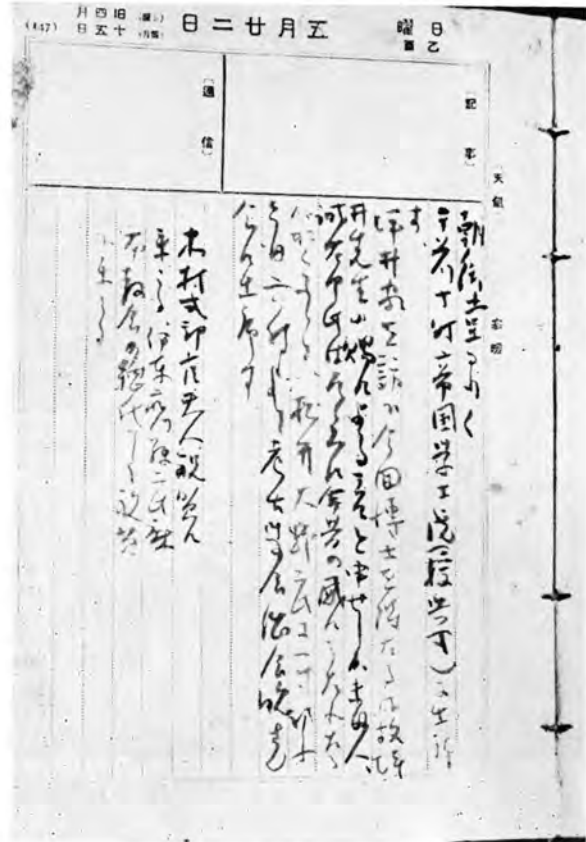
臨牀醫學第三年第十號(大正四年十一月發行)

大腸筋腹片ヲ以テ自由開及腸子括約筋ニ依リテ得タル瘻管ノ價值ニ就テ

臨牀醫學第四年第十號(大正五年十月發行)

Über Untersuchung des Darmes durch einen freien Parasitenstreifen.

Sonderdruck aus Fujinka Kiyo. Bd. x.



学位記を受けた日の日記

大正10年5月22日帝国学士院でおこなわれた学位記授与式当日、坪井先生の遺族を訪問して感謝の意を表している。

新緑の候は御健勝慶賀に存じ候陳者本會幹事長島居龍藏氏兼て論文提出中の處今般審議を了し文學博士の學位を授與され候に就ては會員有志相隣り聊か祝意を表し度候に付來る五月二十一日午後六時より日比谷公園松本樓に於て懇話會相催し候に付何卒御賛成御參會の程願上候 敬具

大正十年五月十七日

武藏野會常務幹事

向御案内願も多かるべくと存じ候(は御知友の會員へも御通知御懇話の程願上候。御參會の芳名折返し御願上候。會費金參圓は當日幹事へ御之附下され度願上候)

学位授与祝賀会の通知状

大正10年5月21日武藏野会主催の祝賀会が開催せられたときの案内状。

のふけに祝お

鳥居博士夫人の
うれしなみだ
苦學の夫を勵まして
家財まで賣り拂つた
追懐に耽りつゝ

「酒家の有史以前」と云ふ一千頁がらの大論文を提出し東大文学部教授會から新たに文学博士に推薦された鳥居龍藏氏の爲今二十一日午後六時から日比谷公園松本楼に武蔵野會主催の

◆祝賀會が催されるが鳥居氏が此栄冠を纏り得るまでの裏面にはきみ子夫人の偉大な功績があつた事を知る人は幾い夫博士が伴も挽き新刊も配り、おでん屋迄もして只苦學の道にいそしんでゐる當時参考書を買ふ爲父の遺品を賣拂ひ着物も入賞したが到底そんな生ぬるい事では夫の研究に充分に資する事が出来ないの思人も今更嬉し涙にくれてゐる

◆單身蒙古に覆り王姫の家庭教師を勤める傍王族學校に教鞭を執つた事もあつた「この日に君が思ひも籠もらん喀喇沁の夜半東風ぞそよ吹く」の一首を讀んで誰でもホロリとさせられが内助の効空しからず遂に鳥居氏は日本人類学の權威として博士に推薦され麻布霞町の邸宅は

◆喜悅の色に包まれ長男龍一(七)長女幸子(五)次男龍次郎(三)次女縁子(二)と共にきみ子夫人も今更嬉し涙にくれてゐる

報知新聞

大正 10 年 5 月 21 日 発行 の 報 知 新 聞 の 記 事

(日 報 七) 日 三 十 二 月 四 年 十 正 大 (第 一)

良人の参考書を買ふ爲
自分の着物を賣る

龍藏博士の地位を獲る
人類學者鳥居龍藏氏に
君子夫人廿年の内助



○内助の功立出度き鳥居きみ子夫人

東京を...

大論文...

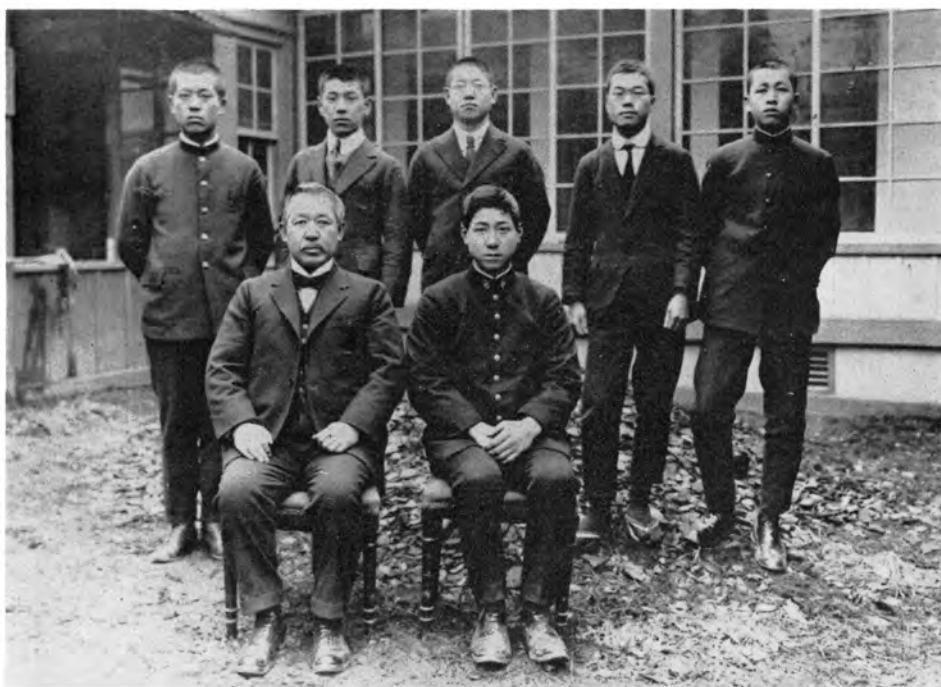
まきみ子...

大正 10 年 4 月 23 日 発行 の 読 売 新 聞 「 婦 人 欄 」 の 記 事



大正10年ごろの鳥居博士一家

左から 前列 博士、次男 龍次郎、次女 緑子、長女 幸子、
後列 夫人、長男 龍雄 の みなさん



大正12年長男龍雄氏がフランス留学直前の記念写真

左から 前列 博士、長男龍雄氏 後列 左端 榊原幸雄氏
右端 八幡一郎氏 場所は東京帝国大学人類学教室前



国学院大学（渋谷本校玄関）

八、国学院大学・上智大学在職時代

1 教 職

大正十一年（一九二二）国学院大学講師を兼任し、同十二年国学院大学教授となって人類学・考古学を講義した。昭和八年退職した。

昭和三年（一九二八）上智大学の創立に参加し、文学部長兼教授に就任した。

この間、山東省・シベリア・満州・蒙古方面にたびたび調査旅行におもむき、また、文化使節として南米各地にも出張した。



上智大学（メイン・ストリート）

謹而恩師鳥居先生膝下
 本書奉呈ス
 昨今母校騒然の時、先生卒
 然先生敬職御辭任、意
 大先學子トシテ敬スル者ノ驚愕
 悲嘆何物カ之ニ譬ハ、
 先生年來生等ニ接シ給ハル
 或ハ慈父情ヲ以テ指導シ先
 輩ノ熟ヲ以テ啓蒙セシ、ソノ言
 言可々一舉一動ハ生等ヲシテ深
 愛慕畏敬感懐興起セシメ
 不シヤトヤリキ、生等深ク之ヲ喜ビ
 廣ク之ヲ誇ル、然レニ今ヲ溘然
 トシテ先生去リ給シ、後ニ獨
 殘サレタル生等ハ暗夜燈火ヲ失
 ヒ行路指針ナキケ如ク、研究ニ
 勉學ニソノ歸趨スル所ヲ知
 ルニ至ルト明白ナリ
 先生當今御研究上御
 多忙並ニ種々原由ニヨル
 御意中謹而拜察スルニ尚
 餘アリト言フベケド、伏シテ茲ニ
 北莫ク人後ニ殘サレシ生等ノ悲
 嘆ヲ察セラレ、茲ニ板瀝スル所
 微意ヲ諒トセラシテ再ヒ思ヒテ

新ニホレ給テ温容以テ主守
 フ道可キ懇篤以テ御教示
 ヲ垂ラセ給ハシ、コトヲ切望シテ
 已マザルナリ
 生等切々タル思慕之情、堪
 エズ敢テ無辭ヲ進メテ嘆
 願、誠ヲ披瀝スルコトナリ
 昭和八年六月十四日
 國學院大學研究所學生
 右代表者 樋口清之
 同 學子部學生
 右代表者 橋爪隼太
 同 高等師範部學生
 右代表者 田久保 啓
 同 満家研究会
 右代表者 村上勝一郎
 同 上代文化研究会
 右代表者 三木 文雄
 鳥居龍藏先生

国学院大学辞職について学生から寄せられた手紙
 この手紙により師弟の情がいかにかうつくしかったかをうかがうことができる。



山東省王母山のドルメン
山東省の孝婦河畔、南定付近の丘の上にある。

2 研究業績

山東省の調査

昭和元年（一九二〇）博士夫妻は中国の山東（シャントン）省で考古学的調査をおこない、原始的ドルメンを発見した。これが中国本土における最初の発見である。



満州人住宅の鳥居形の門と木柵

吉林省琿春河上流の満州人の男女と家屋。門戸がわが国の鳥居その他に類似していることに注意を要すると鳥居博士は述べている。

満州の調査

昭和二年(一九二七)滿鉄の招請に応じて満州に行き、^{〔註1〕}金の上京跡・渤海城跡などを調査した。

昭和三年(一九二八)東部シベリア旅行を終えて満州に入り、敦化(ツンホウ) 一帯の考古学上の調査をおこない、鞍山(アンシャン) 付近において画像石遺跡を発掘した。

昭和五年(一九三〇)第三回蒙古調査旅行の前に夫人とともに開原(カイユワン)・鉄嶺(テリリン)・奉天(藩陽) ^{シエンヤン}などの遼代の埴塔その他を調査した。

昭和七年(一九三二)文部省が満州各地の教材映画撮影隊を派遣したときその指導者として渡満し、各地の古蹟を撮影するとともに、遼と高麗との関係を明らかにするため調査をおこなった。

昭和八年(一九三三)一家四人で渡満し、^{〔註2〕}医巫閭山(北鎮県) ^{付近}の遼の陵墓や、鞍山付近にある遼代の画像石墓を調査した。

同年秋、昭和十年(一九三五)蒙古調査旅行の際も一家四人で満州に入り錦州(チンチョウ)・海城(ハイチョウ)などで遼代の古塔について調べた。

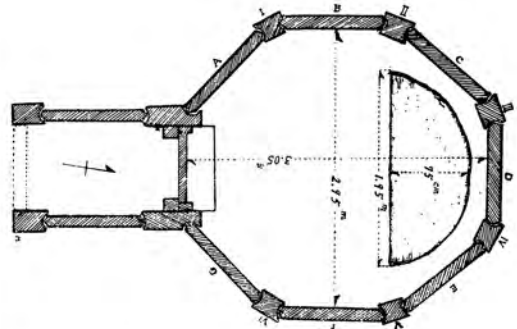
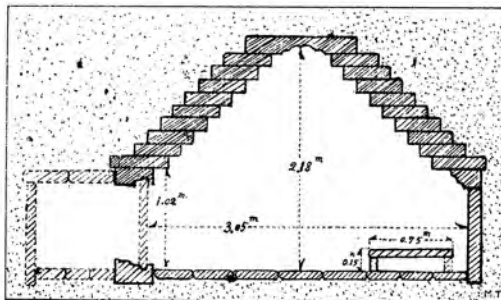
〔註1〕金 一二一―一三世紀に女真族(満州の東部に住したツングース族の一派)が建てていた中国の王朝(都は会寧)。遼を滅ぼし、南下して中国北部をも支配したが、蒙古に攻められ一〇代一二〇年で滅んだ。

〔註2〕渤海 八―一〇世紀に満州の東部から沿海州・朝鮮北部にかけて靺鞨人(ツングース系の民族)がたてていた中国の王朝。十世紀のはじめに契丹に滅ぼされた。



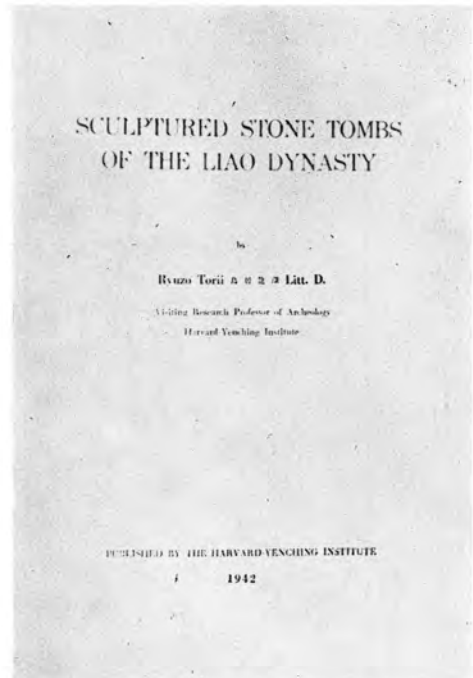
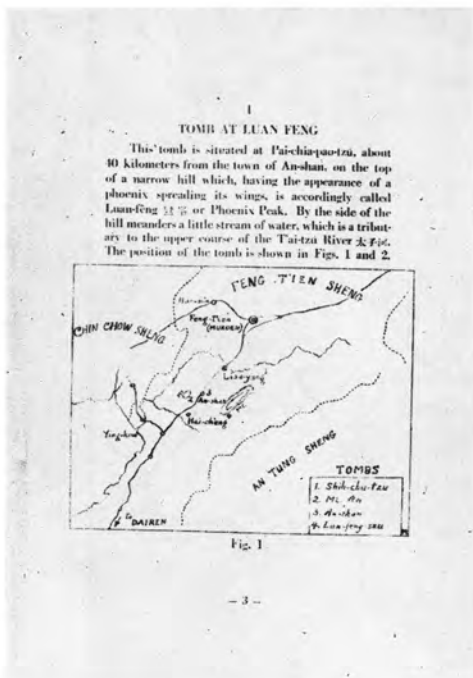
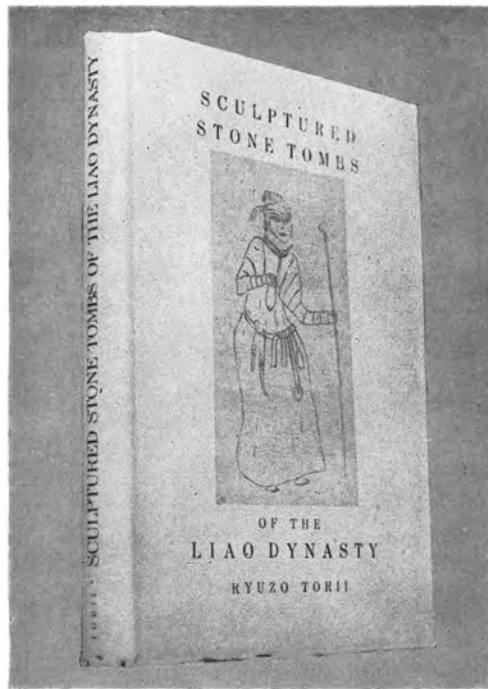
画 像 石

画像石は緑泥片岩を薄板とし人物・動物・草花などを彫って墓の周囲にならべたもので、遼代研究のたいせつな資料である。写真はその一つで、王者の酒宴の図である。図は西域の影響をうけている。鞍山付近出土。（上は写真、下は拓本）



画 像 石 の あ る 墓

昭和3年鳥居博士が鞍山付近で発掘調査した画像石墓の平面図と側面図。墓は地下にあり、中に棺が安置せられ、その周囲に画像石が八角形に並列せられている。

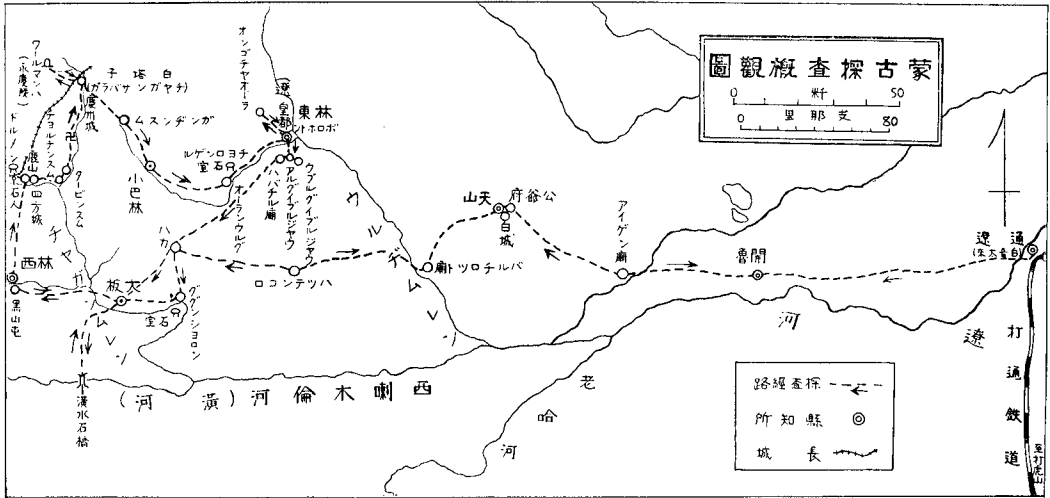


遼代画像石墓 (英文)

鳥居龍藏著、1942 (昭和17年) ハーバード燕京研究所発行。

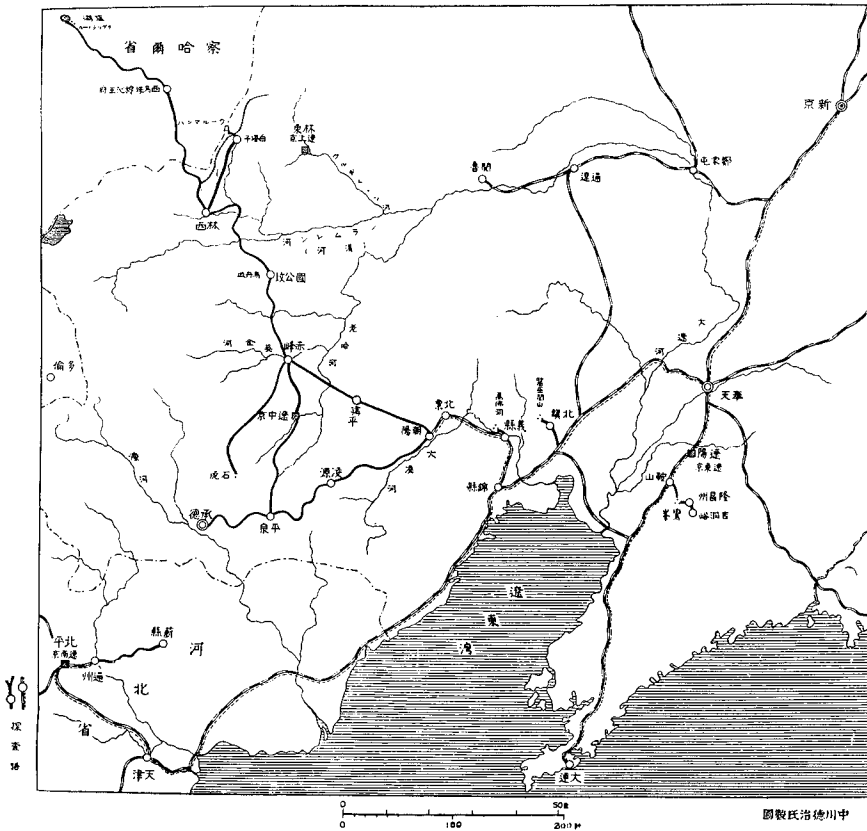
134 P 図50 26cm。

満州鞍山付近から出土した遼代の画像石について記述したもの。



蒙古探査概観図

「満蒙を再び探る」(鳥居龍蔵・鳥居きみ子著、昭和7年発行) 所載。
 点線は昭和5年鳥居博士夫妻が調査旅行をした経路。



満蒙探査概略地図

「遼の文化を探る」(鳥居龍蔵著、昭和12年発行) 所載。
 実線・点線は鳥居博士一家が昭和8年、昭和10年調査旅行をした経路。



白塔と鳥居博士夫妻

遼代の慶州城（今の白塔子）の白塔を調査のときの写真。
慶州は慶陵（遼の極盛期の聖宗・興宗・道宗の3帝の陵墓）
を守るために設置せられた州である。

蒙古の調査

昭和三年（一九二八）東部シベリアと満州の調査旅行に引き
続いて博士夫妻と長女幸子さんは蒙古に入り、遼時代の
古都の行宮について調査研究をおこなった。

昭和五年（一九三〇）博士夫妻は第三回目の蒙古調査旅行を
おこなって蒙古における遼代の遺跡を調べた。ワールマ
ンハにある遼の帝陵の壁画をはじめその時代の多くの遺
跡遺物を撮影して帰国した。これから遼代文化の重要性
が世に知られるようになった。

昭和八年（一九三三）第四回、昭和十年（一九三五）第五回、いず
れも一家四人で蒙古調査旅行をおこなって蒙古を中心と
する遼代文化の解明に努めた。

昭和十一年（一九三六）には長年の研究成果である「考古学
見た遼之文化図譜」（全六冊のうち四冊）を公刊した。



西方から見た白塔

遼代にいかにも仏教がさかんであったかは、その遺跡の多いことによってもうかがえるが、慶州城（今の白塔子）にあるこの仏塔は、その代表的なものである。高さ65メートル八角七層純白の磚塔で遼代建築彫刻の粋をあつめている。



白塔東面 仏の守護神



蒙古旅行から帰った当時の写真

昭和5年の蒙古旅行（遼皇帝陵の第1回調査）から帰った当時の写真。昭和6年撮影。

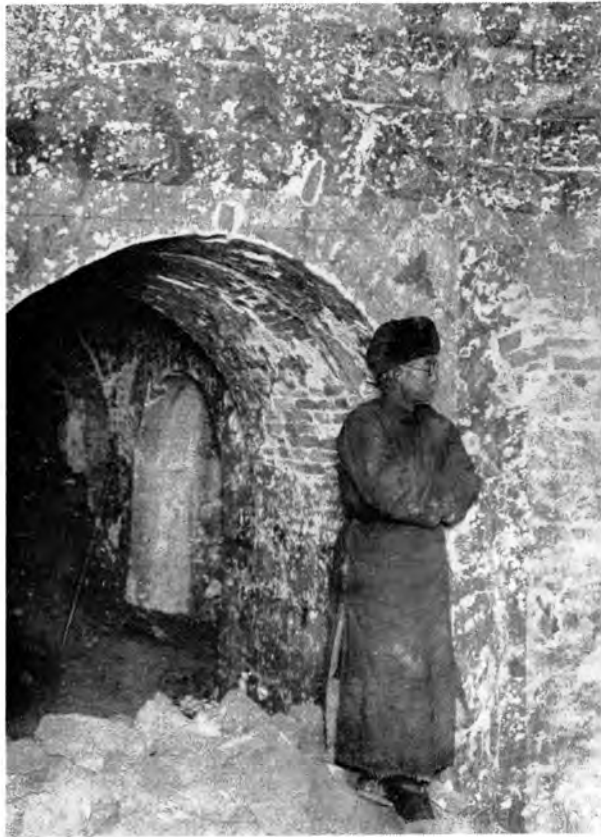


遼の中京大塔下の鳥居博士一行

遼の中京城は内蒙古白塔子の老哈河（ラオハムレン）畔にあり、大塔は八角十三重
磚塔である。塔下の蒙古乗馬隊が鳥居博士一行である。



興安嶺山中ワールマンハにおける鳥居博士一行の露营地



ワールマンハ東陵内の鳥居博士

ワールマンハは白塔子の北にあり、ここには遼の皇帝陵（三陵）がある。



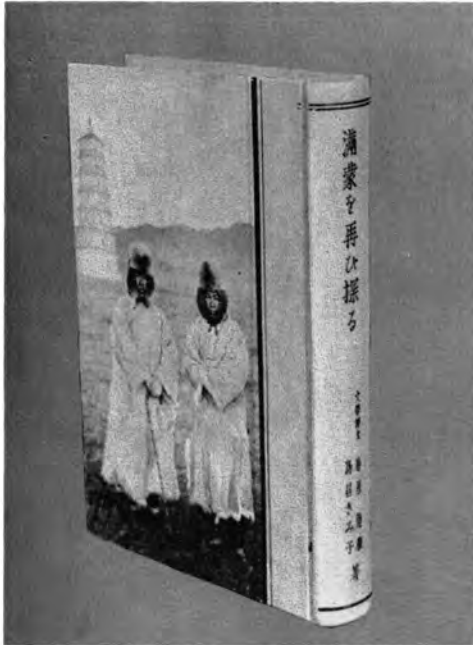
ワールマンハ東陵内の壁画を模写する鳥居緑子さん。

東陵（おそらく聖宗陵）の墓室に壁画（彩色）がある。これは四季の山水画のうちの秋景を次女緑子さんが模写するところ。



ワールマンハで採集した緑色瓦

右は鬼面、左は獅子面と思われるもので、西域・ペルシアなどの影響が強いものと考えられている。



満蒙を再び探る
鳥居龍蔵・鳥居きみ子著、昭和7年 六文館発行。397p 19cm。昭和5年遼代の文化研究のため満蒙を探查した旅行日誌。



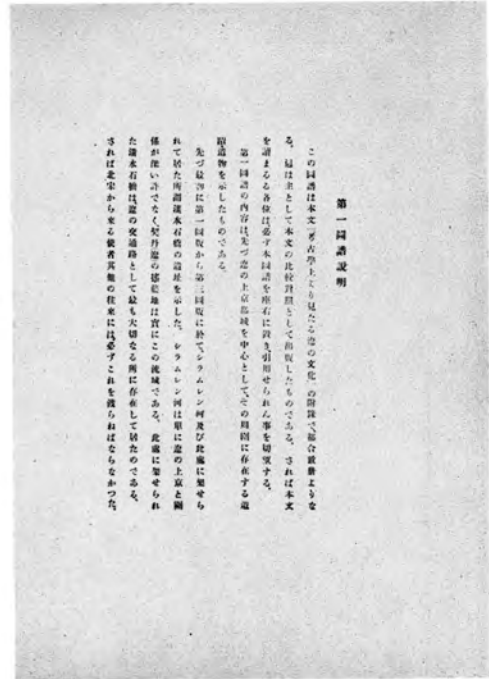
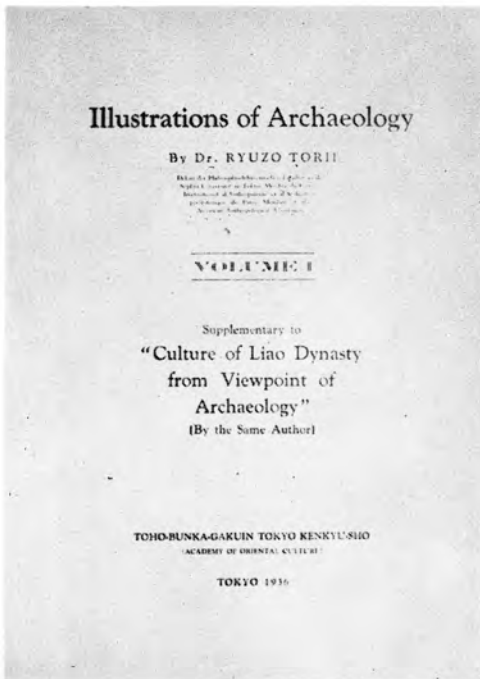
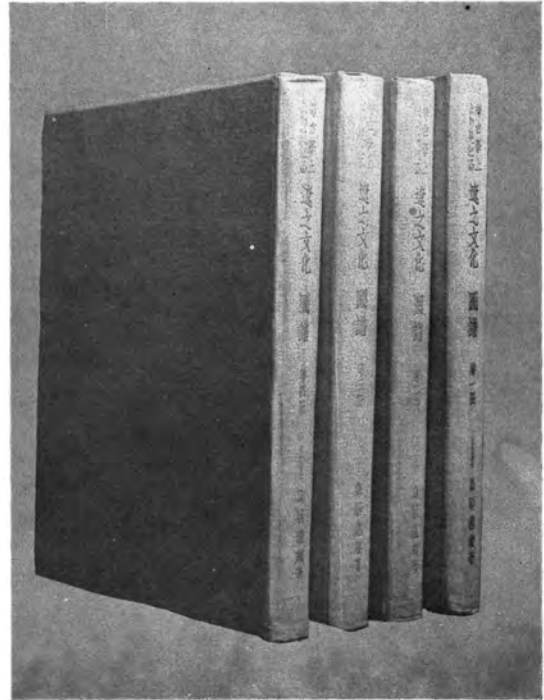
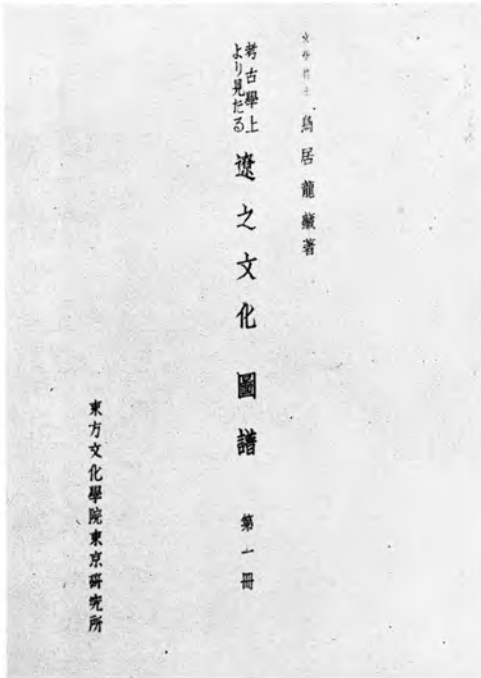
満蒙の探查
鳥居龍蔵著、昭和3年 萬里閣書房発行。545p 19cm。昭和2年秋の満蒙の探查概要で、渤海・遼・金などの歴史考古学に重点をおいて記載してある。



遼の文化を探る
鳥居龍蔵著、昭和12年 章華社発行。447p 19cm。昭和8年・10年に「考古学上より見たる遼の文化」の資料蒐集のため満蒙を探查した日記。



満蒙其他の思ひ出
鳥居龍蔵著、昭和11年 岡倉書房発行。327p 19cm。満蒙の探查や幼年時代の思い出などの随筆を集録したもの。

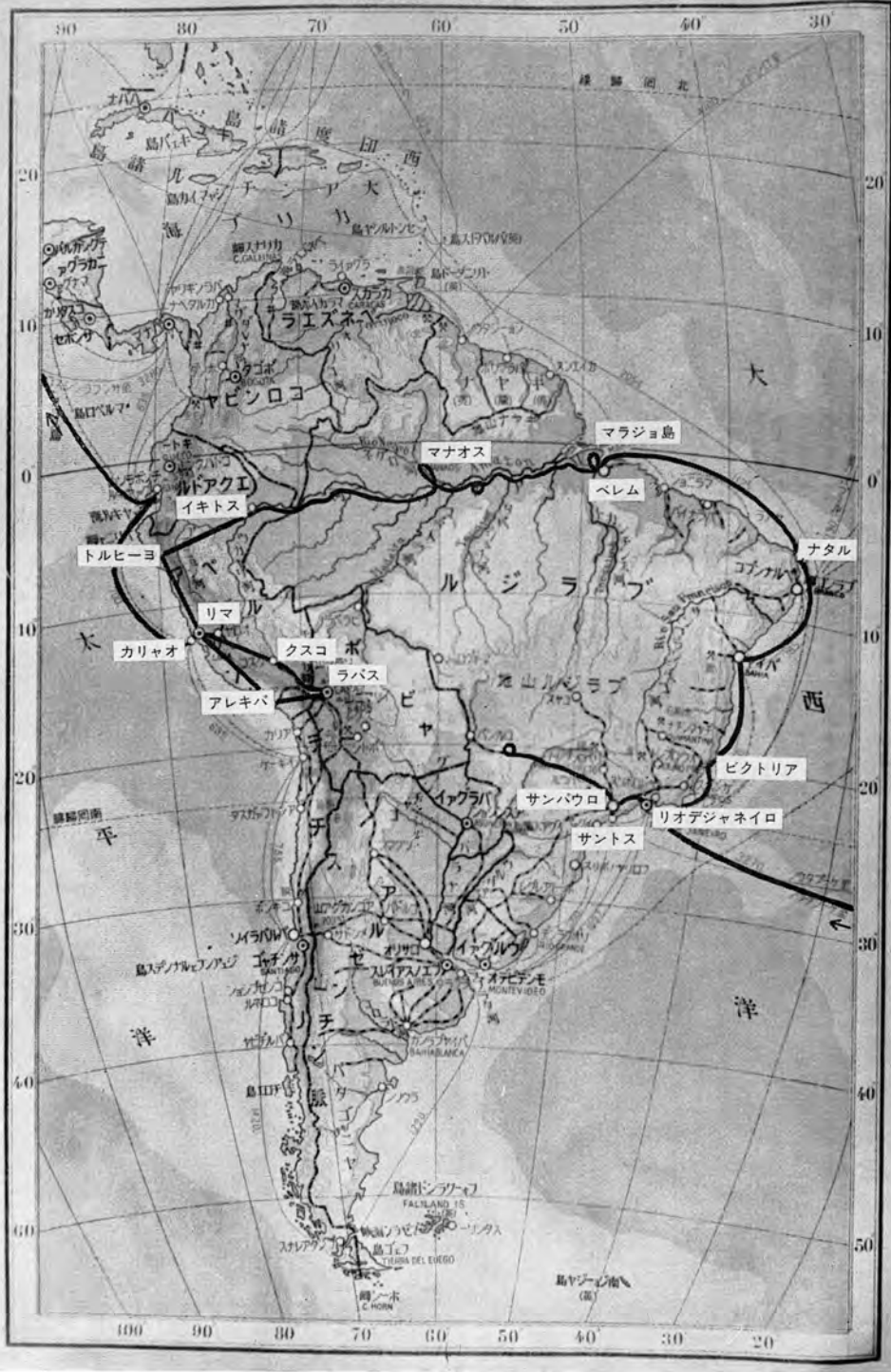


考古学上より見たる遼之文化図譜

鳥居龍藏著、昭和11年 東方文化学院東京研究所発行。4冊 図883 38cm。
「考古学上より見たる遼の文化」の付録として本文と比較対照するため出版したものである。(本文は未完)

南アメリカ洲

SOUTH AMERICA



南アメリカ州地図

昭和12年発行。黒の実線は鳥居博士が調査旅行をした経路。白地内の地名はそのとき行った所。



ブラジルの洞窟古代人類遺跡を調査する鳥居博士

南アメリカの調査

昭和十二年(一九三七)から翌十三年にかけて外務省から文化使節としてブラジルに派遣せられ、ペルー・ポリビアにいたってアンデス山中のインカ帝国の遺跡を調査した。

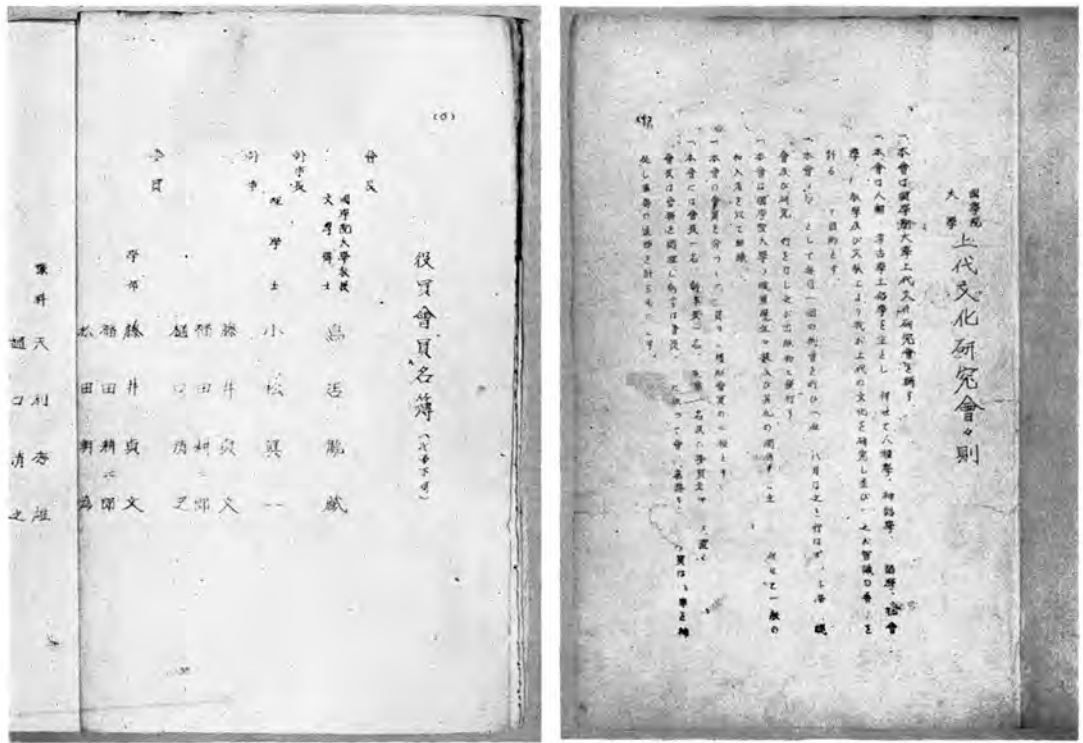
(註1)ペルー中央山地のクスコ付近に居住していたインカ族は一五世紀なごころ大帝国を建設した。ヨーロッパ人の渡米以前にここに栄えた文明をインカ文明という。



ペルーのインカ遺跡を調査する鳥居博士



インカ遺跡を発掘中のテイヨ博士を現地にたずねて見学する鳥居博士



国学院大学上代文化研究会の役員會員名簿と会則

3 学 会

鳥居人類学研究所

大正十三年(一九二四)東京帝国大学を辞職すると、町の学者として自ら研究することになり、鳥居人類学研究所を設けた。家族全部が研究員で経費は自費であった。子女が成長するといずれも博士の助手として夫人とともにその研究を助け学者一家となった。

〔註1〕その後の数々の貴重な研究は学者一家挙げての成果であった。

国学院大学上代文化研究会

大正十三年国学院大学教授として講義のかたわら同校内に上代文化研究会を設けた。

東方文化学院東京研究所

昭和三年(一九二八)東方文化学院東京研究所が創立せられると評議員・研究員となった。

上智大学鳥居人類考古学会

昭和十一年(一九三六)上智大学鳥居人類考古学会が組織せられてその会長となり東京付近の遺跡をたずねて指導した。

〔註1〕このころ上智大学自動車部ができて博士は顧問となり、学生が同部所有の自動車を運転して見学に行った。

趣 意 書

本會は上智大學に於て、同文學部長鳥居龍藏博士を會長に置き、且つ諸教授の絶大な支援のもとに、その誕生を見たのであります。

本會のめざす所は、會長を中心とする鋭きまなりのもとに人類考古學を、その補助學と有機的關係に於て實地理論の兩方面より研究して、斷學の發展に資し、且つ斷學より見たる我が日本文化を廣く海外に開明せんとするにありませう。これがため、本會は臨時講演會を開き、研究發表をなすとともに、邦語を始め英語佛語を以て報告書を刊行せんとするのであります。幸にもこれに對し、上智大學諸教授の援助をうくる便宜を有するは、本會のひそかに誇りと致す所であります。加之、本會が名稱に會長鳥居博士の名前を冠せるは、實に同博士が責任ある主體として本會の統帥を司りつゝ、本會を直接指導する、證左であり、且つ本會が之によつて常に眞摯なる研究と良心的なる仕事をなし得べき所以のものであります。

常くは、本會の存する所を諒とせられ、御後援と御禮誼とを賜らむ事を、
白本は四月二十二日日本の發賣を定め、同日星野君が本會發行所に行き、本會の組織等は本會
 役員表にのべて置きました。

上智大學鳥居人類考古學會

昭和十一年六月

Das Anthropologische Institut Torii an der Jochi Universität, Tokyo.

Der bekannte Anthropologe Ryuzo Torii hat am 26. April 1936 unter den Studenten der Jochi Universität ein Seminar zur weiteren Erforschung der Vorgeschichte und Urkultur Japans eröffnet. Im Zusammenhang damit ist auch geplant, unter Beihilfe ausländischer Professoren der Universität die Forschungen Torii's in noch größerem Umfange als bisher dem Ausland zugänglich zu machen.

Anthropological Institute Torii, Jochi University, Tokyo.

On April 26th 1936 the well-known anthropologist Ryuzo Torii opened a special course among the Jochi university students for the further investigation of Japan's prehistory and primitive culture. In connection with this a plan has been set on foot to make known abroad Prof. Torii's research work on a greater scale than heretofore and with the collaboration of the foreign members of the Jochi University Faculty.

Institut Anthropologique Torii, Université Jochi, Tokyo.

Le 26 avril 1936 le fameux anthropologue Ryuzo Torii a ouvert parmi les étudiants de l'Université Jochi un séminaire pour recherches ultérieures dans la préhistoire et la civilisation primitive du Japon. Simultanément on a formé le projet de faire connaître à l'étranger les recherches du Prof. Torii dans une sphère plus étendue que jusqu'à présent. Ce projet peut se réaliser grâce à la coopération des étrangers parmi le personnel enseignant de l'Université.

上智大學鳥居人類考古學會規約要略

- 第一條 本會ハ上智大學鳥居人類考古學會ト稱ス
- 第二條 本會ノ研究室ハ之ヲ麹町區紀尾井町上智大學内ニ置ク
- 第三條 本會ハ會長直接指導ノモトニ人類學、考古學ノ研究ヲ行ヒ斷學ノ發展ニ資スルトトモニ之ガ成果ヲ廣ク海外ニ發表シ併セテ會員相互ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ前條目的達成ノタメ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 見學旅行、講演會、研究會、座談會
 - 一文獻及ビ出土品ノ保存
 - 一 複製及ビ寫眞記録ノ作製
 - 一 報告書(圖英佛文)ノ刊行 其他
- 第五條 省略
- 第六條 本會ハ上智大學關係者、學生、生徒、同輩學生ヲ以テ組織シ會員ヲ分ツテ左ノ三種トス
 - 一 正會員
 - 一 特別會員
 - 一 名譽會員
- 第七條 以下第十六條及ビ附則省略

役 員

| 名譽顧問 | 會長 | 評議員 | 幹事 | 幹事代表 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 | 同 事 |
|------|------|--|--|----------------------|---------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | 鳥居龍藏 | ヘルマン・ホフマン ブルノール・ビツテ ヘルマン・ホイヴェルス ヨハン・ネスマウス ヨハン・ネスマウス ヨゼフ・エイレノボス マツクス・フォン・ケルンブルク | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 石井 信 木内 保 岡野 夫 | 岸 安 萩原 宅 岡 月 岡 野 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 | 伊藤 多 宇野 正 土橋 八 榮田 猛 齋藤 濟 中村 進 |



本山彦一氏

1853—1932 明治・大正・昭和の新聞業者。
明治21年「大阪毎日新聞」相談役となり同
社の経営を担当、同36年社長に就任。
鳥居博士と親交があり、鉄筋コンクリート
造りの書庫を寄贈した。



服部宇之吉氏

1867—1939 明治・大正・昭和の漢学者。
中国哲学者。文学博士。日本漢学界の権威
で、東京帝国大学教授 同文学部長・京城
大学総長・国学院大学長・東方文化学院長
などに歴任。鳥居博士と深交があった。

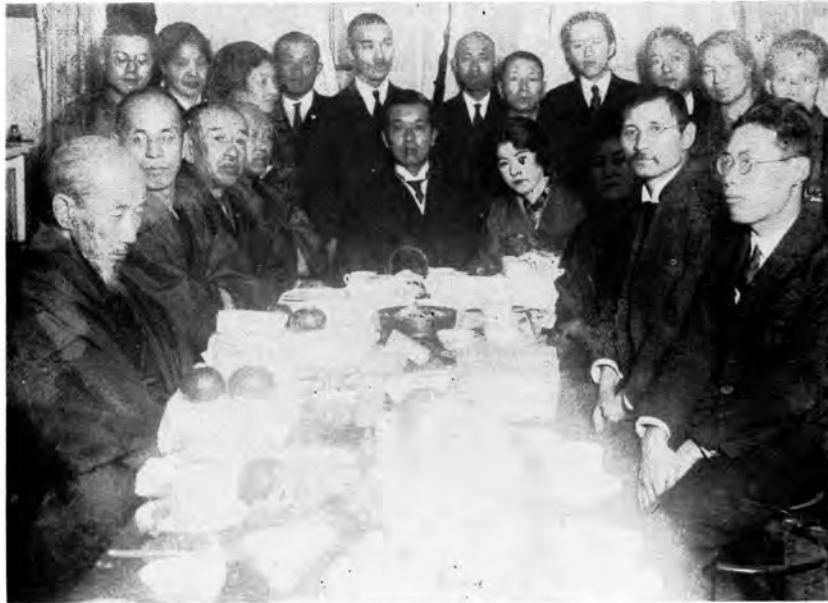


本山氏を見舞う博士

昭和7年本山彦一氏から病気との書信を受け取り、鳥居博士夫妻は急いで東京から
大阪に行って同氏を見舞った。（この後本山氏は死去した。）
左から きみ子夫人、市原弘中氏（きみ子夫人の実弟）、鳥居博士、本山彦一氏、本山氏夫人。



昭和2年ごろの鳥居博士と家族
左から 二男 龍次郎さん、博士、夫人、二女 緑子さん



研究仲間の集会 (昭和初年)





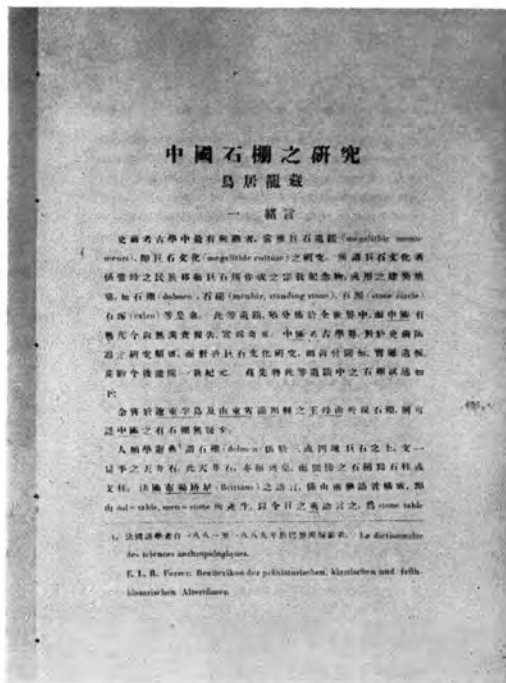
燕京大学に赴任直前

昭和14年北京燕京大学に赴任直前、東京都港区麻布霞町の自宅、書庫内において。
 近くから 二女緑子さん、きみ子夫人、鳥居博士。

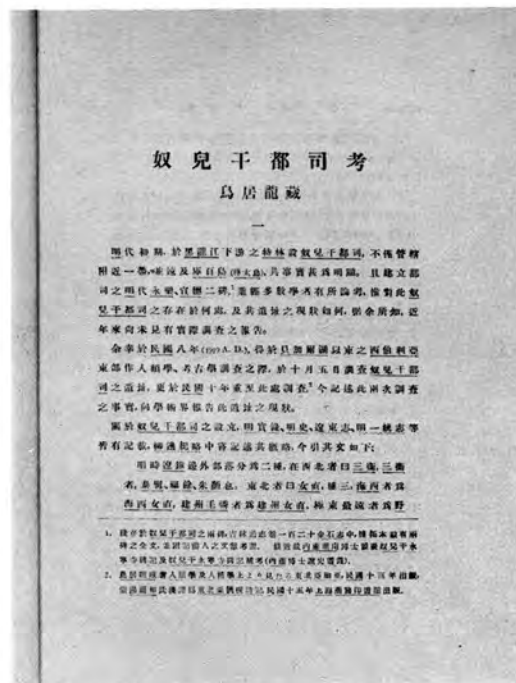
九、燕京大学 在職時代

昭和十四年(一九三九)中華
 民国北京の燕京大学から
 招聘せられて同大学客座
 研究教授となり、一家を
 あげて北京に移住し、同
 地において研究をおこな
 った。

昭和二十六年(一九五〇)十
 二月帰国し、その後も引
 き続いて「考古学上より
 見たる遠の文化」の大成
 に心血をそそいだが、未
 完のまま逝去したことは
 学界から惜しまれてい
 る。



燕京学報 第31期
 民国35年（1946年、昭和21年にあたる）燕京大学哈仏燕京学社（哈仏はハーバードの音訳）発行。26cm。
 鳥居博士の中国ドルメンの研究を掲載してある。



燕京学報 第33期
 民国36年（1947年）燕京大学哈仏燕京学社発行。鳥居博士の
 奴兒干都司(明の黒龍江方面経営の役所)の研究を掲載してある。



中国から帰国した鳥居一家 読売新聞社提供
昭和26年12月7日横浜港に到着したところ。



同上 鳥居博士夫妻 読売新聞社提供



帰国後書庫を開けた鳥居博士と家族 毎日新聞社提供

昭和26年12月中国から帰国して東京港区麻布霞町自宅の鉄筋コンクリート造りの書庫を開け、書物の無事を喜んでいるところ。
左から 孫 玲子、博士、長女 幸子（しゃがんでいる）、二男 龍次郎、夫人 の みなさん



帰国歓迎会であいさつする鳥居博士 朝日新聞社提供

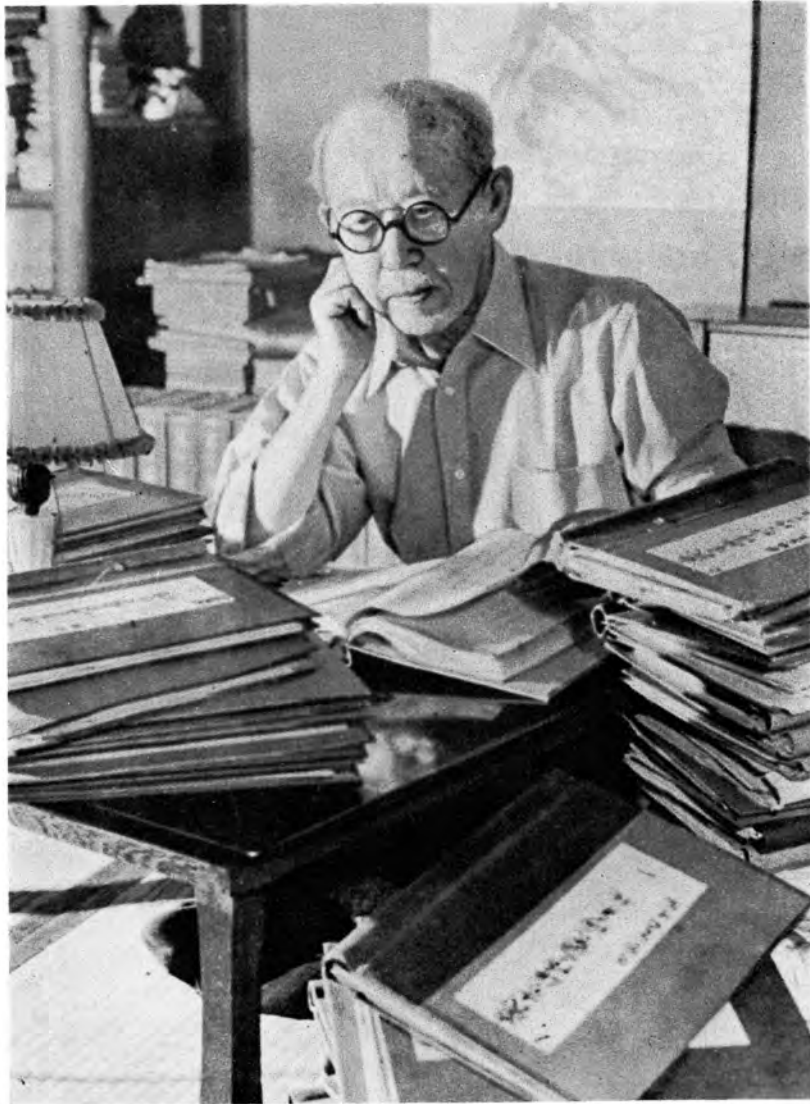
左から 長谷部言人博士、鳥居博士、原田淑人博士、（1人おいて）、藤田亮策氏



昭和27年NHKから放送 NHK提供



帰国後建設大臣公舎内における博士夫妻 NHK提供



著述に専念する鳥居博士 毎日新聞社提供

「考古学上より見たる遼の文化」を執筆しているところ。
昭和29年9月 東京都港区麻布霞町の建設大臣公舎において撮影。

私は此處の古城跡は、唐代の慶州である
 と考證したい。その理由は、理山山王廟の
 之れから、その事を傳統・文獻・遺蹟等（和漢
 文）に記してある。

私ハ古の古城跡を慶州であると思つたのは、
 明治四十一年四月十一日（即ち、今より定ん二十
 五年以前であつた。此處に録更来たうは彼の
 編輯家ニ遊牧紀を在內書と一六八巻の
 一、六の卷に於て、私は今昔考に因り感ずし
 て此よりである。けれども今書の記事は、他
 書から引用して簡單な文であるから、此處を
 實地探り出すに最も苦心したつたであつた。
 固より當時の遊一帯には支那人の居住者も
 おく、いづれも昔水人の居た、これを今昔考
 に一大不便であつたが、是を前に此處は昔に
 是考考て、調査を試みたのであつた。

明治四十一年の當時、私の正跡内には、白
 塔の下に喇嘛廟と彼等の住居が散軒あつたの
 外で、他に何人も住まらなかつた。

この古城跡を
 城 (Oka-Han-Cheng) と稱すことあり、
 Da-Han-Cheng とも稱すことあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、

城 (Oka-Han-Cheng) と稱すことあり、
 Da-Han-Cheng とも稱すことあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、

城 (Oka-Han-Cheng) と稱すことあり、
 Da-Han-Cheng とも稱すことあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、

城 (Oka-Han-Cheng) と稱すことあり、
 Da-Han-Cheng とも稱すことあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、
 漢字は白塔の古城 (Oka-Han-Cheng) とあり、

鳥居博士の原稿

原稿は慶州に関するもの。(慶州については本書97・98ページ参照のこと)



私の幼少時代と阿波の徳島

私は明治三年四月四日、阿波の徳島市時町に生れた。私の家は町人、五人組の一人で市街で「彫業」と呼ばれたものであった。住居は徳島の中心地、新町に接した新町川の沿岸にあって、明和・安永以来此處に住まい、世々阿波藩の御家司として且つ徳島の大名邸であつた。屋敷は御殿と稱し、その邸は書を蓄けた。吉川天朝の筆蹟あり、祖先以来の書の上に智徳原大日如来の石像を置いたものがある。我が家は徳島市の時町に移つて来な以前は、備前鞆郡にある徳島に住んでゐたが、その以前は阿波と一衣帯水の徳島町の御所（其は御所）で、一小城主であつた。藩政衰へ、武士がいやになり、町人となつて、阿波藩を流りこの阿波の徳島に移つて来たのである。父はよく徳島から時町に行つて祖先の跡を継ぎたいといつて来られたが、その儘になつてしまつた。

私の母の名はとくといひ、この家附の一人姫であつた。この母の幼少時代は我が家の全盛時代で、今日大徳島（波は瀬の山、昔は「龍巻」にある阿波の「徳島」）御家司の石段の欄干の柱石にその名を刻されてゐる。阿波藩時代には浄と徳島の三人であつて、弟の御八郎には明治に遊学せしめて東京府を問かせ、姉、今は徳島町の造酒家に嫁し、妹は徳島から五里ばかり離れた阿波の地方、那賀郡の赤川河原の中島浦の御家司に嫁した。私は祖父の死に接したので祖父の顔は知らないが、その弟の御八郎は知つていてよく往來した。この人は徳島から一歩を戻つたが、その妻は早く亡くなつてしまつた。娘が一人あつたので、これに徳島から嫁り来た娘と、所から養子を迎へた。私は御八郎を祖父と呼んでゐたが、この大娘又は一國の小舟を求め、「三又」といふ徳島の老人に舟をおさせて毎日新町の川舟泊の所にも寄つて、洗髪などをするのを望しむとし、極めて無頼漢で男で、洗髪などをする

はしがき

本書は私の自叙傳であつて、先ず私の生れた明治三年（1870）から昭和十二年（1937）までのそれを記したものである。昭和十二年以後今日にいたるまでの事は、次篇において發表する考へである。

自叙傳は人間として、寧ろ幼年から青年にいたる時期に興味あるもので、例へば、比較が甚だ大き過ぎるが、かの『太陽記』の如き、秀吉が天下を取つた名前の、信長の草履取の當時が極めて面白く、彼が太陽となつた時代は却つて興味が薄い。私のこの自叙傳は因より何等の價値のないものであるけれども、人間の個人史としては、また実蹟點があらう。

私は徳島徳島にあつた時は、尋常小學校を中途で退學し、その後専ら獨學で自修して来た。その後明治二十三年東郷に懇し、初めて東京帝國大學西科大學人類學教授岡本整理博士となり、それよりまた引き續き熱心に自修するとともに、同大學内の理、醫、文、各學部に、坪井先生及び學部長の許可を得、長い期間の基礎學として、これ等各教授等各位からその學科の講義を自由にせしめられたのは、私の一生の學歴史上最も有益であつた。これは今日において當時を追想し、以上の各先生に對し、その厚意を忘れ得ず、感謝に堪へざるところである。

ある老学徒の手記

鳥居龍藏著、昭和28年 朝日新聞社発行。 261P 19cm。
鳥居博士が生まれた明治3年（1870）から昭和12年（1937）までの自叙傳。



学 会 合 同 葬 朝日新聞社提供

昭和28年1月17日東京都港区麻布霞町のイエズス聖心カトリック教会においてルカス・ベルトラム神父司式のもと挙行せられた。写真の立って弔辞を述べているのは葬儀委員長長谷部言人博士。



同 上 遺 族 朝日新聞社提供
左から 玲子、幸子、夫人、龍次郎 の みなさん。

一〇、死 去

昭和二十八年(一九五三)一月十四日東京都新宿区下落合の聖母病院でなくなられた。年齢は八十二歳。

一月十七日博士の葬儀は日本人類学会・日本民族学協会・日本考古学会・日本考古学協会・国学院大学考古学会・武蔵野文化協会の各学会合同でおこなわれた。学者として空前の合同葬であった。郷里の徳島市議会からは名誉市民の称号を贈られた。

昭和四十年(一九六五)鳴門市からも名誉市民の称号を贈られた。



徳島市名誉市民追贈電報



葬儀当日の夫人 徳島新聞社提供

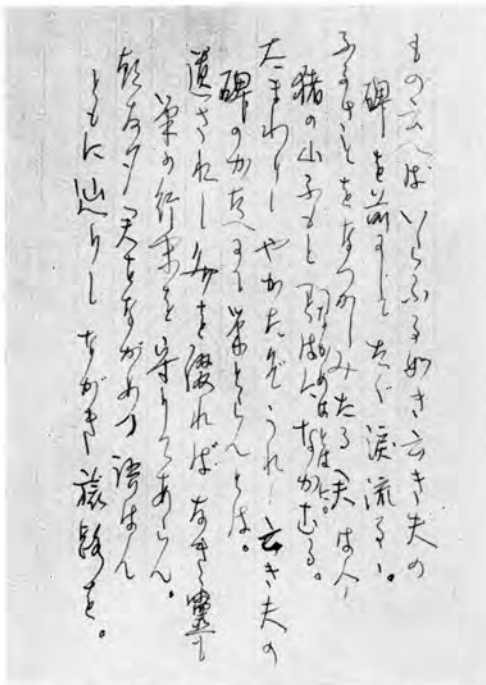
学問の開拓者

鳥居博士は生涯を学問の研究にささげたかたである。研究調査の足跡は、日本国内はもちろん博士が好んで用いられた「極東」の各地に及んでいるが、いずれもが先人未調査の研究で、その苦勞はひととおりでなかった。何回となく危険にさらされながらおこなわれた。そのたび新しい貴重な研究を学界に発表して、人類学・考古学界的開拓者としての使命を果たした。

そうして博士の名は世界的に有名になったが、それは学歴や肩書の力でなく、少年時代にいだいた初一念を貫き通すべくたゆまず続けた努力のたまものであった。



徳島市徳島公園の鳥居博士記念碑
 浮き彫りの胸像は樽谷清太郎氏の作。



徳島公園の鳥居博士記念碑をよんだ
 きみ子夫人の歌（草稿）

文學博士鳥居龍藏先生記念碑

鳥居先生は明治三年市内東船場町の畑間屋に生れ小學課程を終へずして獨學自立を志し同二十三年東京帝國大學人類學教室に勤め坪井正五郎博士の許に普學勉勵し助手講師助教と進み此間臺灣滿洲亞比利亞内外蒙古中國朝鮮南北樺子島列島の人種學考古學民族學的調査研究に先鞭をつく之著論文は大學紀要に總て佛文にて發表し佛國學士院よりパルムアカデミー章を贈らる日本の有史以前及上代文化の研究に於いて大に後進に道を開く明治二十七年喀喇沁蒙古王の招聘を受け夫人と共に八東瑛引續き嬰兒を抱きて三年間内外蒙古を標査し東胡民族研究の論文を東京帝國大學に提出し大正十年文學博士の學位記を授けらる坪井博士の歿後ハ人類學教室主任となり講座を擔當す同十二年帝國大學を辭し鳥居人類學研究所を設け市井の學者として一家を擧げて研究に専念し僑同志武藏野會を創め龍藏武藏野を主宰すまた東京東方文化學院の創立とともにその研究員となり再三滿蒙を跋涉標査して考古學上より見たる遠の文化圖譜四冊を上梓す大正の末上智大學文學部長國學院大學教授に迎へられ昭和十一年には外務省文化使節として南米諸國の學界を歴訪しインカの調査を試む同十四年北京燕京大學ハルビン下關研究所客座研究教授に招聘され専ら研究に没頭し旅京學報に無算論文を發表す同二十六年十二月在留十二年にして中國より歸朝後安任の家無き生活に窮り全國の同情激刺を集む同二十七年六月吉田總理大臣の配慮にて建設大臣官邸に寄寓半歲にして病を得同二十八年一月十四日八十三歳にて不遇の内に遊く内外譽げて博士の永眠を哀惜す先達は克く其獨博露中蒙語に通じて其著書百餘冊發表論文は數に達めらず實に偉大な功績を學界に残され稀に見る世界的學者といふべし政府は數三等に叙し當市は市會の決議を以て名誉市民を追贈したり茲に郷土榮譽の傳典を讀み後世に傳ふ

昭和二十八年十一月三日

徳島市 市長 長尾新九郎 謹識

徳島公園の鳥居博士記念碑の拓本



東京都多磨霊園に建立せられた鳥居博士記念碑

読売新聞社提供

鳥居博士記念碑

文學博士鳥居龍藏先生記念碑
 鳥居先生は明治三年徳島市東船場町の畑草問屋に生る小學課程を終へず獨學自立を志し同二十三年東京帝國大學人類學教室に勤め坪井正五郎博士の許に苦學勉勵し助教に遷る此間臺灣滿洲西北利亞内外蒙古中國朝鮮南北樺太千島列島の人類學考古學民族學的調査研究に先鞭をつくこころの論文は大學紀要に絶て併文を以て發表し佛國學士院よりパルムアカデミー章を贈らるまた日本の有史以前及上代文化の研究に於て殊途に道を開く功や大なり明治三十九年哈爾濱龍江省古史の招聘を受け夫人と共に入蒙し引續き嬰兒を抱きて三年間内外蒙古を探索し東胡民族活動の迹を究め滿蒙の有史以前及びその研究に専念し講座を擔當す同十二年帝國大學を辭し鳥居人類學研究所を設け市井の學者として一家を擧げて研究に専念し傍同志と武藏野會を創り難誌武藏野を主宰すまた東方文化學院東京研究所の創立と力にその研究員となり再三滿蒙を跋涉踏査して考古學上より見たる迹の文化關係四州を上梓す大丘の未上智大學文學部長國學院大學教授に迎へられ昭和十一年には外務省文化使節として遠く南米諸國の學界を歴訪しイペク連續の調査を試む同十四年北京燕京大學ハウアード燕京研究所客座研究教授に招聘せられ専ら研究に没頭し燕京學報に毎輪論文を發表す同二十六年十二月在留十二年にして中國より歸朝後安住の家無く生活に窮し爲に全國の同情を集め勸を蒙る同二十七年六月若田總理大臣の配慮により建禮大臣官邸に寄寓半歲にして病を得同二十八年一月十四日八十歳にて不遇の内に遂く内外譽けて之を哀悼して已まず先生は克く英獨佛露中蒙語に通じ其著書百餘冊發表論文は數に違あらず其學界に發され功績の偉大なる實に稀に見る世界的學者といふべし政府は勲三等に叙し錦里徳島市は名譽市民を道贈しなり茲にこの碩學の偉勲を後世に傳ふ

昭和三十年一月

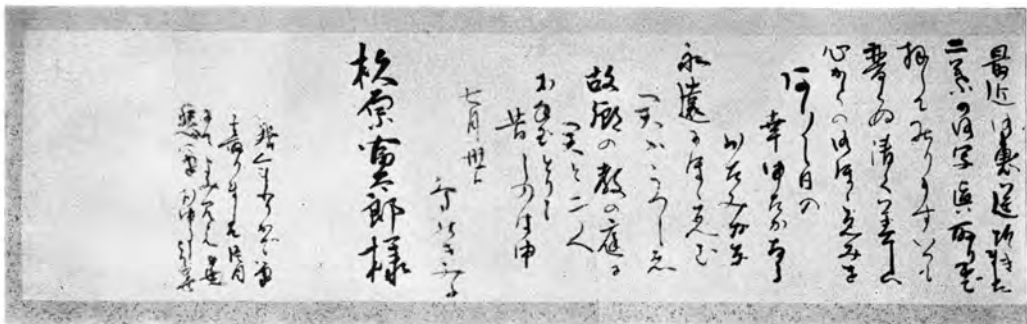
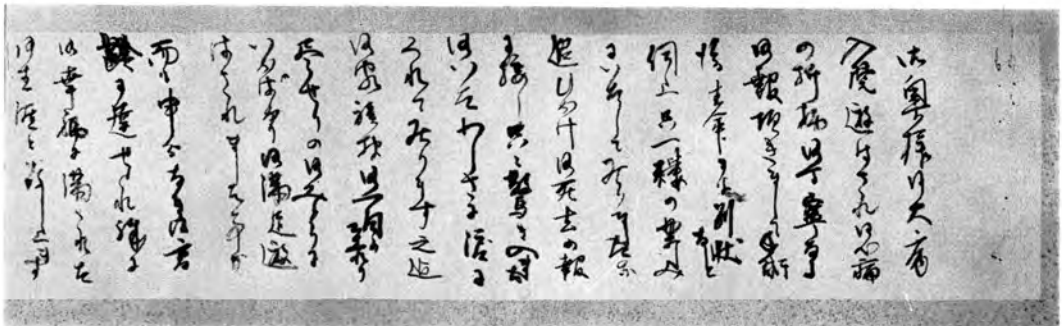
鳥居博士記念會建

多磨靈園の鳥居博士記念碑の拓本



きみ子夫人書の喜寿扇面

大浦よしの様 (師範学校同窓生) に贈ったもの。



友人の死を悼むきみ子夫人の手紙

杉原かだ子様 (師範学校同窓生) 死去のときその夫君に送ったもの。

弔意文に添へて

鳥居きみ子様 杉原かご子様 両夫人は徳島市
富田尋常小学校時代から無二の親友であられました
が此小学校卒業後私と母校徳島縣師範学校付属
小学校高等科に転校されたから私三人の親しい交友
關係が培はれました 明治三十五年四月徳島縣師範学
校卒業の際にも袖を連ねて合格全校を宿舍に入念致
し當時の嚴格な寄宿舎生活の訓育を受けました
私三人の交情は益々深くなり學友間では三幅対と
呼んで居りました 明治三十二年三月同期生二十五名が
卒業と同時に各其任地に赴任致しましたが交通機
關未だ不備な折から私の往來文信も二三年の間に殆
中絶せよと成りましたが 昭和三年一月相互の眞情
相通と成り鳥居夫人との文信再開のよろこびを得ま
した後に二十数年振りの事でありました
然るに杉原夫人は不幸にして四年前から腦溢血為
全身不隨の重患で病床にあり鳥居夫人との文信は
無論夫左の代筆を要します 鳥居夫人の失望と
落膽は申様ありません
鳥居夫人から私の一信一月廿二日付から八月十四日付
最近の才甚五便に至る通信の度にかた子夫人の病状
について同情の言葉を幾つも承りました
鳥居夫人自身も亦高血圧の爲御健康を害されて
歩行の自由を失ひ視覚の障害をも訴へて居られ
ます 私は意を決して東上致し四月十三日午前
鳥居夫人にお定をお訪ね致し一々実にお話の
振りの懐旧談を時の福の事を忘れずが長居を差
し控へて下さり名珍りを惜みお方の互に固く握

手を握り毎日を約してお別れしました

其帰途東京を去る夫左は直行して杉原夫人の病床
を訪れ鳥居夫人と會談の様様を精しく報告しま
した此かご夫人のよき一様でありました 私は安心し
ても再会を約して帰郷いたしました 然るに何ぞ計り
杉原夫人は今年七月廿九日 鳥居夫人は今年八月十九日
相前後して突然如昇天の悲報に接し様には 暗然
言ふ事を知り唯痛恨の涙を流す語り心すれば思
鳴咽胸を衝く言葉にふりません 杉原夫人逝去の
報に接した 鳥居夫人の心境亦察するに余りあ
ります此弔意文は失望の極心身の疲弊に悩ま
なかり漸くにして認められたものでありますやがて

杉原夫人自身の絶筆ともなつたのであります 誰は怒
しとも是非一友垣の深い因縁を想はされてふりませぬ
前述の如く杉原の交情關係は更に六十年の久しきに
及ぶ時に晩年に及んで其親交益々深きを加へ共意致
すも將來に期する心かありましたですが實に遺憾の
極みであります

博夫人の生前の謙遜を思ひ且其遺徳進慕
の波料として此弔意文を永遠大切に保管せられ
べきものとの切なる願ひから杉原氏の御同意を
得て 鳥居龍次郎氏の御手許に寄贈致しま
して適宜而処置をお願ひ申し上げ次第であります

昭和三十五年六月

滋賀縣八日市市上羽町
久保たつ識

文様の久保たつ夫人のきみ子



夫 人 の 葬 儀

昭和34年8月21日東京都港区麻布六本木の聖ヨゼフ修道院聖堂において
ベアトス・チュウニッセン神父司式のもと挙行せられた。

左から 鳥居玲子 鳥居幸子 浅川藤治 神父 市原 清
鳥居龍次郎 井下 清 前島康彦 勝又温子
三木文雄 杉原荘介 榊原幸雄 八幡一郎 の 諸氏

内助の功をたてた夫人

博士の死後、きみ子夫人は博士の遺稿「考古学上より見たる遼の文化」の公刊を念願してその整理につとめていたが、昭和三十四年（一九五九）八月十九日東京都文京区本富士町の東京大学医学部付属病院でなくなられた。年齢は七十八歳。

きみ子夫人は学者の妻として生きぬいたかたである。夫の個性と仕事をよく理解し、子女の教育・一家のきりもりをして博士をして学問に専念させたばかりでなく、積極的に博士の満蒙の調査に参加してその研究を助けた。内助の功を全うしたというべきである。



山内清男先生
1902—。考古学者。
文学博士。成城大学講師。



八幡一郎先生
1902—。考古学者。
日本考古学協会委員長。
東京教育大学教授。



甲野 勇先生
1901—。考古学者。
国立音楽大学教授。

一一、人材の輩出

東京帝国大学・国学院大学などにおいて鳥居博士の指導を受けたかたがたは、その後さらに研究を深めて、現在、日本の学界に活躍せられ、あるいは地方史研究に励んでいらる。

その著名なかたを挙げると、東京帝国大学で学んだかたには山内清男・八幡一郎・甲野勇、国学院大学で学んだかたには樋口清之・三木文雄・中川徳治・丸茂武重・埴瑞比古、その他で学んだかたには杉原莊介・三輪善之助・服部清道の諸先生がある。

鳥居博士は晩年、これらの先生がたの活躍を喜び、いよいよ発展するよう念願しておられた。



杉原 莊介 先生
1913—。考古学者。
文学博士。明治大学教授。



三木 文雄 先生
1911—。考古学者。
東京国立博物館考古課
原史室長。



樋口 清之 先生
1909—。考古学者。
文学博士。国学院大学教授。



三輪 善之助 先生
1887—。郷土史・民俗
研究家。



丸 茂 武 重 先生
1912—。歴史・地理学者。
国学院大学講師。



中川 徳治 先生
1910—。考古学者。
国学院大学助教授。



服部 清道 先生
1904—。考古学者。
文学博士。



埴 瑞比古 先生
1902—。笠間稲荷神社宮司。
茨城県文化財専門委員。



徳島県立鳥居記念博物館

一一、徳島県立鳥居記念博物館

徳島県は鳥居龍蔵博士の業績を顕彰するため鳴門市撫養町林崎字北殿町(團山頂)に徳島県立鳥居記念博物館を建設した。

昭和三十九年二月八日起工、昭和四十年(一九六五)三月二十四日竣工開館した。総工費三千五百万円。

建築様式は三層天守閣様式、鉄筋コンクリート四階建て。本館は延坪数四四九・八六平方メートル(一三六・〇七坪)、高さ一七・五メートルである。

内部は四階で、一階は事務室・会議室・整理室・研究室・資料室など、二階・三階が展示室、屋階は展望室となっている。鳥居博士の収集品・研究物・遺品などを展示してある。

構内にあるドルメンは、博士が満州において最初に発見したものをかたどって机型に作り、鳥居龍蔵博士・きみ子夫人の納骨をしてある。



記念館の門標石

文字は徳島県知事・鳥居博士顕彰会長原菊太郎氏の筆。

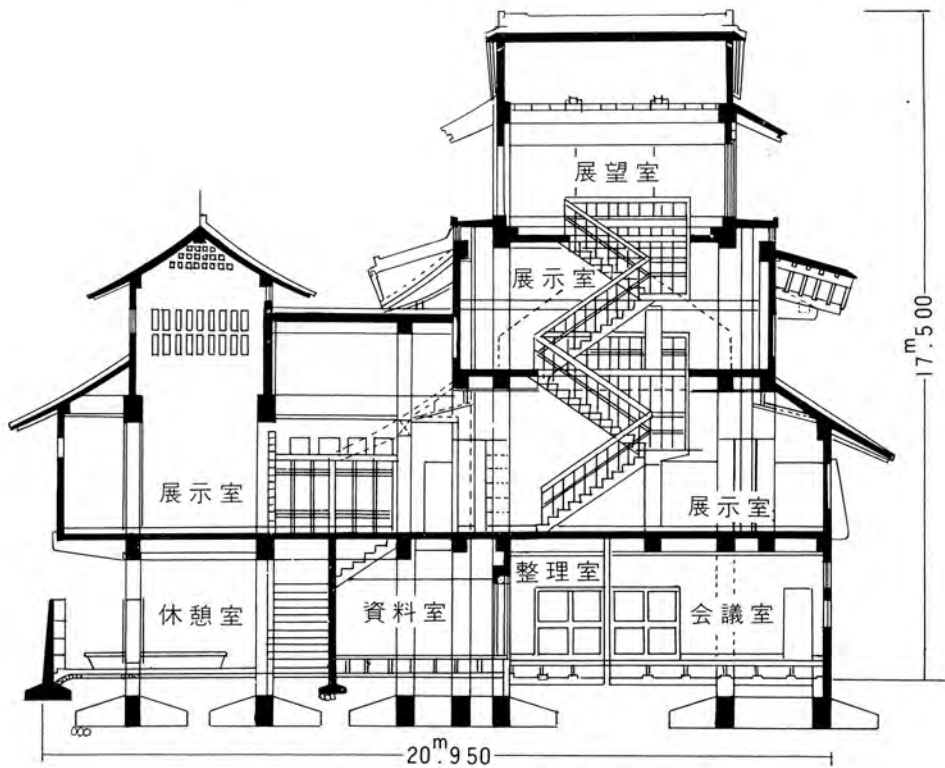


開館記念メダル

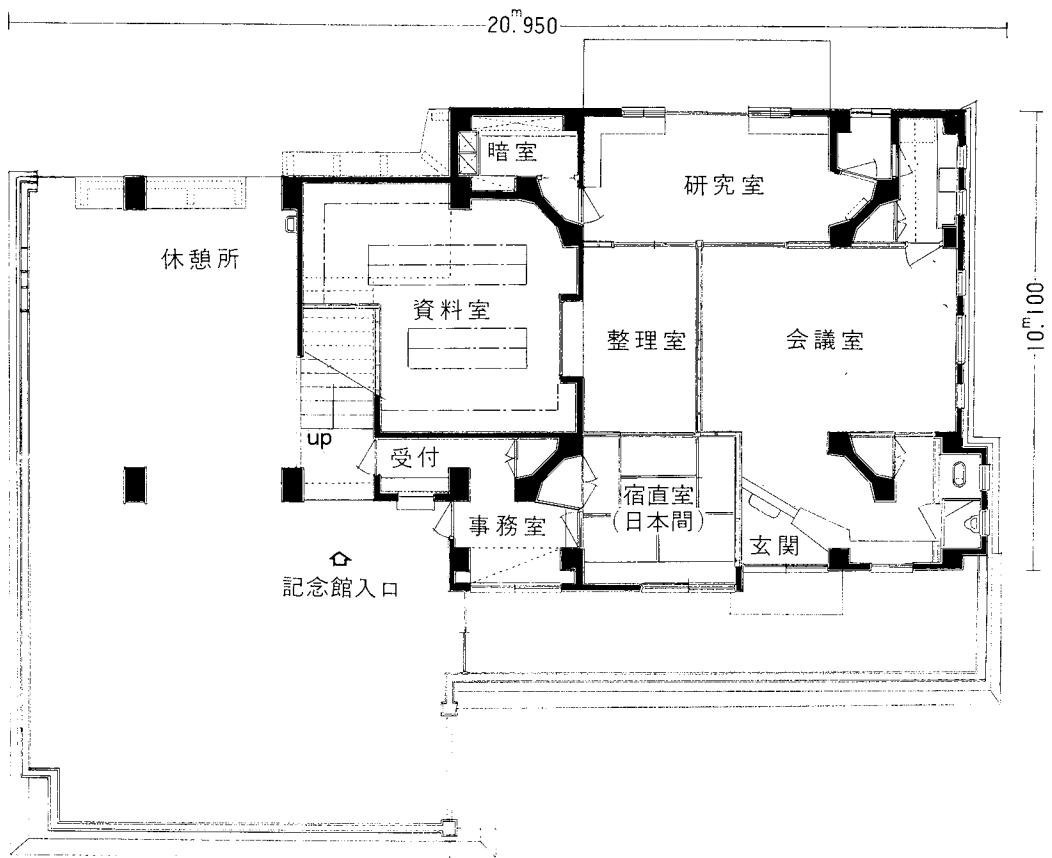
図案は徳島県教育委員会社会教育主事阿部敏雄氏の作。



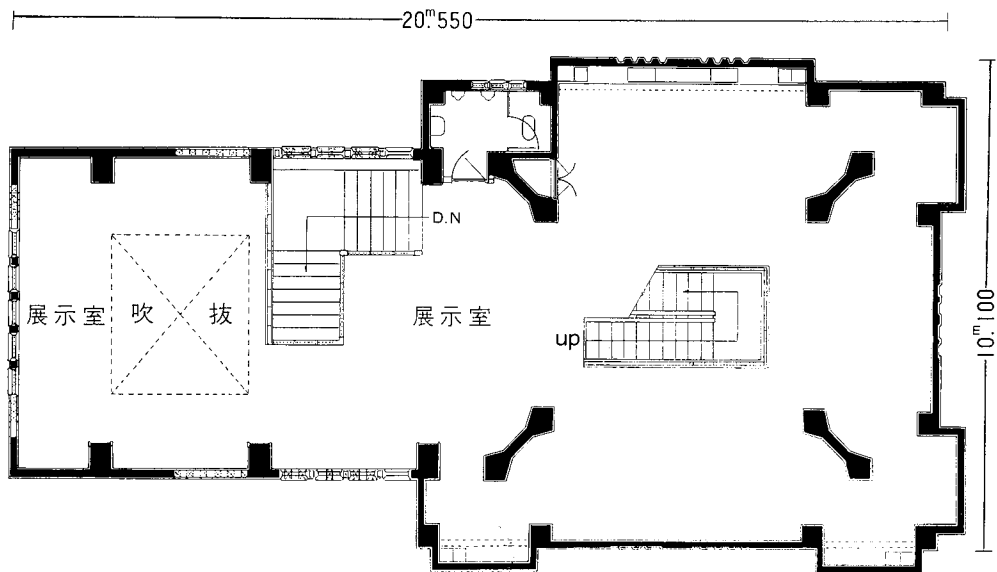
記念館の内部



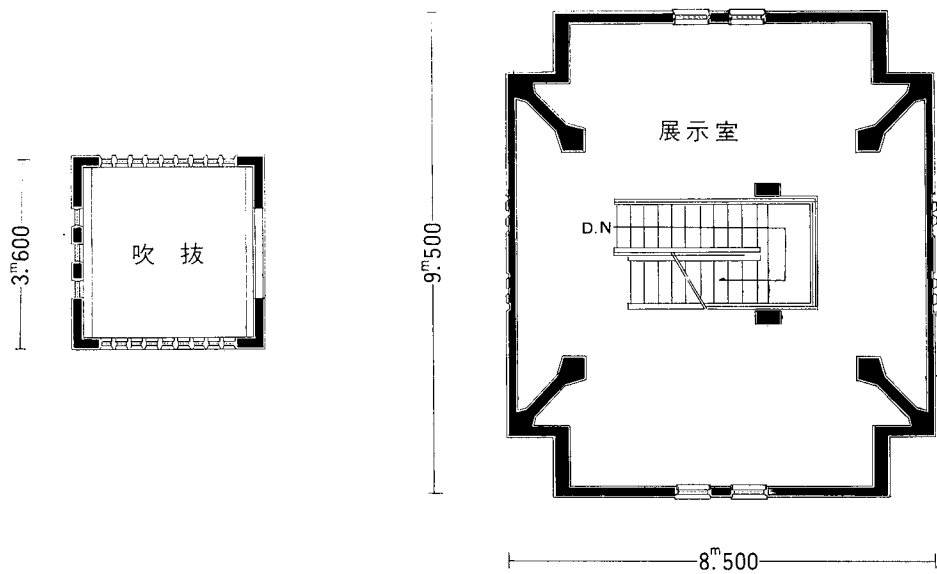
鳥居記念博物館断面図



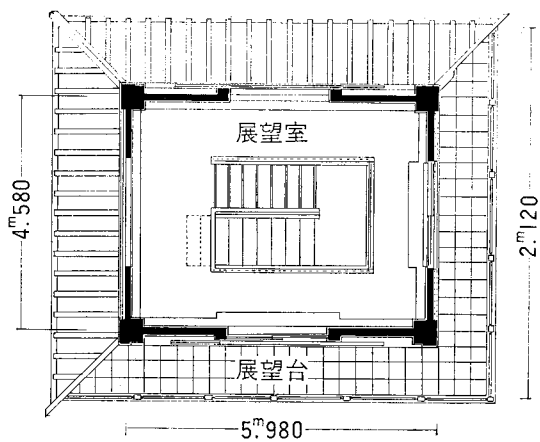
一階平面図



二階平面図



三階平面図



屋階平面図

近世初期から中期にいたるわが国の名城を分析してその美を総合した天守閣の形態を採用したもの。

設計は徳島市の森下建築設計事務所、施工は鳴門市の株式会社亀井組。
徳島県土木部建築課監理。

珍しい中国`木偶、も

故郷 鳥居 収集品の荷ほどき

中国の皇帝陵から発掘した木偶、を調べる仁科興教育長

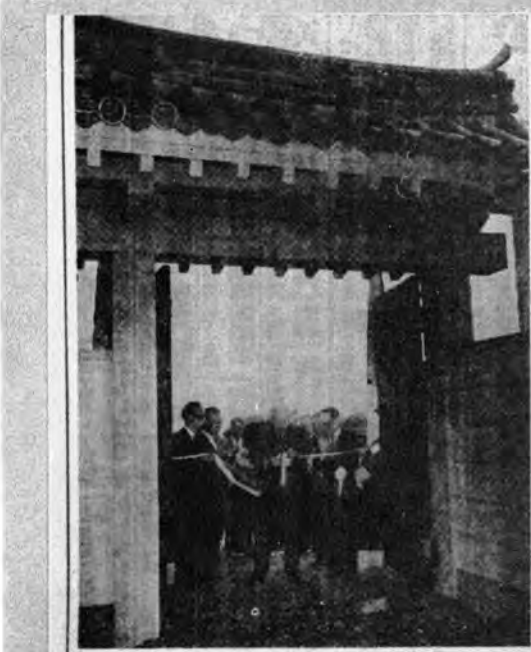


中国の皇帝陵から発掘された木偶、を調べる仁科興教育長

鳥居 故郷

中国の皇帝陵から発掘された木偶、を調べる仁科興教育長

中国の皇帝陵から発掘された木偶、を調べる仁科興教育長



鳥居博物館開く

関係者ら 初参観

鳥居博物館の開館式が、昨日(十三日)午後、本市の鳥居記念館で行われ、関係者らによる開館式が行われた。

開館式には、市長、市教育委員、市議員、市職工、市民代表、関係者らなど約五十人が参加した。

開館式では、鳥居記念館の概要、鳥居の歴史、鳥居の収集品などについて説明が行われた。

鳥居記念館は、鳥居の歴史や鳥居の収集品などを展示する施設として、市民の文化活動の場として活用される予定である。

紅白のテープを切る原知事

鳥居記念館の開館式が、昨日(十三日)午後、本市の鳥居記念館で行われ、関係者らによる開館式が行われた。

開館式には、市長、市教育委員、市議員、市職工、市民代表、関係者らなど約五十人が参加した。

開館式では、鳥居記念館の概要、鳥居の歴史、鳥居の収集品などについて説明が行われた。

鳥居記念館は、鳥居の歴史や鳥居の収集品などを展示する施設として、市民の文化活動の場として活用される予定である。

鳥居記念館開館の新聞記事

上は 昭和39年11月13日付朝日新聞 下は 昭和40年3月24日付徳島新聞(夕刊)



鳴門市名誉市民証

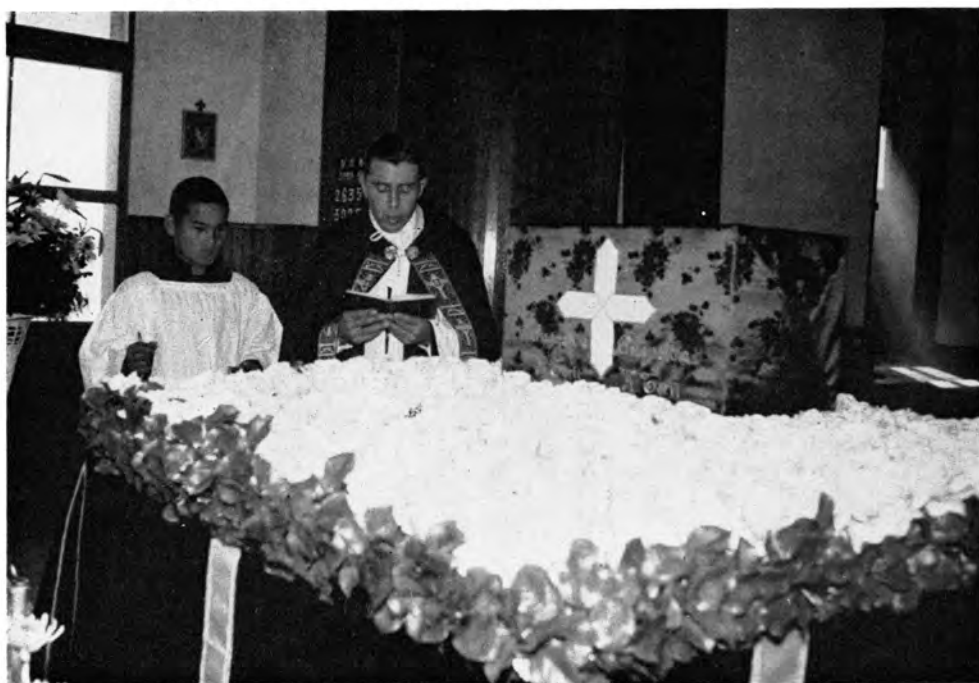


鳴門市名誉市民証追贈式

昭和40年1月14日 鳴門市の聖ヨゼフ・カトリック教会において
鳴門市長谷光次氏から追贈した。

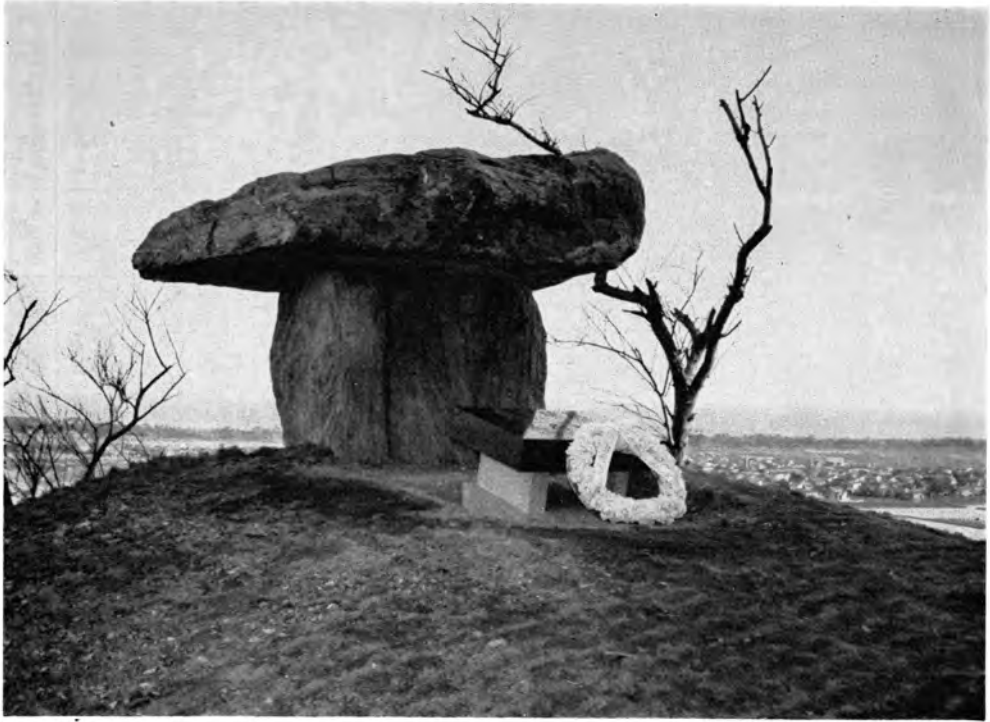


鳥居博士夫妻の遺骨到着 徳島新聞社提供
 昭和40年1月12日鳥居篤次郎氏に抱かれて徳島へ帰ってきた鳥居博士夫妻の遺骨。出迎えているのは徳島県教育委員会教育長仁科義之氏。



納 骨 の ミ サ

昭和40年1月14日鳴門市の聖ヨゼフ・カトリック教会でおこなわれた納骨のミサ（キリスト教の儀式）。司式はシルバー神父。遺骨の箱につけた十字架は鳥居博士が満州の鞍山で遼時代墳墓を発掘したとき出土した十字の瓦磚にかたどったものである。



徳島県立鳥居記念博物館構内のドルメン



ドルメンの墓碑銘

文字は徳島県教育委員会教育長・徳島県立鳥居記念博物館長仁科義之氏の筆。

年 譜

| 年 | 年 齡 | 事 項 | 著 書 | 参 考 |
|----------------|-----|---|-----|---|
| 明治三年 一八七〇 | | 四月四日 阿波国名東郡徳島船場町で生まれた。 | | 九月 平民の姓を許可 |
| 明治四年 一八七一 | | | | 三月 郵便開始 七月 廃藩置県 |
| 明治五年 一八七二 | | | | 八月 学制領布 |
| 明治六年 一八七三 | | | | 一月 徴兵令公布 |
| 明治九年 一八七六 | 六 | 観善小学校に入学した。 | | |
| 明治十年 一八七七 | | 小学校を中途退学し、高等小学校・中学校の課程を独学自習した。 | | 二月―九月 西南の役 四月 東京大学設立 九月 大森貝塚発掘 |
| 明治十七年 一八八四 | 一八 | | | 東京本郷向ガ岡（弥生町）において弥生式土器発見。 人類学研究会を開いた。 |
| 明治十八年 一八八五 | | | | 十二月 内閣制度制定 |
| 明治十九年 一八八六 | 一六 | 東京人類学会に入会した。 | | 東京人類学会創設 |
| 明治二十一年 一八八八 | 一八 | 二月 坪井正五郎氏が徳島の鳥居家を訪問した。 十二月 徳島人類学材料取調仲間を組織した。 | | 四月 市制・町村制公布 五月 学位令実施。初めて |

| | | |
|----------------|----|--|
| 明治二十二年 一八八九 | 二〇 | 九月 修学のため上京した。 十二月 私用のため一度帰国。上京の途中、法隆寺を見学した。 |
| 明治二十三年 一八九〇 | 二〇 | 九月 修学のため上京した。 十二月 私用のため一度帰国。上京の途中、法隆寺を見学した。 |
| 明治二十五年 一八九二 | 二二 | 八月 はじめて千葉県網島の貝塚を発見し発掘した。 十二月 徳島船場町の家をたたみ一家をあげて東京に移住した。 |
| 明治二十六年 一八九三 | 二三 | 東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理係となり、坪井正五郎教授に師事した。 |
| 明治二十七年 一八九四 | 二四 | 秋 子爵阿部正功氏・大野延太郎氏とともに秩父の山中、浦山の土俗調査をおこなった。 |
| 明治二十八年 一八九五 | 二五 | 七月十三日 兄 友太郎が死亡した。 八月―十二月 東京人類学会から派遣せられ遼東半島の調査をおこなった。 |
| 明治二十九年 一八九六 | 二六 | 夏 東京帝国大学から派遣せられ台湾の人類学調査をおこなった。 台湾からの帰途、沖縄に立ち寄り、風俗習慣を調査した。 |
| 明治三十年 一八九七 | 二七 | 夏 徳島県木頭の土俗調査をおこなった。 十月 東京帝国大学から派遣せられ、台湾紅頭嶼の調査をおこなった。 |
| 明治三十一年 一八九八 | 二八 | 六月二日 東京帝国大学理科大学助手に任せられた。 台湾の調査(第三回)をおこなった。 |
| | | 博士号を授けた。 |
| | | 二月 大日本帝国憲法発布 |
| | | 十月 教育勅語発布 |
| | | 十一月 第一回帝国議会議会 |
| | | 八月 日清戦争開戦 |
| | | 四月 日清講和条約調印 |
| | | 三國干渉 |
| | | 考古学会(のち「日本考古学会」と改称)創設 |

「椰子の下露」

| | | | | |
|----------------|----|---|--|---------------------|
| 明治三十二年 一八九九 | 二九 | 五月―六月 東京帝国大学から出張を命ぜられ北千島の人類学調査をおこなった。 | | 六月 条約改正（治外法権 廢止） |
| 明治三十三年 一九〇〇 | 三〇 | 台湾の調査（第四回）をおこなった。 四月十日 新高山に登った。 | | |
| 明治三十四年 一九〇一 | 三一 | 秋 徳川頼倫侯とともに岐阜県（飛騨）白川の古部落および石川県能登半島の人類学・土俗学調査をおこなった。 十二月 徳島市市原必資氏の三女市原キミと結婚した。 | 七月十七日 「紅頭嶼土俗調査報告」東京帝国大学 七月 「人種誌」嵩山房 「紅頭嶼写真帳」東京帝国大学 七月五日 「千島アイヌ」吉川弘文館 | 一月 日英同盟条約調印 |
| 明治三十五年 一九〇二 | 三二 | 七月―三十六年三月 東京帝国大学理科大学から派遣せられ西南支那の苗族調査をおこなった。 | 七月十七日 「紅頭嶼土俗調査報告」東京帝国大学 七月 「人種誌」嵩山房 「紅頭嶼写真帳」東京帝国大学 七月五日 「千島アイヌ」吉川弘文館 | |
| 明治三十六年 一九〇三 | 三三 | | 七月五日 「千島アイヌ」吉川弘文館 | |
| 明治三十七年 一九〇四 | 三四 | 四月 奈良県・大阪府・和歌山県・三重県の人類学調査をおこなった。 六月―七月 沖繩諸島の調査をおこなった。 | 六月十六日 「人種学」大日本図書株式会社 | 二月 日露戦争開戦 |
| 明治三十八年 一九〇五 | 三五 | 七月二十八日 東京帝国大学理科大学講師を嘱託せられた。 八月二十八日 長男龍雄が生まれた。 九月―十一月 東京帝国大学から派遣せられ満州の調査（第二回）をおこなった。 | | 九月 日露講和条約調印 |
| 明治三十九年 一九〇六 | 三六 | 三月 きみ子夫人が蒙古喀喇沁王府女学堂に赴任した。 四月 蒙古喀喇沁王府に行き教育顧問・男子学堂の教習（教授）となった。 | 十月二十四日 鳥居きみ子著「蒙古行」読売新聞社 | 十一月 南満洲鉄道会社創立 |

| | | | | |
|----------------|----|--|--|----------------------|
| 明治四十年 一九〇七 | 三七 | 一月 夫妻がいったん帰国した。 三月二十三日 長女幸子が生まれた。 六月 親子三人で蒙古の調査(第二回)に出発した。 十二月 蒙古調査旅行から帰った。 | 七月一日 「苗族調査報告」 東京帝国大学 | |
| 明治四十一年 一九〇八 | | | | |
| 明治四十二年 一九〇九 | | 三月―五月 満州の調査(第三回)をおこなった。 五月三日 父新次郎が死亡した。 | 十二月 「南滿洲調査報告」 東京帝国大学 | 八月 日韓合併条約調印 |
| 明治四十三年 一九一〇 | 四〇 | 夏 朝鮮の予備調査をおこなった。 五月二日 二女緑子が生まれた。 | 十一月 「東京帝国大学理科大学紀要 第二十八冊第六編 Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose」 東京帝国大学 | |
| 明治四十四年 一九一一 | 四一 | 春 朝鮮の調査(第一回)をおこなった。 七月 南樺太の調査をおこなった。 | 六月十五日 「蒙古旅行」 博文館 | 条約改正(関税の自主確立) |
| 明治四十五年 一九一二 | 四二 | 春 朝鮮の調査(第二回)をおこなった。 六月十九日 母とく子が死亡した。 | 一月十六日 「東京帝国大学理科大学紀要 第三十二冊第四編 Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose. (Le Facicule)」 東京帝国大学 | |
| 大正二年 一九一三 | 四三 | 三月 宮崎県の調査をおこなった。 朝鮮の調査(第三回)をおこなった。 五月二十六日 坪井正五郎博士が露都で死亡した。 | | |
| 大正三年 一九一四 | 四四 | 朝鮮の調査(第四回)をおこなった。 | 「東京帝国大学理科大学紀要 第三十 | 八月 日独戦争開戦(第一次世界大戦参加) |

| | | | | |
|--------------|----|---|---|--|
| 大正四年 一九一五 | 四五 | 朝鮮の調査(第五回)をおこなった。 | 十月二十一日 「東京帝国大学理科大学紀要 第三十 六冊第八編 Etudes Archéologiques et Ethnologiques, Populations Préhistoriques de la Mandchourie Meridionale.」 東京帝国大学 | 六冊第四編 Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Populations Primitives de la Mongolie Oriental.」東京帝国大学 十二月三十日 「東京帝国大学理科大学紀要 第三十 冊第六編 Etudes Anthropologiques. Les Mandchoux.」東京帝国大学 |
| 大正五年 一九一六 | 四六 | 朝鮮の調査(第六回)をおこなった。 七月六日 二男龍次郎が生まれた。 | | |
| 大正六年 一九一七 | 四七 | 七月―八月 大阪毎日新聞社長本山彦一氏とともに奈良 県・大阪府・和歌山県などの調査をおこなった。 | | |
| 大正七年 一九一八 | 四八 | 十一月 長野県諏訪郡の調査に着手した。 | 七月二十日 「有史以前の日本」磯部甲陽堂 | 八月 シベリヤ出兵 |
| 大正八年 一九一九 | 四九 | 六月―十二月 東京帝国大学から派遣せられ東部シベリ アの調査(第一回)をおこなった。 | 一月二十九日 「東京帝国大学理科大学紀要 第四十 二冊第一編 Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Les Ainou des Iles Kouriles.」東京帝国大学 | 六月 ヴェルサイユ講和条 約調印 |

大正九年
一九二〇

五〇

四月―五月 長野県の調査をおこなった。
七月―八月 福島県・新潟県の調査をおこなった。
フランスパリー学士院からパルム・アカデミー賞を贈られた。
十二月 パリーの万国聯盟人類学院から正会員および日本代表委員に推薦せられた。

大正十年
一九二一

五一

五月十日 文学博士の学位(旧学位)を文部大臣から授与せられた。
六月―八月 北樺太(サハレン州)と東部シベリアのアムール河畔の調査をおこなった。
八月 長野県上伊那・木曾地方の調査をおこなった。
大阪毎日新聞社長本山彦一氏から鉄筋コンクリート造りの書庫を贈られた。

大正十一年
一九二二

五二

東京帝国大学助教授となった。
二月七日 文部省から理学部勤務を命ぜられた。
四月十一日 国学院大学講師になった。
四月 徳島市城山の貝塚を発掘した。

大正十二年
一九二三

五三

二月 長男龍雄がフランスのパリーに留学、ソルボンヌ大学および人類学院に学んだ。
五月十日 国学院大学教授となった。

大正十三年
一九二四

五四

長女幸子がフランスのパリーに留学した。
六月二日 東京帝国大学を辞職した。

一月 国際聯盟成立

三月三十一日

「古蹟調査特別報告 第二冊
北滿州及び東部西伯利亞調査報告」
朝鮮総督府

七月十五日

「人類学及人種学上より北東亞細亞」
岡書院

九月五日

「武蔵野及其周圍」 磯部甲陽堂

九月二十日

「日本周圀民族の原始宗教」 岡書院

十二月二十五日

「諏訪史第一卷」信濃教育会諏訪部会

九月 関東大震災

| | | | | | | |
|---------------|----|---|---------|--|--------------------------|---|
| 大正十四年 一九二五 | 五五 | 十月 宮崎県延岡の調査をおこなった。 | 十二月二十五日 | 「下伊那の先史及原史時代 図版」 信濃教育会下伊那部会 | 四月 治安維持法公布 五月 普通選挙法公布 | |
| 大正十五年 一九二六 | 五六 | 四月 宮崎県延岡の調査をおこなった。 秋 中国山東省の調査をおこなった。 | 一月十日 | 「有史以前の跡を尋ねて」 雄山閣 三月二十五日 「武蔵野及其有史以前」 磯部甲陽堂 五月二十五日 「有史以前の日本」(第十版) 磯部甲陽堂 | 十月十二日 | 「人類学上より我が上代の文化」 叢文閣 |
| 昭和二年 一九二七 | 五七 | 一月三十日 龍雄がパリで死亡した。 四月 幸子が兄の遺髪を持ってパリから帰国した。 八月―十月 満州の調査(第四回)をおこなった。 | 一月一日 | 「極東民族 第一巻」 文化生活研究会 三月二十五日 「先史及原史時代の上伊那」 信濃教育会上伊那部会 | 七月十五日 | 第二回 延岡附近古墳調査 第三回 延岡附近古墳調査 東臼杵郡史蹟調査会 |
| 昭和三年 一九二八 | 五八 | 上智大学の創立に尽力し、文学部長・教授に就任した。 | 八月二十八日 | 「人類学上西南支那」 富山房 「より見たる」 | 一月十五日 | 「上代の東京と其周囲」 磯部甲陽堂 |
| | | | 二月十五日 | 鳥居きみ子著 「土俗学上より蒙古」 大鐘閣 | 二月十五日 | 「満蒙の探査」 萬里閣書房 |

| | | | | |
|--------------|----|--|---|---------------------------------------|
| 昭和四年 一九二九 | 五九 | 四月―七月 東部シベリアの調査(第三回)および満州の調査(第五回)をおこなった。(幸子同行。満州調査には夫人も同行。) 東方文化学院東京研究所創立とともにその評議員・研究員となった。 | 十二月 「齊の国に就て(支那古代文化の一面)」 (大倉男爵招待会講演筆記) | 五月 上智大学が大学令による大学に昇格認可 七月 民俗学会創設 |
| 昭和五年 一九三〇 | 六〇 | 八月―十二月 蒙古の調査(第三回)をおこない、遼代の皇帝陵その他遺跡について調査した。(夫人同行。) | 五月二十五日 鳥居龍蔵・君子・幸子共著 「西比利亞から滿蒙へ」 大阪屋号書店 三月十五日 鳥居幸子著「白百合」鳥居幸子 | 五月 上智大学が大学令による大学に昇格認可 七月 民俗学会創設 |
| 昭和六年 一九三一 | 六一 | 五月 板野郡川内村(現在、徳島市川内町)の村史藍修のため帰郷した。 満州の調査(第六回)をおこなった。(夫人・龍次郎同行) | 一月二十日 鳥居龍蔵・鳥居きみ子共著 「滿蒙を再び探る」 六文館 | 九月 満州事変おこる |
| 昭和七年 一九三二 | 六二 | 七月―八月 満州の調査(第七回)および朝鮮の調査(第七回)をおこなった。(緑子・龍次郎同行。) 鳥居人類学研究所から人類学・考古学研究視察のため鳥居緑子をアメリカ合衆国に派遣した。 | | |
| 昭和八年 一九三三 | 六三 | 八月―十二月 東方文化学院東京研究所から派遣せられた蒙古の調査(第四回)と満州の調査(第八回)をおこなった。(夫人・緑子・龍次郎同行) 十二月三十一日 国学院大学教授を辞職した。 | | 三月 国際聯盟脱退 |
| 昭和九年 一九三四 | 六四 | イギリスの人類学者ブラウン教授が日本に来て鳥居博士を訪問した。 | | 日本民族学協会創設 |
| 昭和十年 一九三五 | 六五 | 夏 ベルギーのブラッセルで開かれた人類学万国連合大会に「日本銅鐸考」の論文を提出した。 | 五月三十一日 「滿蒙に於ける契丹の遺跡に就て」 東亜調査会 | 民間伝承の会(のち「日本民俗学会」と改称)創設 |

| | | | | |
|---------------|----|--|---|-------------------------|
| 昭和十一年 一九三六 | | 十一月・十二月 東方文化学院東京研究所から派遣せられ満州・北支那の調査(第九回)をおこなった。(夫人・龍次郎同行) | 十月二十日 「上代の日向延岡」 鳥居人類学研究所 | |
| 昭和十二年 一九三七 | 六七 | 四月・十三年二月 外務省から文化使節としてブラジルに派遣せられ、ペルー・ボリビアでインカ帝国の遺跡を調査した。 | 八月二十日 「満蒙其他の思ひ出」 岡倉書房 「考古学上遼之文化図譜」四冊 より見たる遼 東方文化学院東京研究所 | |
| 昭和十三年 一九三八 | 六八 | 秋 華北における遼および北宋関係の遺跡を調査した。 (龍次郎同行) | 一月七日 「遼の文化を探る」 章華社 | 七月 支那事変(日華事変) おこる |
| 昭和十四年 一九三九 | 六九 | 五月 中華民国北京燕京大学から招聘せられ、八月その客座教授に就任した。 | 十二月二十八日 「Sculptured Stone Tombs of the Liao Dynasty」 ハーバード燕京研究所 | 十二月 大東亜戦争(太平洋戦争) 開戦 |
| 昭和十五年 一九四〇 | 七〇 | 満州の遼代画像石墓の調査、栃木城のドルメン等の再調査、中国山西省大同雲崗の石仏ならびに山東省における石器時代から周・漢の各種遺跡の調査をおこなった。(昭和十六年におよんだ) | ハーバード燕京研究所 (Occasional Papers No. 5) | |
| 昭和十六年 一九四一 | | 十二月 戦争勃発のため北京燕京大学は閉鎖されたが、北京において研究を続行した。 | | |
| 昭和十七年 一九四二 | | | | |
| 昭和十八年 一九四三 | | | 六月十八日 「黒龍江と北樺太」 生活文化研究会 | |

| | |
|------------------------|--|
| <p>昭和二十年 一九四五</p> | <p>八月 終戦による大学再開とともに再び客座教授となった。その後帰国するまで蒙古を中心とする遼代文化の研究を続行した。</p> |
| <p>昭和二十一年 一九四六</p> | |
| <p>昭和二十三年 一九四八</p> | |
| <p>昭和二十六年 一九五一</p> | <p>七月 燕京大学を退職した。 十二月 中国から帰国した。</p> |
| <p>昭和二十八年 一九五三</p> | <p>一月十四日 東京において死亡した。</p> |
| <p>昭和三十四年 一九五九</p> | <p>八月十九日 きみ子夫人が東京において死亡した。</p> |
| | <p>一月十日 「ある老学徒の手記」 考古学とともに六十年 朝日新聞社</p> |
| | <p>八月 ポツダム宣言受諾・無条件降伏</p> |
| | <p>十一月 日本国憲法公布</p> |
| | <p>四月 日本考古学協会創設</p> |
| | <p>九月 サンフランシスコ講和条約調印</p> |

参 考 文 献

資 料 提 供

あ と が き

鳥居龍蔵 ある老学徒の手記

「考古学」とともに六十年」

昭和二十八年一月 朝日新聞社

八幡一郎 故鳥居博士の足跡

(人類学雑誌 第六十三卷第一号)

昭和二十八年五月 日本人類学会

(人類学雑誌 第六十三卷第二号)

昭和二十八年八月 日本人類学会

山内清男 故鳥居龍蔵先生著作目録

(人類学雑誌 第六十三卷第三号)

昭和二十八年十一月 日本人類学会

八幡一郎 故鳥居龍蔵博士と民族学

(民族学研究 第十七卷第三・四号)

昭和二十八年十月 日本民族学協会

樋口清之 独学の世界的人類学者

鳥居龍蔵博士

(中学時代 第五卷第一号)

昭和二十八年四月 旺文社

駒井和爱 鳥居龍蔵 (大人名事典 第四卷 昭和二十九年二月 平凡社)

小林行雄 鳥居龍蔵

(図解考古学辞典 昭和三十四年六月 創元社)

八幡一郎 鳥居龍蔵

(日本考古学辞典 昭和三十七年十二月 東京堂)

(鳥居博士の著書および各種雑誌に掲載せられた鳥居博士伝記関係の記事は省略)

東京大学理学部人類学教室

主任教授 医学博士 鈴木尚

助教授 理学博士 渡辺直経

講師 理学博士 渡辺仁

助手 石本剛一

国学院大学助教授 中川徳治

東京都郷土史研究家 三輪善之助

徳島市教育委員会教育長 島村萬舞

鳴門市教育委員会教育長 朝野 蒼

徳島大学文学部教授 福井好行

徳島市郷土史研究家 飯田義資

徳島市郷土史研究家 山本武男

徳島市内町小学校長 久次米 英夫

徳島・名西高等学校教諭 田中善隆

羽浦町 吉崎徳市

神戸市 中井美文

国学院大学

国立国会図書館

大阪府立図書館

徳島県立図書館

徳島新聞社

朝日新聞社

毎日新聞社

読売新聞社

日本放送協会

東京書籍株式会社

徳島市役所

鳴門市役所

(順序不同 敬称略)

この書物の編集にあたって、上記の文献を参考とさせていただき、上記のかたがたから資料のご提供やご教示をいただきました。ここに著者の先生がたならびにお力添えをいただきましたかたがたに心から感謝いたします。

わたくしとしてはできるだけ努力したつもりではありますが、浅学のためと編集期間の制約のため、資料の収集・解説ともに十分などころのあることが心残りであります。

今後補筆改訂してよりよいものにしたいたいと念願していますので、関係の先生がたはじめ皆様がたからこの書物の不備なところをご指摘ご垂教いただきますとともに、鳥居博士に関する資料は多少にかかわらずご提供賜りますようお願い申し上げます。

岩村武勇

昭和四十年八月二十日印刷
昭和四十年九月一日發行

著者 鳥居博士顯彰会

印刷者 原田印刷出版株式会社

德島県鳴門市撫養町林崎
德島県立鳥居記念博物館内

發行所 鳥居博士顯彰会

平成二七年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業
鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業Ⅱ

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館五周年記念

講演会「鳥居龍蔵の再発見―国内外の視点から―」 参考資料1

図説 鳥居龍蔵伝（複製版）

二〇一六年二月二日発行

発行 鳥居龍蔵記念博物館パワーアップ事業実行委員会

〒七七〇・八〇七〇 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館内

TEL〇八八―六六八―二五四四 FAX〇八八―六六八―七一九七

印刷・製本 株式会社教育出版センター